秋田県文化財調査報告書第442集

柏　木　岱　Ⅱ　遺　跡

－高速交通関連道路整備事業県道琴丘上小阿仁線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

２００８・７

秋 田 県 教 育 委 員 会

シンボルマークは、北秋田市白坂(しろざか)遺跡出土の
「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7㎝、凝灰岩。

柏木岱（かしわぎたい）Ⅱ遺跡

－高速交通関連道路整備事業県道琴丘上小阿仁線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

２００８・７

秋田県教育委員会

柏木岱Ⅱ遺跡遠景（南東から）

柏木岱Ⅱ遺跡遠景（北西から）

序

本県には、これまでに発見された約 4,900 か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備や地域に根ざした県道の整備は、地域が活発に交流・連携する秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、県道琴丘上小阿仁線建設工事に先立って、平成 19 年度に三種町において実施した柏木岱Ⅱ遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑等の遺構や、三脚石器などの遺物が見つかりました。

本書が、ふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、協力をいただきました秋田県山本地域振興局建設部、三種町教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成 20 年 7 月

秋田県教育委員会

教育長　根　岸　　均

例　言

1　本書は、高速交通関連道路整備事業県道琴丘上小阿仁線建設工事に伴い、平成 19(2007) 年度に発掘調査した三種町に所在する柏木岱Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。調査の内容については、すでにその一部が埋蔵文化財センター年報などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。

2　本書の６ページに使用した地図は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図（小又口）である。

3　遺跡基本層位と遺構内層位の土色の表記は、農林水産省水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帳』2003 年版によった。

4　本書に使用した空中写真は、株式会社シン技術コンサルに撮影を委託したものである。

5　放射性炭素年代測定・樹種同定は、株式会社パレオ・ラボに分析を委託したものである。

6　本書の草稿執筆は、山田徳道、藤本玲子が行い、山田が加筆・編集を行った。

凡　例

1　本報告書に収載した遺跡図面等に付した方位は座標北である。

2　遺跡基本層位にはローマ数字を、遺構内層位には算用数字を使用した。

3　遺構番号は、その種類ごとに下記の略記号を用い、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。

ＳＩ・・・竪穴住居跡　　ＳＢ・・・掘立柱建物跡　　ＳＲ・・・土器埋設遺構

ＳＫ・・・土坑　　ＳＸ・・・性格不明遺構　　ＳＫＰ・・・柱穴様ピット

なお、遺構図面中に記したＰは竪穴住居跡、掘立柱建物跡に伴うピットを示している。

4　挿図の縮尺については原則として次のとおりである。

遺構　土器埋設遺構　：１／20　　その他の遺構　：１／40

遺物　土器　：１／３　　剥片石器　：１／２　　礫石器　：１／３

5　図版中の遺物番号は、挿図中の遺物番号に対応する。

目　次

序
例言・凡例
目次(挿図･表･図版目次)
第１章　はじめに･･･････････････････１
　第１節　調査に至る経過･･･････････１
　第２節　調査要項･･･････････････１
第２章　遺跡の環境･･･････････････２
　第１節　遺跡の位置と立地･･･････２
　第２節　歴史的環境･･･････････５
第３章　発掘調査の概要･･･････････８
　第１節　遺跡の概観･･･････････８
　第２節　調査の方法･･･････････８
　第３節　調査の経過･･･････････９
　第４節　整理作業の方法と経過･･･９
第４章　調査の記録･･･････････10
　第１節　基本層序･･･････････10
　第２節　検出遺構と出土遺物･･･12
　第３節　遺構外出土遺物･･･33
第５章　自然科学的分析･･･61
　第１節　放射性炭素年代測定･･･61
　第２節　柏木岱Ⅱ遺跡出土炭化材の
　　樹種同定･･･65
第６章　まとめ･･･67
図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図･･･２
第２図　周辺地形図･･･３
第３図　遺跡周辺の地形区分図･･･４
第４図　柏木岱Ⅱ遺跡と周辺遺跡位置図･･･６
第５図　基本土層図･･･10
第６図　基本土層位置図･･･10
第７図　遺構配置図、
　確認調査トレンチ位置図･･･11
第８図　ＳＩ78竪穴住居跡･･･13
第９図　ＳＩ94竪穴住居跡、
　ＳＫ76・103土坑･･･14
第10図　ＳＢ69掘立柱建物跡･･･16
第11図　ＳＢ100・101掘立柱建物跡･･･17
第12図　ＳＢ102掘立柱建物跡･･･19
第13図　ＳＲ12・45土器埋設遺構、ＳＫ15、
　ＳＫ71土坑、ＳＸ46性格不明遺構･･･21
第14図　遺構内出土遺物(１)･･･25
第15図　遺構内出土遺物(２)･･･26
第16図　遺構内出土遺物(３)･･･27
第17図　遺構内出土遺物(４)･･･28
第18図　遺構内出土遺物(５)･･･29
第19図　遺構内出土遺物(６)･･･30
第20図　遺構外出土遺物　土器(１)･･･36
第21図　遺構外出土遺物　土器(２)･･･37
第22図　遺構外出土遺物　土器(３)･･･38
第23図　遺構外出土遺物　土器(４)･･･39
第24図　遺構外出土遺物　石器(１)･･･40
第25図　遺構外出土遺物　石器(２)･･･41
第26図　遺構外出土遺物　石器(３)･･･42
第27図　遺構外出土遺物　石器(４)･･･43
第28図　遺構外出土遺物　石器(５)･･･44
第29図　遺構外出土遺物　石器(６)･･･45
第30図　遺構外出土遺物　石器(７)･･･46
第31図　遺構外出土遺物　石器(８)･･･47
第32図　遺構外出土遺物　石器(９)･･･48
第33図　遺構外出土遺物　石器(10)･･･49
第34図　遺構外出土遺物　石器(11)･･･50
第35図　遺構外出土遺物　石器(12)･･･51
第36図　遺構外出土遺物　石器(13)･･･52
第37図　遺構外出土遺物　石器(14)･･･53
第38図　遺構外出土遺物　石器(15)･･･54
第39図　遺構外出土遺物　石器(16)･･･55
第40図　暦年較正結果･･･64

表　目　次

第１表　柏木岱Ⅱ遺跡周辺の遺跡一覧……７
第２表　ＳＩ78竪穴住居跡柱穴計測表……13
第３表　ＳＢ69掘立柱建物跡柱穴計測表……16
第４表　ＳＢ100・101掘立柱建物跡
　　柱穴計測表……19
第５表　ＳＢ102掘立柱建物跡柱穴計測表……19
第６表　柱穴様ピット一覧……24
第７表　遺構内出土土器観察表（１）……31
第８表　遺構内出土土器観察表（２）……32
第９表　遺構内出土石器計測表……32
第10表　遺構外出土土器観察表（１）……56
第11表　遺構外出土土器観察表（２）……57
第12表　遺構外出土石器計測表（１）……58
第13表　遺構外出土石器計測表（２）……59
第14表　遺構外出土石器計測表（３）……60
第15表　測定試料及び処理……61
第16表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の
　　結果……62
第17表　出土炭化材の詳細とその樹種……65

図　版　目　次

巻頭図版１　柏木岱Ⅱ遺跡遠景（南東から）
巻頭図版２　柏木岱Ⅱ遺跡遠景（北西から）
図版１－１　ＳＩ78竪穴住居跡（北から）
　　２　ＳＩ94竪穴住居跡（西から）
　　３　ＳＩ94竪穴住居炉跡（西から）
　　４　ＳＩ94炉・ＳＫ76・ＳＫＰ77断面
　　（南西から）
　　５　ＳＩ94炉・ＳＫ76・ＳＫＰ77断面
　　（北東から）
図版２－１　ＳＢ69掘立柱建物跡（南西から）
　　２　ＳＢ100・101・102掘立柱建物跡
　　（北西から）
図版３－１　ＳＢ100・101掘立柱建物跡
　　（北東から）
　　２　ＳＢ100－Ｐ２・ＳＢ101－Ｐ２
　　柱穴断面（南西から）
　　３　ＳＢ102掘立柱建物跡（北から）
図版４－１　ＳＫ15・71土坑（東から）
　　２　ＳＫ15土坑断面（西から）
　　３　ＳＫ15土坑遺物出土状況（東から）
　　４　ＳＫ15土坑遺物出土状況（西から）
図版５－１　ＳＲ12土器埋設遺構（西から）
　　２　ＳＲ45土器埋設遺構（南から）
　　３　ＳＸ46性格不明遺構（南から）
　　４　ＭＦ54・ＭＥ54グリッド遺物出土
　　状況
　　５　三脚石器出土状況
　　６　凹石出土状況
　　７　土器・石器出土状況
　　８　作業風景
図版６－１　ＳＩ78出土遺物
　　２　ＳＩ94炉、ＳＢ69・100・101
　　出土遺物
図版７－１　ＳＩ94、ＳＢ69・100・101、
　　ＳＫ15出土遺物
　　２　ＳＲ12出土遺物
図版８－１　ＳＲ45出土遺物
　　２　ＳＫ15出土遺物
図版９－１　ＳＫ15出土遺物
　　２　ＳＫ15出土遺物
図版10－１　ＳＫ15・76、ＳＫＰ49出土遺物
　　２　ＳＫ76、ＳＫＰ53・75・90・91
　　出土遺物
図版11－１　遺構外出土土器（１）
図版12－１　遺構外出土土器（２）
図版13－１　遺構外出土土器（３）
図版14－１　遺構外出土土器（４）
図版15－１　遺構外出土石器（１）
図版16－１　遺構外出土石器（２）
図版17－１　遺構外出土石器（３）
図版18－１　遺構外出土石器（４）
図版19－１　遺構外出土石器（５）
図版20－１　遺構外出土石器（６）
図版21－１　遺構外出土石器（７）
図版22　出土炭化材の電子顕微鏡写真

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

県道琴丘上小阿仁線は、三種町の一般国道７号を起点とし、上小阿仁村の一般国道285号を終点とする延長約20㎞の幹線道路であり、県道能代五城目線とともに一般国道７号・国道285号を補完する秋田県北部地域における内陸縦横断道として重要な路線である。また、琴丘能代道路琴丘森岳Ｉ・Ｃへのアクセス道路であるとともに、上岩川地区の生活道路でもある。この県道琴丘上小阿仁線は近年、交通量の増加に伴い、道路幅が狭いうえに歩道が未設置であるなどの交通安全上の問題点が表面化してきた。そのため秋田県建設交通部では、現道隘路の解消を図り、Ｉ・Ｃアクセスの強化と安全かつ円滑な交通の確保を目的とした道路整備を計画した。

計画路線内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、道路工事に先立ち、秋田県建設交通部より秋田県教育委員会に埋蔵文化財包蔵地の確認と今後の対応について調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会では、平成18年５月８日と６月15・16日に計画路線内の分布調査を実施した。その結果、計画路線内に新発見の遺跡である柏木岱Ⅱ遺跡が確認された。

この分布調査をふまえ、秋田県埋蔵文化財センターでは、平成18年10月16日から10月27日まで柏木岱Ⅱ遺跡の確認調査を実施し、工事区内の遺跡面積を確定した。これを受けて秋田県教育委員会と秋田県建設交通部で協議した結果、記録作成の措置をとることで合意し、秋田県埋蔵文化財センターで翌年度の発掘調査計画を策定した。

以上の経緯に基づき、秋田県埋蔵文化財センターは、工事に先立って平成19年５月15日から６月12日まで柏木岱Ⅱ遺跡の発掘調査を実施した。

第２節　調査要項

遺　跡　名	柏木岱Ⅱ遺跡（略記号：３ＫＧＴⅡ）
遺跡所在地	秋田県山本郡三種町上岩川字柏木岱15外
調査期間	平成19年５月15日～平成19年６月12日
調査面積	700㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	山田徳道（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　学芸主事）
	袴田道郎（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　学芸主事）
	平野左近（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）
総務担当者	時田慎一（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　副主幹）
調査協力機関	秋田県山本地域振興局建設部　三種町教育委員会

第２章　遺跡の環境

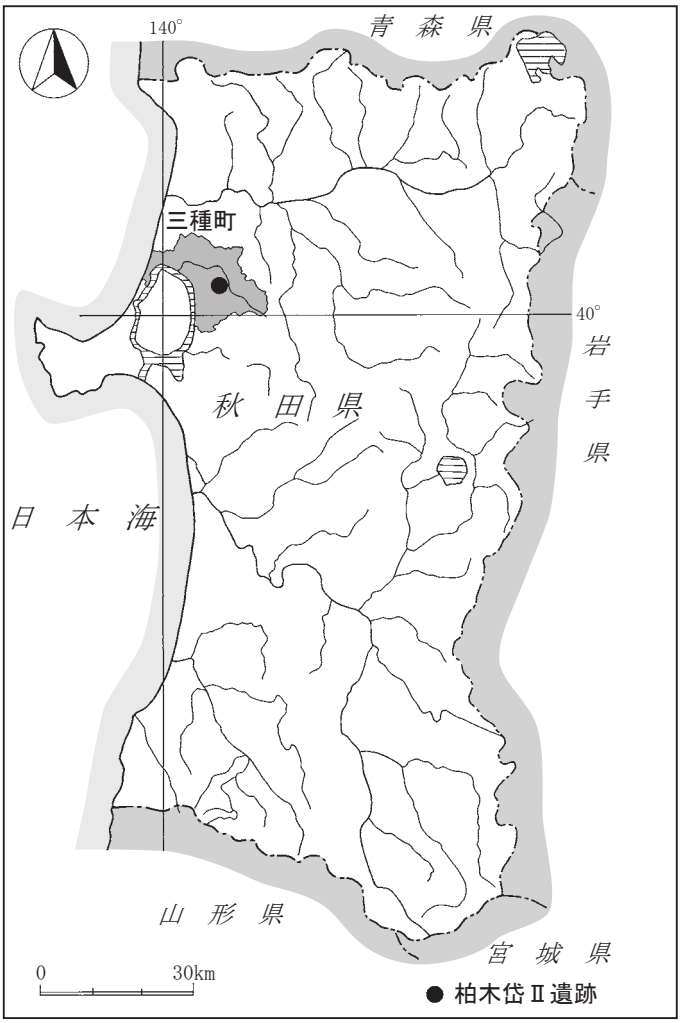
第１節　遺跡の位置と立地

遺跡のある三種町は、秋田県の北西部に位置し、面積は248.09k㎡で、そのうち山林の占める割合が40.7％と半数近くを占める。西側の旧八郎潟東部承水路から東側の出羽丘陵地の間にある狭小な平野部を中心に集落が点在する町で、平成18年３月20日、旧琴丘町、旧山本町、旧八竜町の三町が合併して誕生した。旧八郎潟の東岸に沿って南北に延びる平野のほぼ中央を、国道７号とＪＲ奥羽本線、秋田自動車道が南北に平行しており、遺跡はこのＪＲ奥羽本線鹿渡駅から東へ６㎞ほどの、北緯40度３分24秒、東経140度８分56秒に位置している。

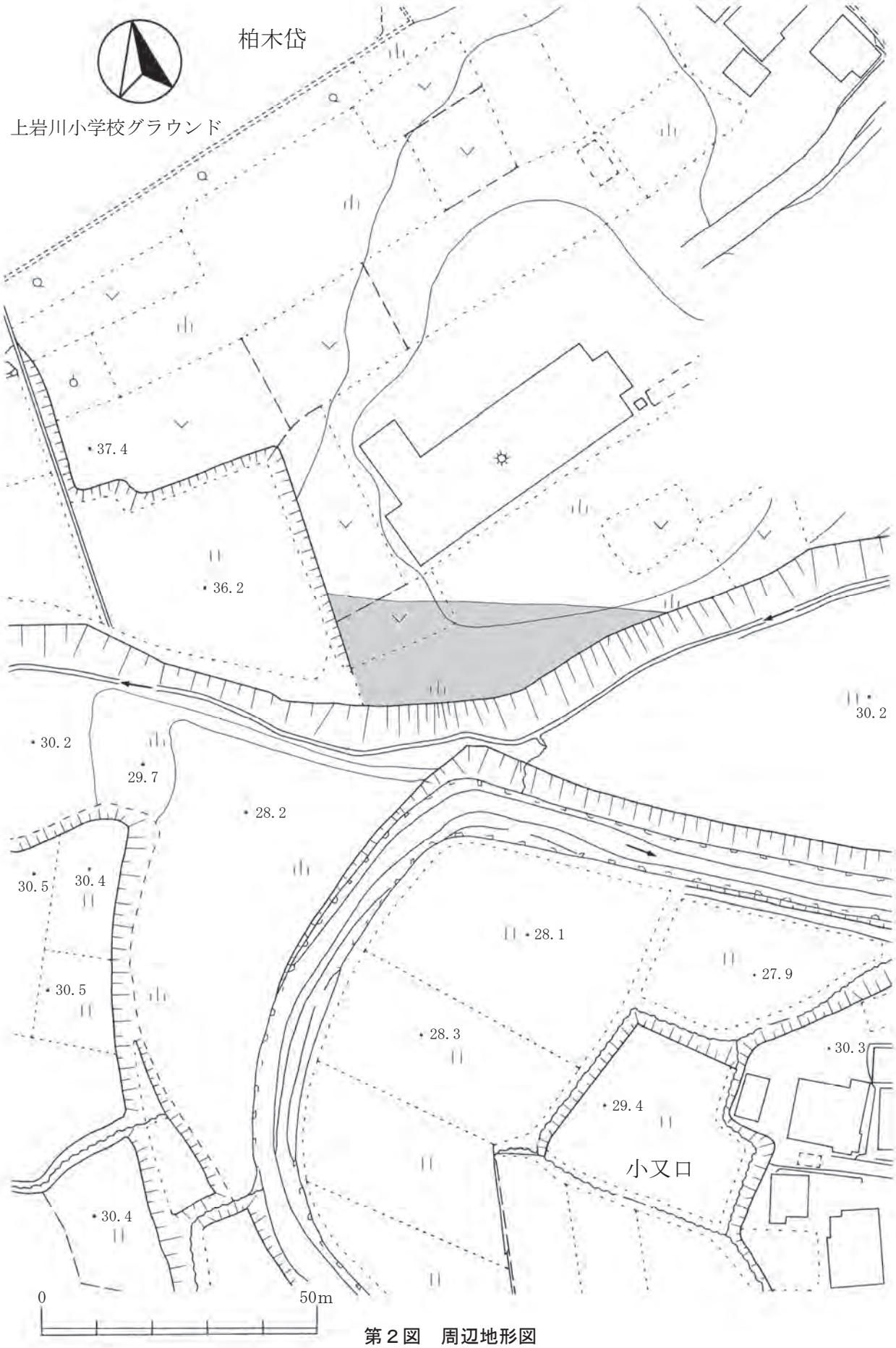
三種町を含む旧八郎潟東岸地域は、出羽丘陵地の北寄りに位置し、東は奥羽脊梁山地から分岐する太平山地に連なる七座山地・房住山山地、北は白神山地、西は日本海に面している。遺跡の東側で南北に聳える房住山山地と北の七座山地を結ぶ山頂部は、標高300～400ｍの高位浸食小起伏面群で、西側にはこれらの山腹をとりまくように丘陵頂部の標高が40～100ｍの斉高性のある浸食小起伏面群が発達している。また、この丘陵頂部の東側で山地に接する地形は急斜面となっており、西側では低位段丘面が平野面とともに低地面を形成し、この地域では山地、丘陵地、台地・低地の三段化した地形が規則正しく連なっている。平野面を形成する主要河川は、遺跡から北に7.5㎞ほどを西流する２級河川三種川である。

柏木岱Ⅱ遺跡は、三種川の支流小又川左岸の河岸段丘上に立地する。この段丘面は三種川流域に発達した三種川谷底平野の西縁に沿って点在し、遺跡は標高約38ｍの石倉山丘陵地東端の縁辺部に位置する。遺跡の北側は平坦部が広がり、上岩川小学校や工場が隣接する。また南東～南～南西の段丘崖面は、南西側は本来の姿をとどめる箇所も見られるが、南東側は遺跡が工事により開削され、急斜面となっている。

遺跡周辺の地質は下位から新第三紀の小谷沢層、俎山火山岩類、女川層、素波里安山岩、船川層、及び天徳寺層、第四



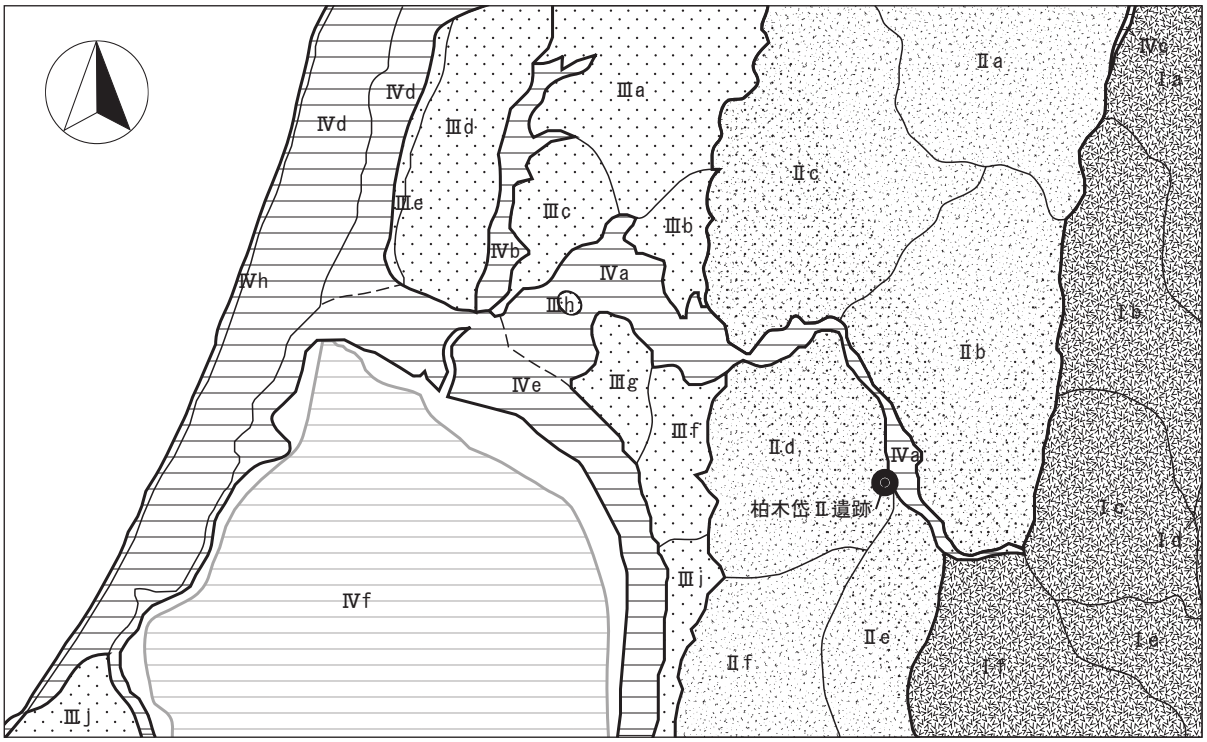
第１図　遺跡位置図


柏木岱
上岩川小学校グラウンド
37.4
36.2
30.2
30.2
29.7
28.2
30.5
30.4
28.1
27.9
30.5
28.3
30.3
29.4
小又口
30.4
0
50m

第２図　周辺地形図

紀の笹岡層、中沢層、石倉山層、潟西層、古期砂丘堆積物、安戸六層、低位段丘堆積物、新期砂丘堆積物及び沖積層で構成されている。山地から湖岸に向かって地質時代の古い地層から若い地層が順に重なっているが、地層が褶曲しているため、南北の褶曲軸に沿って同一層が繰り返し露出している。

遺跡の立地する三種川上流の石倉山丘陵地から三種川低地への出口では、森岳背斜の西翼を南北に切る森岳活断層に直行して流路の側刻により窄入蛇行を呈し、このため左右両岸に沖積段丘崖の発達を促し、環流丘陵も随所にみられる。低位段丘は三種川流域に点在する河成段丘で、旧河床を堆積した低位段丘堆積物からなる。本段丘堆積物は、層厚３～５ｍで、主として淘汰の悪い亜円～亜角礫の中～大礫からなる。最上部の厚さ１ｍ前後は風化土壌となっている。これらは、三種川の旧河床面を堆積した河成堆積物である。礫は女川層に由来する硬質泥岩礫を主としており、酸性凝灰岩を挟んでいる。珪質頁岩が多く、大小の泥灰岩の団塊を有し、ときに砂岩を挟み、硬質泥岩との互層をな



Ⅰ 山地
Ⅰa 七座山山地
Ⅰb 房中山山地
Ⅰc 房住山山地
Ⅰd 上小阿仁山地
Ⅰe 滝ノ上山地
Ⅰf 高杉山山地

Ⅱ 丘陵地
Ⅱa 羽立丘陵地
Ⅱb 谷地の沢丘陵地
Ⅱc 桧山・山本丘陵地
Ⅱd 石倉丘陵地
Ⅱe 西の又丘陵地
Ⅱf 鹿渡丘陵地

Ⅲ 台地
Ⅲa 志戸橋野台地
Ⅲb 豊岡台地
Ⅲc 金光寺野台
Ⅲd 成合台地
Ⅲe 大曲台地
Ⅲf 森岳・寒城台地
Ⅲg 横長根台地
Ⅲh 泉八日台地
Ⅲi 鹿渡台地
Ⅲj 潟西台地

Ⅳ 低地
Ⅳa 三種川低地
Ⅳb 鵜川川低地
Ⅳc 内川低地
Ⅳd 浅内低地
Ⅳe 八郎潟低地
Ⅳf 大潟人工干拓低地
Ⅳg 日本海岸砂丘地
Ⅳh 海浜低地

第３図　遺跡周辺の地形区分図

す。本層の上部は、いわゆる硬（女川岩層）軟（船川岩層）互層を示し、ときに海緑石砂岩を基底部に伴っている。遺跡から出土した石器の原材は、女川層や段丘礫層に由来している。

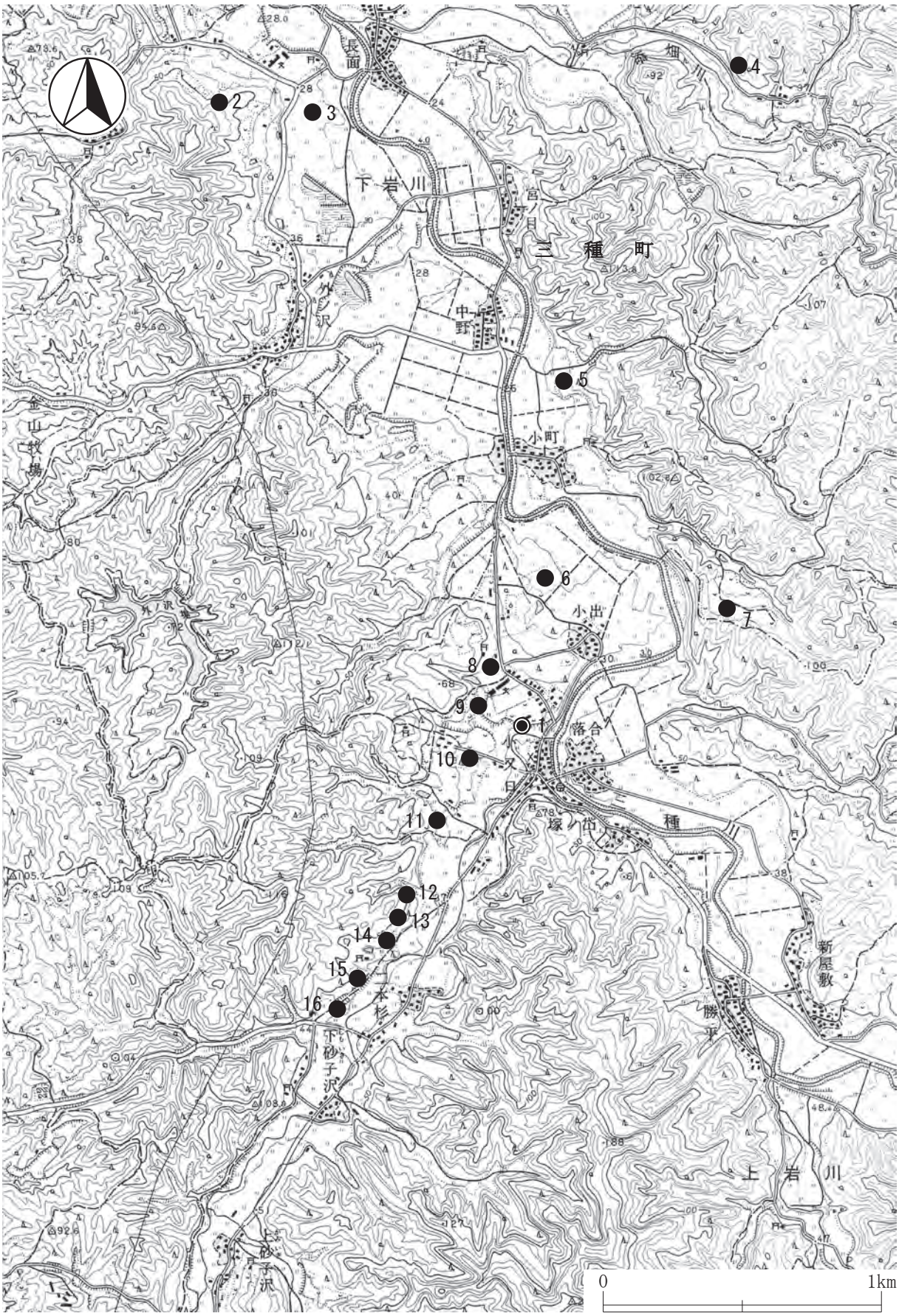
また、この地域は地表及び地下にいわゆる「含油第三系」が広く分布しており、南能代油田をはじめ、小規模ではあるが響油油田・榊油田などがある。南能代油田は東方の小野沢南西方に油の露頭があり、石油の蒸留残渣としてアスファルトが採取される立地もそろっている。そして、八郎潟南東岸近くにも天然アスファルトが露頭している潟上市豊川油田が存在する。

第２節　歴史的環境

『秋田県遺跡地図（山本地区版）』（2002年発行）では、三種町内に数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が周知されている。その後、秋田県教育委員会による平成16・17年の高速交通関連道路整備事業県道能代五城目線・県道琴丘上小阿仁線に係る分布調査と、平成17・18年の確認調査により、８遺跡が三種町で新たに発見された。ここでは、発掘調査が行われた三種川支流小又川流域の遺跡を中心に、本遺跡を取り巻く歴史的環境を概観する。

第２級河川である三種川下流域では早くから縄文時代～中世の遺跡が確認されてきたが、三種川中流域とその支流である小又川周辺は、これまで比較的遺跡の確認されていなかった地域である。しかし、高速交通関連道路整備事業県道能代五城目線に伴う遺跡分布調査によって、近年、遺跡の分布が明らかになってきた。とくに上岩川地区の小又川流域では、縄文時代の遺跡が多数確認され、平成18年度には鹿渡渉Ⅱ・樋向Ⅰ・樋向Ⅱ・樋向Ⅲ・大沢Ⅰ・大沢Ⅱ遺跡の発掘調査が行われた。鹿渡渉Ⅱ遺跡は、石器石材として使用された頁岩の原石が多数発見されており、樋向Ⅰ遺跡では石器原石採掘坑や頁岩原石、加工した際に出た剥片などが多数検出された。樋向Ⅱ遺跡では頁岩原石は見つからなかったが、頁岩原石を採掘した跡や剥片が見つかり、原石は集落に持ち帰ったと考えられている。樋向Ⅲ遺跡からは頁岩を採掘した跡と石器加工跡、剥片が見つかり、大沢Ⅰ遺跡では頁岩の剥片と地山直上に頁岩がまとまって含まれているのが見つかった。大沢Ⅱ遺跡では、頁岩採取跡や剥片が見つかっている。これらの遺跡は、縄文時代に石器製作に適した頁岩の原石を大量に採取し、粗割の段階まで加工していた遺跡であることが分かっている。また、製品に加工された石器の出土数は数点で、竪穴住居跡等が見つからなかったことから、これらの遺跡は石器の製品を生産していた場とするよりも、石器の材料となる原石を粗割し、製品にしやすい大きさに加工していた場であり、これらの加工品を集落に持ち帰ったものと考えられている。

一方、柏木岱Ⅱ遺跡では、製作途中と思われる石器とともに剥片素材の元になる石核や剥片が多量に出土しており、石材の供給や交易において周辺遺跡と密接な関わりをもって石器製作が行われていた可能性が高いと考えられる。これらの遺跡が小又川に隣接、もしくは流域に存在しており、石材の運搬・流通に非常に便利な立地であったと推測される。



第４図　柏木岱Ⅱ遺跡と周辺遺跡位置図

第１表　柏木岱Ⅱ遺跡周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	遺跡所在地	種別	遺構・遺物
1	柏木岱Ⅱ	山本郡三種町上岩川字柏木岱	遺物包含地	縄文時代の集落跡（前期・後期）
2	百騎館	山本郡三種町下岩川字百騎台	館跡	
3	百騎台	山本郡三種町下岩川字百騎台	遺物包含地	
4	田屋	山本郡三種町下岩川字下添畑	遺物包含地	
5	刈初沢	山本郡三種町下岩川字刈初沢	遺物包含地	
6	小出	山本郡三種町上岩川字下小出	遺物包含地	
7	小町	山本郡三種町下岩川字小町	遺物包含地	
8	柏木岱	山本郡三種町上岩川字柏木岱	遺物包含地	土偶、石器片
9	鹿渡渉Ⅰ	山本郡三種町上岩川字鹿渡渉	遺物包含地	
10	向台	山本郡三種町上岩川字鹿渡渉	遺物包含地	縄文土器片、石器
11	鹿渡渉Ⅱ	山本郡三種町上岩川字鹿渡渉	遺物包含地	縄文時代の原石採取場所及び石器製作地
12	樋向Ⅰ	山本郡三種町上岩川字樋向	遺物包含地	縄文時代の原石採取場所及び石器製作地
13	樋向Ⅱ	山本郡三種町上岩川字樋向	遺物包含地	縄文時代の原石採取場所及び石器製作地
14	樋向Ⅲ	山本郡三種町上岩川字樋向	遺物包含地	縄文時代の原石採取場所及び石器製作地
15	大沢Ⅰ	山本郡三種町上岩川字大沢	遺物包含地	縄文時代の石器製作跡
16	大沢Ⅱ	山本郡三種町上岩川字大沢	遺物包含地	縄文時代の石器製作跡

引用・参考文献

通商産業省工業技術院地質調査所　『森岳地域の地質』　1985（昭和 60）年

秋田県農政部農地整備課　『土地分類基本調査　森岳・羽後浜田』　1984（昭和 59）年

秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図（山本地区版）』　2002（平成 14）年

秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図（男鹿・南秋田地区版）』　2003（平成 15）年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第 291 集　1999（平成 11）年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第 413 集　2006（平成 18）年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第 420 集　2007（平成 19）年

秋田県教育委員会　『秋田県埋蔵文化財センター年報　25 』　2007（平成 19）年

秋田県教育委員会　『鹿渡渉Ⅱ遺跡・樋向Ⅰ遺跡・樋向Ⅱ遺跡・樋向Ⅲ遺跡・大沢Ⅰ遺跡・大沢Ⅱ遺跡』　秋田県文化財調査報告書第 436 集　2008（平成 20）年

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

柏木岱Ⅱ遺跡は、ＪＲ奥羽本線鹿渡駅から東約６㎞に位置し、三種町上岩川地内を北流し旧八郎潟東部承水路に注ぐ２級河川三種川とその支流小又川が合流する地点から西約150ｍの河成段丘上に立地する。この段丘面は三種川流域に発達した三種川谷底平野の西縁に沿って点在し、遺跡は標高約38ｍの石倉山丘陵地東端の縁辺部に位置する。調査区は、柏木岱集落の南端で段丘先端部にあり、段丘下にある小又口集落との比高は約８ｍで、南東側は急斜面となっている。その斜面先を小又川が三種川との合流地点に向けて東流する。

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡２軒・掘立柱建物跡４棟・土器埋設遺構２基・土坑４基・柱穴様ピット34基を検出した。遺物は、縄文時代前期と後期の土器(18ℓの遺物収納箱で約25箱)と剥片石器(石鏃77点、石槍18点、石錐４点、石匙35点、石篦16点、掻器20点、ほか剥片が18ℓの遺物収納箱で約66箱)、礫石器(磨製石斧２点、半円状扁平打製石器16点、石錘８点、凹石27点、敲石１点、磨石１点、石皿１点)、石製品(三脚石器56点、円盤状石製品４点、線刻礫５点)が出土した。

今年度の調査で、柏木岱Ⅱ遺跡は縄文時代前期と後期の集落跡であることが分かった。しかし、今回の調査範囲は､柏木岱Ⅱ遺跡の南東部分の一角であり、調査区の北側は平坦部が広がっていることから、遺跡は調査区の北側に続いているものと推定される。

第２節　調査の方法

発掘方法はグリッド法を採用した。計画路線内のセンター杭ＮＯ．12(Ｘ＝6529.397、Ｙ＝－58377.220)を原点(ＭＡ50)とし、国家座標第Ｘ系座標北を求め、このラインを南北基線として、これに直交するラインを東西基線と定めた。この東西南北に沿って４ｍ×４ｍメッシュを組み、その交点にグリッド杭を打設し、グリッド杭には東から西に向かって東西方向を示す‥‥ＬＳ・ＬＴ・ＭＡ・ＭＢ‥‥というアルファベット２文字と、南から北へ向かって昇順する‥‥50・51・52・53‥‥の２桁の数字を組み合わせた記号を記入した。なお、各グリッドの呼称は南東隅の杭の記号を用いた。

遺構の確認は掘り込み面での検出に努めたが、黒色土中での検出は困難で最終的には地山面での確認となった。検出された遺構には種別を問わず確認した順に１から通し番号を付し、精査を行った。また、番号を登録した後に遺構と判断されなかったものについては欠番とした。

遺物は遺構内出土のものは、遺跡名・遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、遺構外出土のものは遺跡名・出土グリッド・出土層位・出土年月日を記入して取り上げた。

調査の記録は主に図面と写真によった。図面はグリッド杭を基準とした簡易遣り方測量を採用し、平面図・断面図ともに、基本的には１／20の縮尺で作成した。土器埋設遺構など微細なものについては１／10で図化した。写真撮影は、35㎜のモノクロフィルムとカラーリバーサルフィルム及びデジタルカメラを使用した。

第３節　調査の経過

発掘調査の経過は次のとおりである。

５月15日　調査開始。作業員への作業手順の説明、発掘調査機材の搬入、環境整備。
５月16日　確認調査時トレンチ掘削作業開始。
５月17日　確認調査時トレンチ掘削完了。調査区西側から人力による表土除去開始。
５月21日　基本土層図を作成。
５月22日　調査区西側から遺構検出作業開始。
５月23日　調査区西側北端から石器が多量に出土、出土遺物記録。
５月24日　ＳＫ15を検出。
５月25日　ＳＫ15から多量の土器片と石器が出土。
５月28日　ＳＲ12・45、ＳＸ46を検出。
５月31日　上岩川小学校の児童24名、引率教員７名が遺跡見学のため来跡。６年生５名が発掘体験。
６月４日　ＳＢ69を検出。三種町琴丘総合支所へ調査風景と遺跡見学のパネル写真を出張展示。
６月７日　空中写真撮影実施。ＳＩ78を検出。
６月８日　ＳＩ94を検出。
６月11日　ＳＢ100・101・102を検出。
６月12日　発掘調査機材の搬出等撤収作業。調査終了。

第４節　整理作業の方法と経過

各遺構は、現場で作成した図を第一原図とし、これを基に平面図と断面図の整合性をはかった図を第二原図として作成し、これをトレースして挿図を作成した。第二原図の作成は平成19年６月～８月にかけて行い、トレースは平成19年10月に行った。柱穴様ピットについては、一覧表をもって個別図の代わりとした。

遺物の整理は、平成19年６月～平成20年３月にかけて秋田県埋蔵文化財センター中央調査課で行い、一部を委託した。洗浄・注記・接合・復元作業の間、報告書に記載する遺物の選別・分類を行い、実測図・拓影図を作成した後に写真撮影を行った。遺物の注記は、遺跡略記号（３ＫＧＴⅡ）・出土位置・遺物番号・出土層位・出土年月日を記入した。石器100点の実測およびトレースを平成19年８月～12月に株式会社アルカに委託した。

第４章　調査の記録

第１節　基本層序

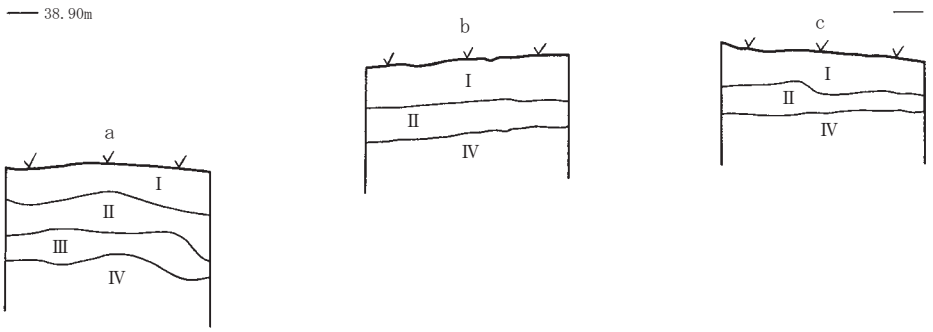
遺跡調査区は平成16年までは畑地として利用されていたため撹乱されており、特に調査区東側が深く削平されていた。また、調査区北東側の表土は南東側に移動し、整地された形跡がある。調査区東端の地山標高は約38.6m、西端の地山標高は約37.8mで約0.8mの高低差があることから、本来は南東側に比べて北西側が低く、北西側ほどⅠ～Ⅲ層の層厚が増している。遺跡の基本層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層　黒褐色土（10ＹＲ2/3）シルト質　しまり強　粘性弱
　　草根が混入する表土で耕作土であり、土器片や石器を包含する。

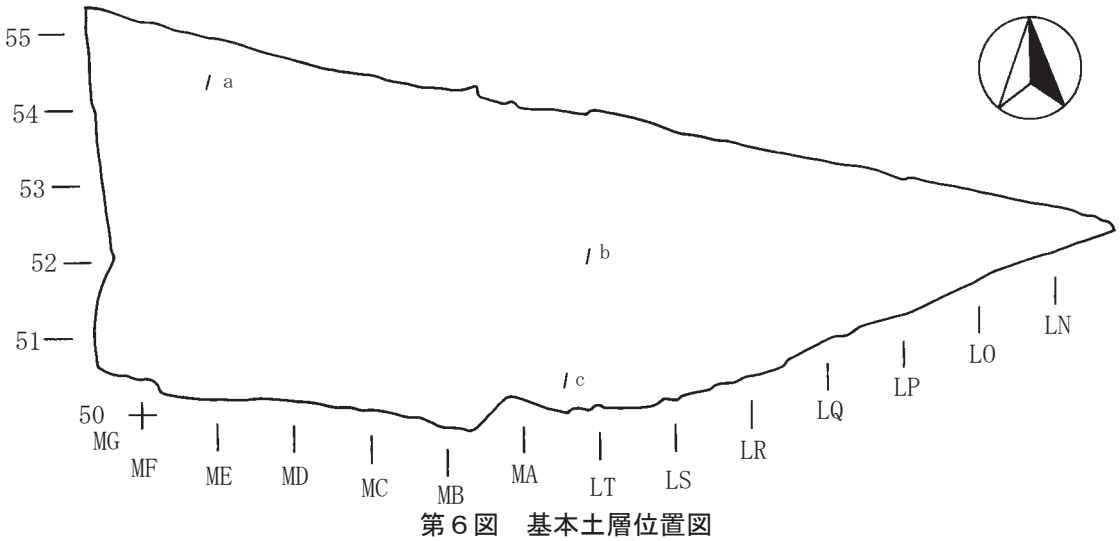
第Ⅱ層　黒褐色土（10ＹＲ2/3）シルト質　しまり中　粘性中
　　部分的に耕作による撹乱を受けた土があり、土器片や石器を包含する。

第Ⅲ層　暗褐色土（10ＹＲ3/3）シルト質　しまり中　粘性強
　　地山の漸移層である。主な遺物包含層であり、下方に縄文時代前期、上方に縄文時代後期の遺物が含まれている。

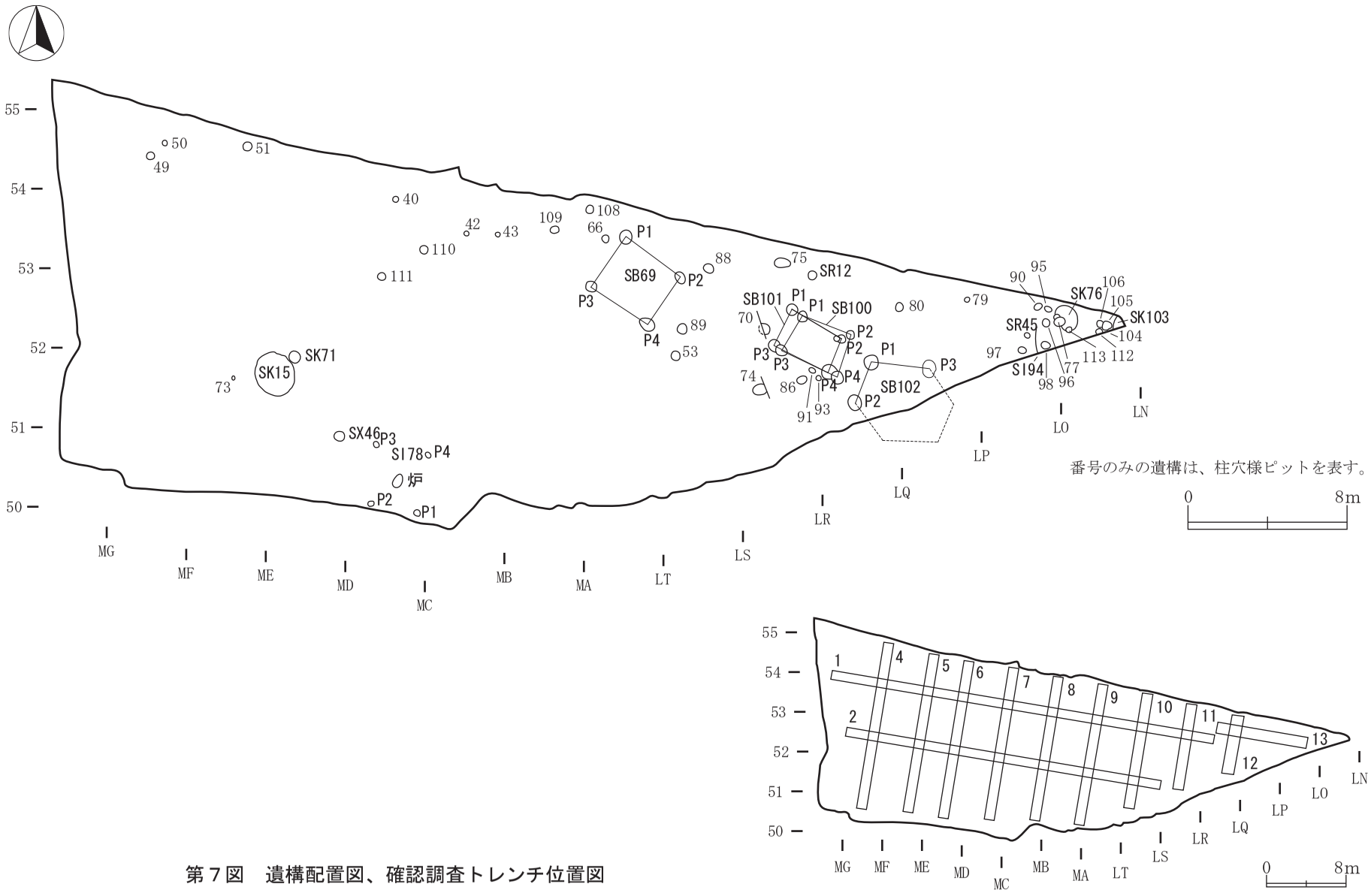
第Ⅳ層　褐色土（10ＹＲ4/6）粘土質　しまり強　粘性強
　　地山層である。



第５図　基本土層図



第６図　基本土層位置図



第７図　遺構配置図、確認調査トレンチ位置図

第２節　検出遺構と出土遺物

（１）竪穴住居跡

ＳＩ78（第８図、図版１・６）

ＭＣ49・50、ＭＢ50グリッドの第Ⅲ層で確認した。当初は焼土だけを確認したが、周辺精査の結果、この焼土を囲むように規則的な配置のピットを確認したため住居跡と認定した。重複する遺構はなく、付近にはＳＸ46がある。住居内堆積土は、検出面が床面もしくはそれ以下のため残存していない。同理由で、竪穴状掘り込みの平面形並びに規模、壁の状態も不明である。炉１基とピット４基を検出した。壁溝は確認されなかった。ピットはＰ１・２・３・４がほぼ正方形状に配置されていることから、すべて柱穴と考えられる。各柱穴間の距離を柱穴の中心間で測ると、Ｐ１－Ｐ２は2.35m、Ｐ１－Ｐ４は2.95m、Ｐ２－Ｐ３は2.65m、Ｐ３－Ｐ４は3.00mである。各柱穴の平面形は円形もしくは楕円形で、開口部径が0.31～0.39m、深さは0.23～0.37mである。Ｐ４の１層は径14cmの柱痕、２層が柱穴埋土と考えられる。炉は地床炉で、住居跡のほぼ中央に位置し、浅い掘り込みとその被熱範囲が残存している。被熱範囲は長軸0.70m、最大幅0.48mの楕円形である。地床炉の１層は堅く焼き締まり、２層の土色は１層と変わらないが、１層に比べ締まりがなく地山質の土が被熱したものと考えられる。

遺物（第14図）　１は胎土に繊維が混入された深鉢形土器である。斜縄文が施され、底部からの立ち上がりは内湾気味に立ち上がる。底部外面中央がやや窪んでいる。特徴から縄文時代前期のものと思われるが、住居に伴うものかは不明である。

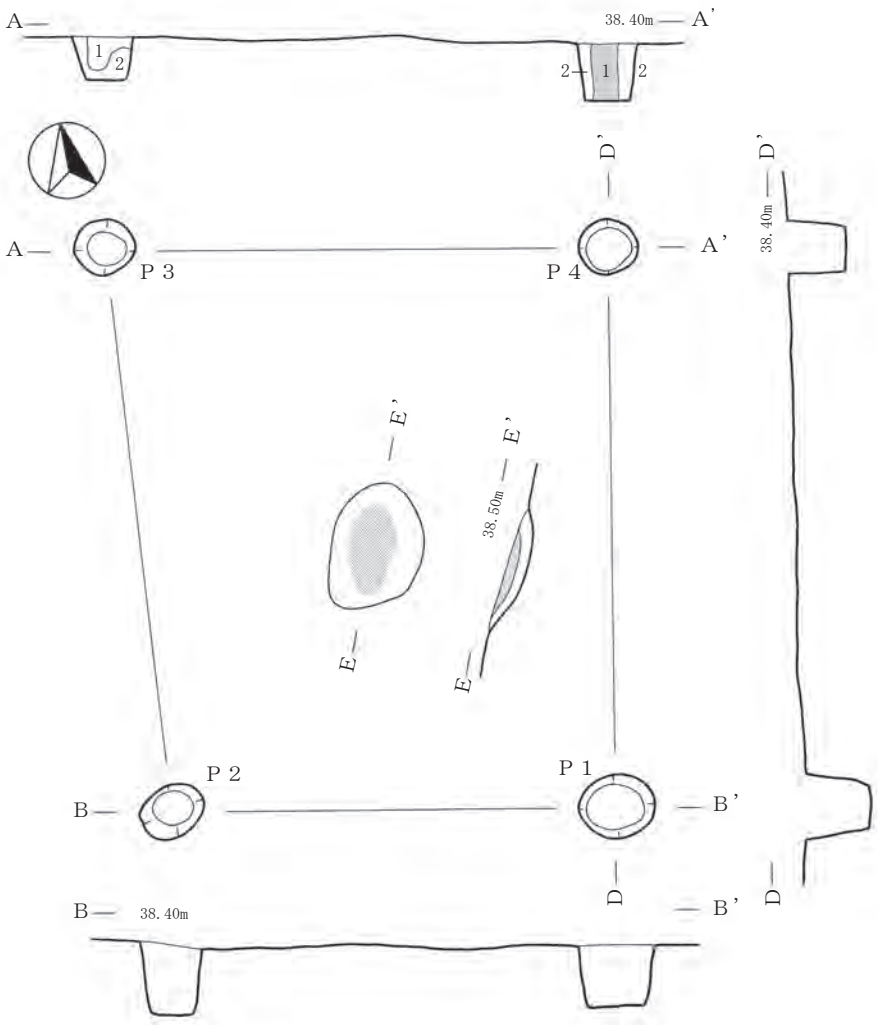
まとめ　本遺構は地床炉を有する住居跡で、規則的な正方形状に柱が配置される。削平によるためか壁はなく、竪穴式住居・平地式住居跡の判別が不可能であるため、両者の可能性を指摘しておく。詳細な時期は不明である。

ＳＩ94（第９図、図版１・６・７）

ＬＯ51・52、ＬＮ52グリッドの第Ⅲ層で確認した。当初は埋設土器と焼土だけを確認したが、周辺精査の結果、南西方向に高さ約0.1mの壁を確認し、周辺で柱穴を検出したことから住居跡と認定した。炉はＳＫＰ77よりも古く、ＳＫ76より新しい。本遺構の大部分が調査区外にある。また、本遺構の立地点は調査区の東端で、南東側は急斜面であることから、残存状況は極めて不良である。住居内堆積土は炭化物及び地山塊を含む黒褐色土である。竪穴状掘り込みの平面形並びに規模、周壁や床面状態の詳細は不明であるが、残存部から判断して住居規模は径約５mと推定される。残存部分の床面は平坦である。炉は土器埋設炉で、掘り込みは長軸0.32m、短軸0.19m（残存値）、深さ0.20mの楕円形状である。

遺物（第14図）　土器埋設炉から出土した２～５は同一個体で、縦方向の沈線と磨り消し縄文がみられる土器片である。これは大木10式土器に相当するものと考えられる。また、床面からは縄文時代後期の土器片が出土した。

まとめ　本遺構は土器埋設炉を有する竪穴住居跡である。所属時期は、出土した土器から縄文時代中期末葉～後期初頭と考える。



Ｐ１
1　黒褐色土（10YR2/3）しまり中　粘性中、地山土塊φ1㎜ 1%含む
Ｐ２
1　黒褐色土（10YR2/3）しまり中　粘性やや強、地山土塊φ1～3㎜ 1%含む
Ｐ３
1　黒褐色土（10YR2/3）しまり中　粘性やや弱、地山土塊φ3～5㎜ 10%含む
2　にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまり強　粘性強　灰黄褐色土斑状に混入
Ｐ４
1　黒褐色土（10YR2/3）シルト　しまり強　粘性弱　柱痕
2　暗褐色土（10YR3/4）シルト　しまり強　粘性弱、黒褐色土との混合土

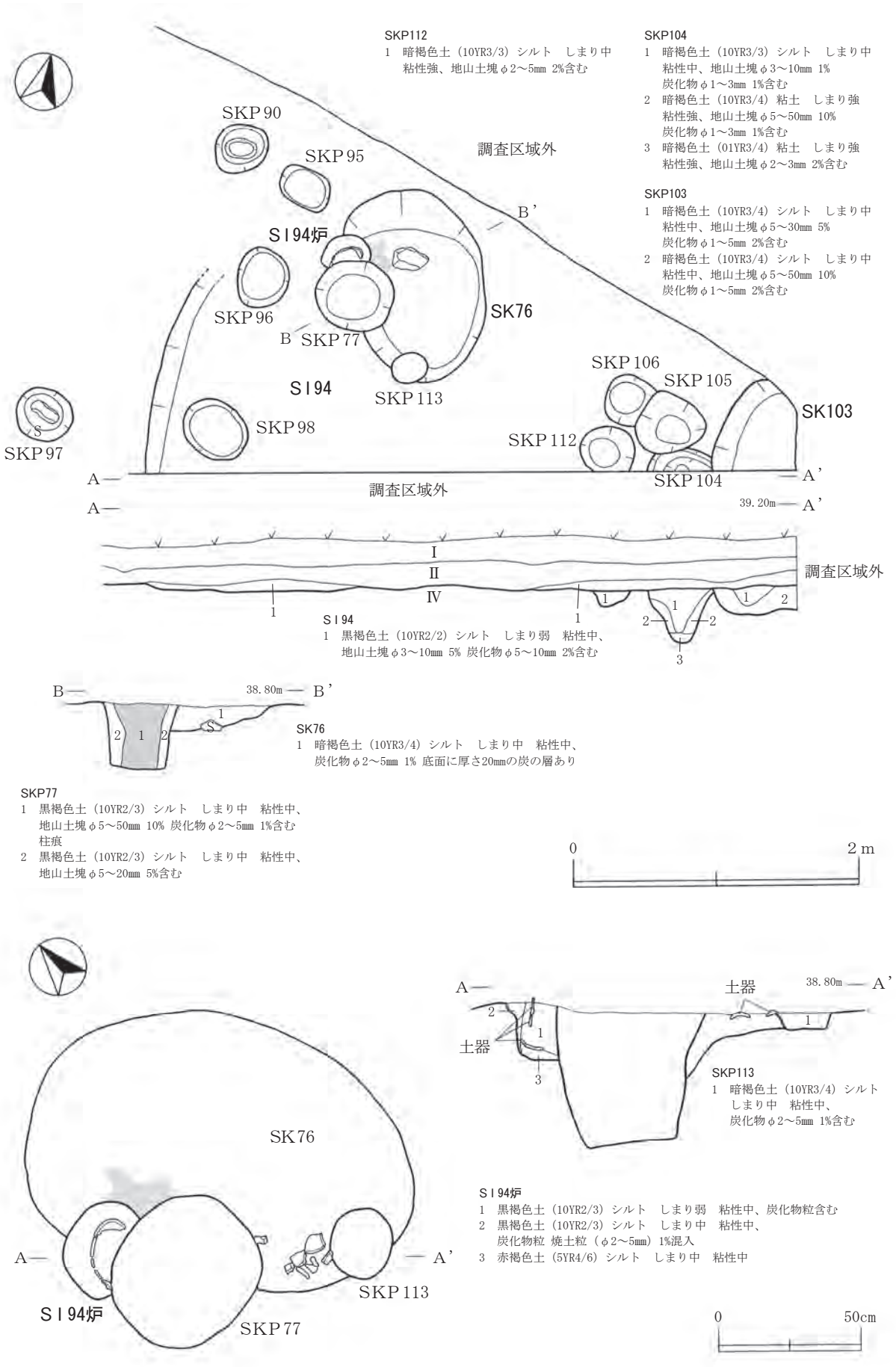
炉
1　褐色土（7.5YR4/6）シルト　しまり強　粘性弱、地山土塊10～30㎜ 5% 炭化物φ5～30㎜2%含む
2　褐色土（7.5YR4/4）粘土　しまり中　粘性強、地山土塊5～10㎜ 1% 炭化物φ5～30㎜ 2%含む

0　2m

第８図　ＳＩ78竪穴住居跡

第２表　ＳＩ78竪穴住居跡柱穴計測表

番号	グリッド	平面形	規模（m）			底面標高（m）	備考
			長軸	短軸	深さ		
Ｐ１	ＭＣ49	楕円	0.39	0.34	0.33	37.89	
Ｐ２	ＭＣ50・51	楕円	0.34	0.26	0.37	37.86	
Ｐ３	ＭＢ50	円	0.32	0.29	0.23	38.11	
Ｐ４	ＭＣ50	円	0.31	0.29	0.30	37.99	径約 14cm の柱痕



第９図　ＳＩ94竪穴住居跡、SK76・103土坑

（２）掘立柱建物跡

ＳＢ69（第10図、図版２・６・７）

ＬＳ52・53、ＬＴ52・53グリッドの第Ⅲ層で確認した。明確な柱穴のプランを確認し、周辺精査の結果、規則的な柱穴配置を確認したため掘立柱建物跡と認定した。重複する遺構はなく、南東にはＳＢ100・ＳＢ101がある。主軸方位はＰ１・Ｐ３の中心を結んだラインを主軸線とした場合、Ｎ－33°－Ｅとなる。柱穴は４基確認した。ほぼ正方形状の配置で、各柱穴間の距離を柱穴の中心間で測ると、Ｐ１－Ｐ３は3.10m、Ｐ２－Ｐ４は2.88m、Ｐ１－Ｐ２は3.46m、Ｐ３－Ｐ４は3.34mとなる。Ｐ１は不整円形で長軸0.62m、短軸0.60m、深さ0.66m、Ｐ２は楕円形で長軸0.54m、短軸0.45m、深さ0.74m、Ｐ３は不整円形で長軸0.57m、短軸0.55m、深さ0.63m、Ｐ４は楕円形で長軸0.80m、短軸0.57m、深さ0.67m、底面標高は４基とも約38.00m前後である。Ｐ１の１層は径約32cmの柱痕で、２・３層が柱穴埋土と考えられる。Ｐ２の１層は径約28cmの柱痕で、２・３層が柱穴埋土と考えられる。Ｐ３の１層は径約38cmの柱痕で、２層が柱穴埋土と考えられる。Ｐ４の１層は径約36cmの柱痕で、２層が柱穴埋土と考えられる。

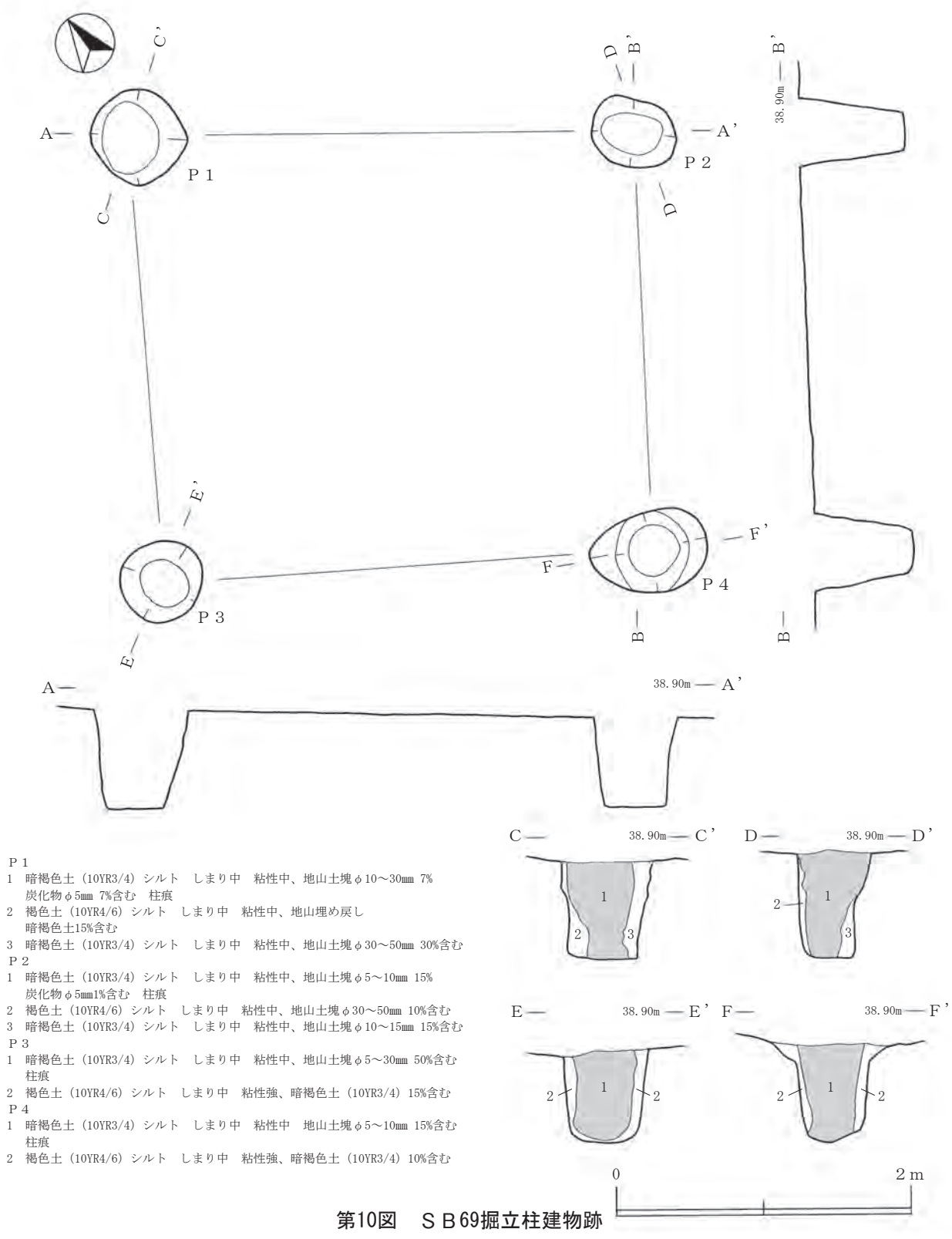
遺物（第14図）　６は小破片であるが胴部に渦巻状、もしくは平行沈線による曲線状の沈線が施された土器片、７は頸部に粘土紐貼付が見られる土器片である。また、無文の土器片も出土した。これらは縄文時代後期初頭の十腰内１式土器と考えられる。８は段のない弧状の側縁の尖基鏃である。９・10は凸基有茎鏃で、10の茎部には天然アスファルトが付着している。11は凹石で、礫の平坦面を複数回敲いた凹みが認められる。12は縦長剥片を素材とした石篦、13は横長剥片を素材とした石篦で、刃部形状はいずれも丸刃状である。14は自然面のある三脚石器で、魚の脊椎が化石として残る石を素材としている。

まとめ　本遺構は４本の柱を規則的に正方形状に配置する掘立柱建物跡である。所属時期は、柱穴内から出土した土器から縄文時代後期初頭と考える。

ＳＢ100（第11図、図版２・３・６・７）

ＬＱ51・52、ＬＲ51・52グリッドの第Ⅲ層で確認した。明確な柱穴のプランを確認し、周辺精査の結果、規則的な柱穴配置を確認したため、掘立柱建物跡と認定した。ＳＢ101と重複し、Ｐ３・Ｐ４の切り合い関係から本建物跡が新しく、ＳＢ101を建て替えたものと考えられる。付近にはＳＲ12・ＳＢ102がある。主軸方位は、Ｐ１・Ｐ３の中心を結んだラインを主軸線とした場合、Ｎ－27°－Ｅとなる。柱穴は４基確認した。ほぼ長方形状の配置で、各柱穴間の距離を柱穴の中心間で測ると、Ｐ１－Ｐ３は1.92m、Ｐ２－Ｐ４は2.26m、Ｐ１－Ｐ２は2.60m、Ｐ３－Ｐ４は3.14mである。Ｐ１は楕円形で長軸0.56m、短軸0.53m、深さ0.50m、Ｐ２は楕円形で長軸0.47m、短軸0.43m、深さ0.47m、Ｐ３は楕円形で長軸0.60m、短軸0.59m、深さ0.38m、Ｐ４は楕円形で長軸0.63m、短軸0.60m、深さ0.48mである。Ｐ１の１層は径約25cmの柱痕、２層は柱穴埋土と考えられる。Ｐ２の１層は径約27cmの柱痕、２層は柱穴埋土と考えられる。Ｐ３の１層は径約17cmの柱痕、２層が柱穴埋土と考えられる。Ｐ４の１層は径約31cmの柱痕、２層が柱穴埋土と考えられる。

遺物（第15図）　沈線文・無文の縄文土器片が出土した。15・16は同一個体で、無文地に渦巻状平行沈線が施される特徴から縄文時代後期初頭の十腰内１式土器と考えられる。17は円基鏃である。

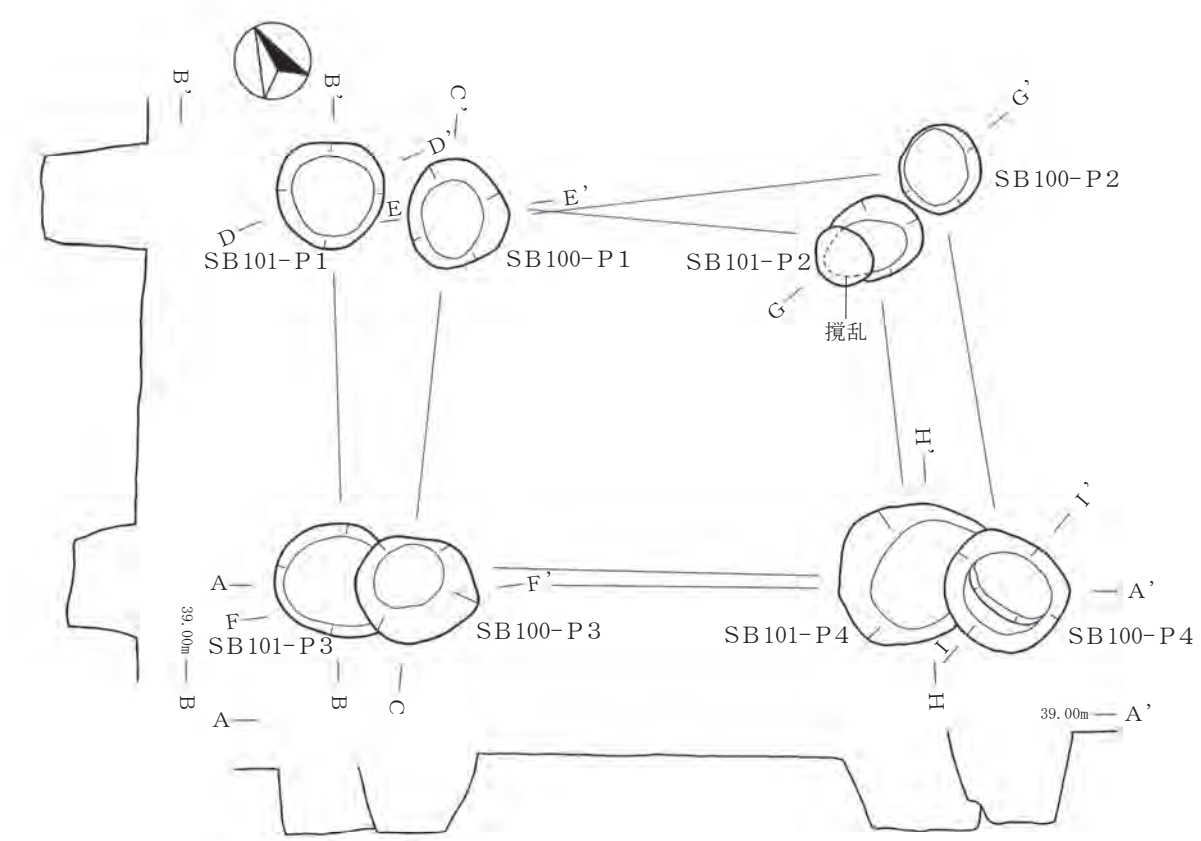


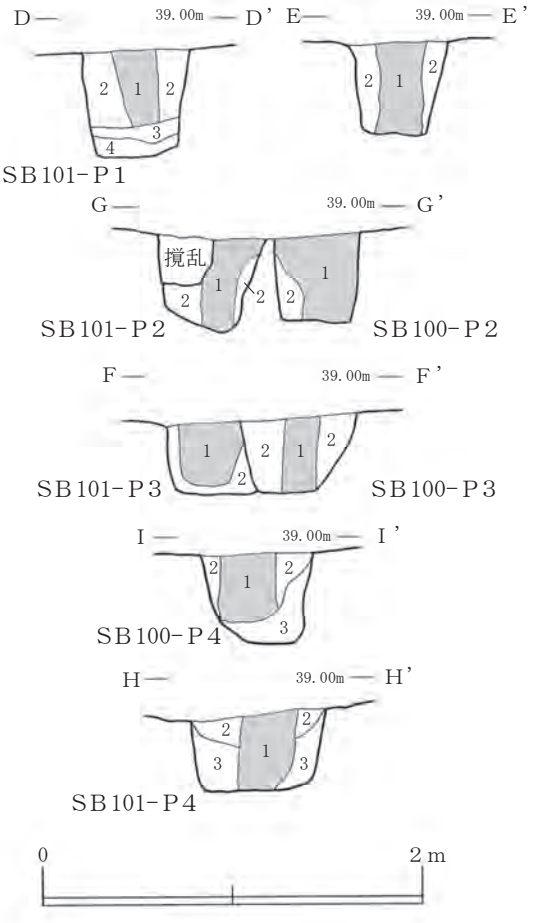
P１
1　暗褐色土（10YR3/4）シルト　しまり中　粘性中、地山土塊φ10～30㎜ 7%
　炭化物φ5㎜ 7%含む　柱痕
2　褐色土（10YR4/6）シルト　しまり中　粘性中、地山埋め戻し
　暗褐色土15%含む
3　暗褐色土（10YR3/4）シルト　しまり中　粘性中、地山土塊φ30～50㎜ 30%含む
P２
1　暗褐色土（10YR3/4）シルト　しまり中　粘性中、地山土塊φ5～10㎜ 15%
　炭化物φ5㎜1%含む　柱痕
2　褐色土（10YR4/6）シルト　しまり中　粘性中、地山土塊φ30～50㎜ 10%含む
3　暗褐色土（10YR3/4）シルト　しまり中　粘性中、地山土塊φ10～15㎜ 15%含む
P３
1　暗褐色土（10YR3/4）シルト　しまり中　粘性中、地山土塊φ5～30㎜ 50%含む
　柱痕
2　褐色土（10YR4/6）シルト　しまり中　粘性強、暗褐色土（10YR3/4）15%含む
P４
1　暗褐色土（10YR3/4）シルト　しまり中　粘性中　地山土塊φ5～10㎜ 15%含む
　柱痕
2　褐色土（10YR4/6）シルト　しまり中　粘性強、暗褐色土（10YR3/4）10%含む

第10図　ＳＢ69掘立柱建物跡

第３表　ＳＢ69掘立柱建物跡柱穴計測表

番号	グリッド	平面形	規模（m）			底面標高（m）	備考
			長軸	短軸	深さ		
Ｐ１	ＬＴ53	不整円	0.62	0.60	0.66	38.07	径約 32cm の柱痕
Ｐ２	ＬＳ52	楕円	0.54	0.45	0.74	38.06	径約 28cm の柱痕
Ｐ３	ＬＴ52	不整円	0.57	0.55	0.63	38.01	径約 38cm の柱痕
Ｐ４	ＬＴ52	楕円	0.80	0.57	0.67	38.00	径約 37cm の柱痕





SB 100
Ｐ１
1　暗褐色土（10YR3/3）シルト　しまり中　粘性中、地山土塊φ2～10㎜ 5%
　炭化物φ2～5㎜ 1%含む　柱痕
2　褐色土（10YR4/4）粘土　しまり強　粘性強、地山土塊40%斑状に混入
Ｐ２
1　暗褐色土（10YR3/4）シルト　しまり中　粘性中、地山土塊φ2～10㎜ 1%含む　柱痕
2　暗褐色土（10YR3/4）シルト　しまり中　粘性中、地山土塊φ10～30㎜ 20%含む
Ｐ３
1　暗褐色土（10YR3/3）しまり中　粘性中、地山土塊φ0.3～3㎜ 20%
　炭化物φ0.3～1㎜ 2%含む　柱痕
2　にぶい黄橙色土（10YR7/3）しまり中　粘性中、
　黒褐色土（10YR3/2）50%斑状 炭化物φ5～10㎜ 2%含む
Ｐ４
1　暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）しまり中　粘性やや強、地山土塊φ3㎜ 1%含む　柱痕
2　暗褐色土（10YR3/3）しまり中　粘性やや弱　地山土斑状に含む
3　褐色土（10YR4/4）粘土

SB 101
Ｐ１
1　暗褐色土（10YR3/3）しまり中　粘性中、地山土塊φ0.1～0.5㎜ 5%
　炭化物φ3～5㎜ 2%含む　柱痕
2　褐色土（10YR4/4）しまり中　粘性中、地山土塊φ5～10㎜ 30%
　炭化物φ5～10㎜ 2%含む
3　にぶい黄橙色土（10YR7/3）しまり中　粘性強、黒褐色土（10YR3/2）30%含む
4　黒褐色土（10YR3/2）しまり中　粘性、地山土塊50%含む
Ｐ２
1　暗褐色土（10YR3/4）シルト～粘土　しまり中　粘性中、地山土塊φ10～50㎜ 30%
　炭化物φ5～10㎜ 2%含む　柱痕
2　暗褐色土（10YR3/4）シルト～粘土　しまり中　粘性中、地山土塊50%含む
Ｐ３
1　黒褐色土（10YR2/3）シルト　しまり中　粘性弱、地山土塊φ5～10㎜ 3%
　炭化物2～5㎜1%含む　柱痕
2　暗褐色土（10YR3/3）シルト　しまり中～強　粘性中、地山土塊φ5～30㎜ 10%
　炭化物含む
Ｐ４
1　暗褐色土（10YR3/3）しまり中　粘性中、地山土塊φ5～10㎜ 25%含む　柱痕
2　褐色土（10YR4/4）しまり中　粘性中、地山土塊φ5～10㎜ 30%含む
3　にぶい黄橙色土（10YR7/3）しまり中　粘性中、黒褐色土50%斑状に含む

第11図　ＳＢ100・101掘立柱建物跡

まとめ　本遺構は４本の柱を規則的に長方形状に柱配置する掘立柱建物跡である。所属時期は明確な根拠に欠くが、ＳＢ101の直後に位置付けられることから、縄文時代後期初頭と考える。

ＳＢ101（第11図、図版２・３・６・７）

ＬＱ51・52、ＬＲ51・52グリッドの第Ⅲ層で確認した。明確な柱穴のプランを確認し、周辺精査の結果、規則的な柱穴配置を確認したため、掘立柱建物跡と認定した。ＳＢ100と重複し、Ｐ３・Ｐ４の切り合い関係から、ＳＢ100より本建物跡が古い。付近にはＳＲ12・ＳＢ102がある。主軸方位は、Ｐ１・Ｐ３の中心を結んだラインを主軸線とした場合、Ｎ－23°－Ｅとなる。柱穴は４基確認した。ほぼ長方形状の配置で、各柱穴間の距離を柱穴の中心間で測ると、Ｐ１－Ｐ３は1.98m、Ｐ２－Ｐ４は1.80m、Ｐ１－Ｐ２は2.86m、Ｐ３－Ｐ４は3.00mである。Ｐ１は不整楕円形で長軸0.56m、短軸0.55m、深さ0.56m、Ｐ２は楕円形で長軸0.42m、短軸0.30m、深さ0.49m、Ｐ３は不整楕円形で長軸0.59m、短軸0.44m、深さ0.36m、Ｐ４は楕円形で長軸0.85m、短軸0.75m、深さ0.41mである。Ｐ１の１層は径約24cmの柱痕、２～４層が柱穴の埋土と考える。Ｐ２の１層は径約20cmの柱痕、２層が柱穴埋土と考えられる。Ｐ３の１層は径約33cmの柱痕、２層が柱穴埋土と考えられる。Ｐ４の１層は径約30cmの柱痕、２・３層が柱穴埋土と考えられる。

遺物（第15図）　Ｐ３・４から縄文土器片が出土した。18は口縁部が外反し口唇部が平坦で外面ナデ調整の上に沈線が描かれている土器片、19は同じく口縁部が外反し横走平行沈線が施され、吹きこぼれ痕の残る土器片、20は胴部に細い工具で沈線が施された土器片である。21は底部から内湾気味に立ち上がり、二次的に被熱を受けた土器片である。

まとめ　本遺構は４本の柱を規則的に長方形状に柱配置する掘立柱建物跡である。所属時期は、柱穴内から出土した土器から縄文時代後期初頭と考える。

ＳＢ102（第12図、図版２・３）

ＬＱ51・ＬＰ51グリッドの第Ⅲ層で確認した。重複する遺構はなく、付近にはＳＢ100・ＳＢ101がある。本遺構の立地点は調査区南東端で調査区外の急斜面にかかっていることから遺構全体の確認はできなかったが、３基確認した柱穴から亀甲形に柱配置するものと推定される。各柱穴間の距離を柱穴の中心間で測ると、Ｐ１－Ｐ２は2.16m、Ｐ１－Ｐ３は2.86mである。Ｐ１は円形で長軸0.72m、短軸0.71m、深さ0.66m、Ｐ２は楕円形で長軸0.80m、短軸0.70m、深さ0.50m、Ｐ３は楕円形で長軸0.89m、短軸0.71m、深さ0.59mである。Ｐ１の１層は径約28cmの柱痕、２・３層は柱穴埋土と考えられる。Ｐ２の１層は径約22cmの柱痕、２～４層が柱穴埋土と考えられる。Ｐ３は撹乱のため南寄りの土層確認とした。Ｐ３の１層は径38cmの柱痕、２層が柱穴埋土と考えられる。

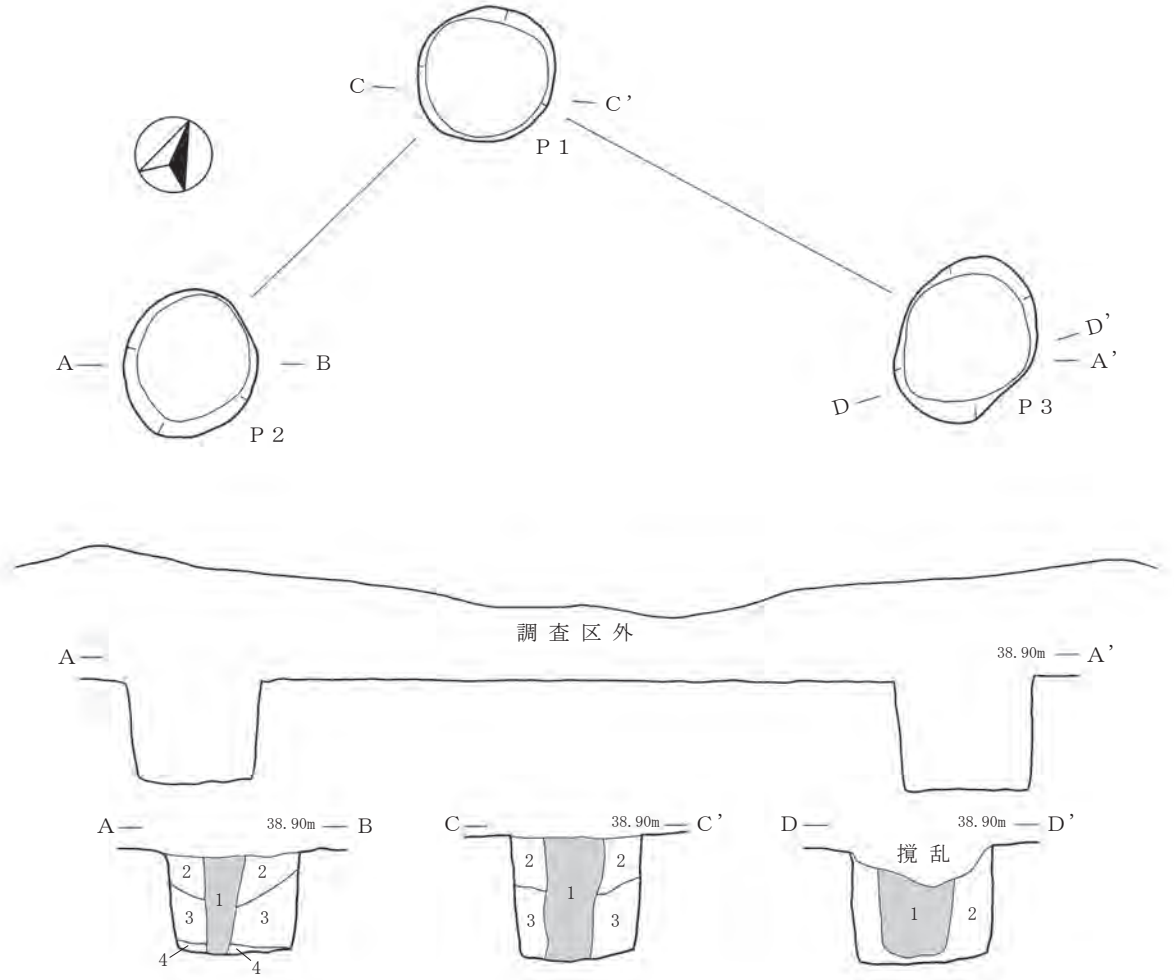
遺物　柱穴から横走する沈線文の土器片と無文の土器片が出土した。

まとめ　本遺構は、柱配置が亀甲形の掘立柱建物跡と推定される。所属時期は、柱穴内から出土した土器や周囲の遺構群との関連から、縄文時代後期初頭と考える。

第４表　ＳＢ100・101掘立柱建物跡柱穴計測表

（　）内の数値は残存値

番号	グリッド	平面形	規模（m）			底面標高（m）	備考
			長軸	短軸	深さ		
ＳＢ100　Ｐ１	ＬＲ52	楕円	0.56	0.53	0.50	38.37	径約 25cm の柱痕
ＳＢ100　Ｐ２	ＬＱ52	楕円	0.47	0.43	0.47	38.38	径約 27cm の柱痕
ＳＢ100　Ｐ３	ＬＲ51・52	楕円	0.60	0.59	0.38	38.40	径約 17cm の柱痕　ＳＢ101　Ｐ３より新しい
ＳＢ100　Ｐ４	ＬＱ51	楕円	0.63	0.60	0.48	38.44	径約 31cm の柱痕　ＳＢ101　Ｐ４より新しい
ＳＢ101　Ｐ１	ＬＲ52	不整楕円	0.56	0.55	0.56	38.28	径約 24cm の柱痕
ＳＢ101　Ｐ２	ＬＱ52	楕円	0.42	(0.30)	0.49	38.33	径約 20cm の柱痕
ＳＢ101　Ｐ３	ＬＲ51・52	不整楕円	0.59	(0.44)	0.36	38.38	径約 33cm の柱痕　ＳＢ100　Ｐ３より古い
ＳＢ101　Ｐ４	ＬＱ・ＬＲ51	不整楕円	0.85	0.75	0.41	38.41	径約 30cm の柱痕　ＳＢ100　Ｐ４より古い



Ｐ１
1　暗褐色土（10YR3/3）しまり中　粘性中、地山土塊φ1～10㎜ 10% 炭化物φ3～5㎜ 2%含む　柱痕
2　褐色土（10YR4/4）しまり中　粘性中、地山土塊φ5～10㎜ 30% 炭化物φ3～5㎜ 5%含む
3　にぶい黄橙色土（10YR7/3）しまり中　粘性中、黒褐色土（10YR3/2）50%斑状に含む
Ｐ２
1　暗褐色土（10YR3/3）しまり中　粘性中、地山土塊φ0.3～1㎜ 1%含む　柱痕
2　褐色土（10YR4/4）しまり中　粘性中、地山土塊φ5～10㎜ 30% 炭化物φ5～10㎜ 2%含む
3　にぶい黄橙色土（10YR7/3）しまり中　粘性中、黒褐色土 50%斑状に含む
4　黒褐色土（10YR3/2）しまり中　粘性中、地山土塊 10%含む
Ｐ３
1　にぶい黄橙色土（10YR7/3）しまり中　粘性中、黒褐色土（10YR3/2）50%斑状に含む　柱痕
2　にぶい黄橙色土（10YR7/3）しまり中　粘性中、黒褐色土（10YR3/2）5%含む

0　2m

第12図　ＳＢ102掘立柱建物跡

第５表　ＳＢ102掘立柱建物跡柱穴計測表

番号	グリッド	平面形	規模（m）			底面標高（m）	備考
			長軸	短軸	深さ		
Ｐ１	ＬＱ51	円	0.72	0.71	0.66	38.18	径約 28cm の柱痕
Ｐ２	ＬＱ51	楕円	0.80	0.70	0.50	38.23	径約 22cm の柱痕
Ｐ３	ＬＰ51	楕円	0.89	0.71	0.59	38.17	径約 38cm の柱痕

（３）土器埋設遺構

ＳＲ12（第13図、図版５・７）

ＬＲ52グリッドの第Ⅲ層で確認した。土器が散布している状況を確認し、黒褐色の円形の掘り込みプランを確認した。付近には切り株が存在し、その影響か遺構は円形の撹乱に切られている。重複する遺構はなく、付近にはＳＢ100・ＳＢ101がある。掘形規模は長軸0.83m、短軸0.29m、検出面からの深さは0.15mである。堆積土は３層あり、１層は黒褐色土で、開口していた埋設土器内部に自然流入した土と考えられる。埋設土器は壺形土器の胴部の一部を利用したもので、円形の掘形内に正位に設置している。周囲の削平状況から、埋設土器の上部も削平されている可能性が高い。２・３層は土器を埋設するための埋土と思われる。埋設土器（第15図22～25）には細いＬ撚糸文を施した後、竹管状工具による２条の沈線文を輪ゴムの様に描いた弧線文や直線・曲線状文様などが施されている。これらの特徴から縄文時代後期初頭の十腰内１式土器と考えられる。

まとめ　本遺構は、壺形土器の胴部の一部を利用した土器埋設遺構である。所属時期は、出土した土器から縄文時代後期初頭と考える。

ＳＲ45（第13図、図版５・８）

ＬＯ52グリッドの第Ⅲ層で確認した。周辺は耕作に伴う撹乱が第Ⅳ層まで到達しており、本遺構も本来の構築面は失われていると考える。重複する遺構はなく、付近にはＳＩ94・ＳＫ76がある。掘形規模は長軸0.62m、短軸0.52m、検出面からの深さは0.26mである。堆積土は炭化物を含む黒褐色土で、開口していた埋設土器内部に自然流入した土と考えられる。埋設土器は円形の掘形内に密着する状態で正位に設置している。土器の口縁部は削平のためかほとんど残っていなかった。埋設土器は壺形土器（第15図26～29）で、胴部上半には渦巻沈線を区画する斜位沈線が施される。胴部下半の無文地との境に横走沈線文が施される。最大径は胴部中央にある。口縁部から頸部にかけて粘土紐が貼り付けられ、口縁部は波状口縁で突起が付き、粘土紐は沈線で縁取られている。頸部はくびれている。縄文時代後期初頭の十腰内１式土器と考えられる。

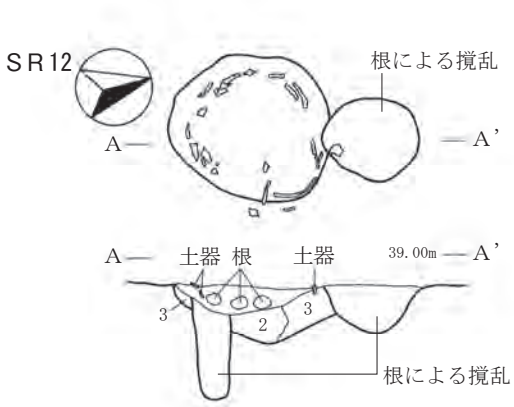
まとめ　本遺構は、壺形土器を利用した土器埋設遺構である。所属時期は、出土した土器から縄文時代後期初頭と考える。

（４）土坑

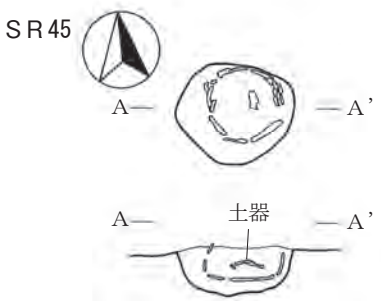
ＳＫ15（第13図、図版４・７～10）

ＭＤ51・ＭＥ51グリッドの第３層で確認した。重複する遺構はなく、隣接してＳＫ71がある。平面形は不整な円形で、規模は長軸2.20m、短軸1.96m、検出面からの深さは0.72mである。壁は直立気味に立ち上がる。底面はほぼ水平である。１・２層とも基本土層Ⅱ層の流入土と考えられるが、２層は炭の混入が多く見られる。３層は基本土層Ⅲ層にあたり、４～６層は地山と地山直上の土が混ざったもの、７層は当時の地山面の土であり、８層は混入物が少ないことから、土坑が掘られた直後か、比較的早い時期に遺構内に流れ込んだものと考えられる。

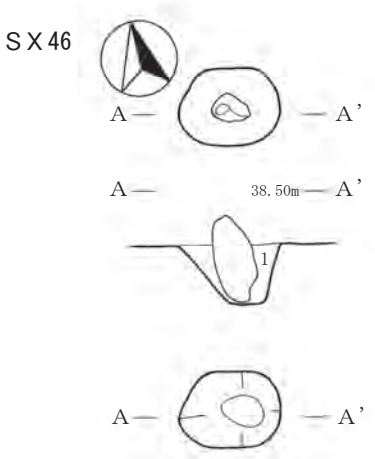
遺物（第16～18図）　出土した遺物は18ℓの遺物収納箱７箱で、土器類が３箱、石器類が４箱である。遺物は検出面の１層と底面の上方約20～30㎝の３～５層にかけて集中し、多数の土器片や石器が折り



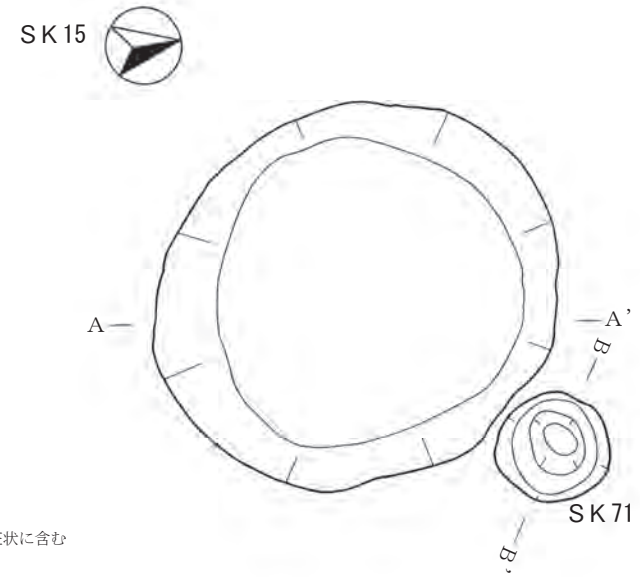
1　黒褐色土（10YR2/3）シルト　しまり弱　粘性中
2　黒褐色土（10YR3/2）シルト　しまり中　粘性中、地山土塊φ5～10㎜ 5%含む
3　黒褐色土（10YR3/2）シルト　しまり弱　粘性中、褐色土（10YR4/6）含む

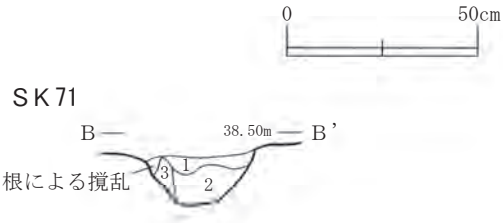


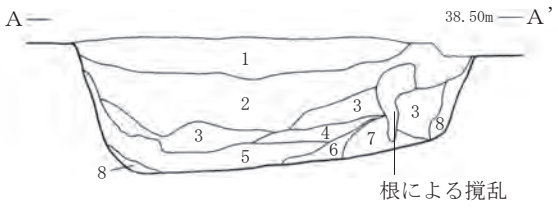
1　黒褐色土（10YR3/2）しまり強　粘性弱、地山土塊φ2～5㎜2%
　炭化物粒φ0.1㎜ 1%未満含む



1　暗褐色土（10YR3/4）粘土質　しまり中　粘性強、黒褐色土（10YR2/2）斑状に含む







SK15
1　黒褐色土（10YR2/2）シルト　しまり中　粘性弱、炭粒φ3～5㎜ 1%含む
2　黒褐色土（10YR2/3）シルト　しまり中　粘性弱、炭粒φ5～10㎜ 5% 白色粒φ0.5～1㎜ 1%含む
3　暗褐色土（10YR3/4）シルト　しまり中　粘性中、地山土塊φ1～3㎜ 5%下部に混入 白色粒φ0.1～0.3㎜ 1%含む
4　黒褐色土（10YR2/3）シルト　しまり強　粘性中、地山土塊φ0.1～0.3㎜ 3% 白色粒φ0.3～10㎜ 5%含む
5　明黄褐色土（10YR6/6）粘土　しまり強　粘性強、黒褐色土（10YR2/3）10% 白色粒φ1～5㎜ 1%含む
6　黒褐色土（10YR2/3）シルト　しまり中　粘性中、地山土塊φ5～10㎜ 15%　白色粒φ1～5㎜ 3%含む
7　にぶい黄褐色土（10YR5/4）シルト　しまり弱　粘性弱、白色粒φ0.3～0.8㎜ 25%含む
8　にぶい黄褐色土（10YR5/4）粘土　しまり強　粘性中、黒褐色土（10YR2/3）5%含む

SK71
1　暗褐色土（10YR3/3）しまり中　粘性中、地山土塊φ0.3㎜ 2%含む
2　褐色土（10YR4/4）しまり中　粘性強、地山土と１層の暗褐色土（10YR3/3）が50%ずつ混じる混合土
3　褐色土（10YR4/4）しまり中　粘性強、１層の暗褐色土（10YR3/3）10%含む

第13図　ＳＲ12・45土器埋設遺構、ＳＫ15・71土坑、ＳＸ46性格不明遺構

重なって出土した。30は深鉢の無文土器で、胎土が脆く、厚さは比較的薄い。口縁部は外反し、頸部がくびれ、吹きこぼれの痕が付着している。最大径は肩部である。31は壺形土器で無文地に３条の渦巻状沈線文が胴部上半に施され、その文様は無文の部分と横走平行沈線で分けられている。32は無文で口縁部が内湾する尖底ミニチュア土器である。33は深鉢の胴部の土器片でＬＲ結束回転文が施されている。34・35は平行沈線が施されている土器片である。台付土器の底部外面に赤彩が施されているものも出土した。これらは縄文時代後期初頭の特徴をもつ土器である。36は石槍で、基部付近に最大幅をもっている。37～39は三脚石器で、37は表面に天然アスファルトが付着し、裏面には自然面を残す。38は表面に複数回敲いてできた凹みが１つある。39は表裏両面に自然面を残す。40は両面調整礫器で、加工途中である。41・42は半円状扁平打製石器で、41は刃部に使用痕がある。43～45は凹石で、43は礫の片面に凹みが複数個もう一方の面に凹みが１つある。44は礫の２面に複数個の凹みがあり、側縁２辺を磨っている。45は礫の１面に３個の凹みがあり、石材は極めて脆い。

まとめ　本遺構の性格は不明である。所属時期は、出土した土器から縄文時代後期初頭と考える。

ＳＫ71（第13図、図版４）

ＭＤ50グリッドの第Ⅲ層で確認した。重複する遺構はなく、ＳＫ15に隣接する。平面形は不整の円形で、長軸0.58m、短軸0.58m、検出面からの深さは0.24mである。壁は直立気味に立ち上がる。底面はほぼ水平である。１層は地山塊を含む暗褐色土、２層～３層は地山土を含む褐色土で、人為的に埋め戻した土と考えられる。

遺物　縄文土器片が４点出土した。

まとめ　本遺構の性格は不明である。所属時期は、明確な根拠を欠くが周囲の遺構群との関連から縄文時代後期初頭と推定される。

ＳＫ76（第９図、図版１・10）

ＬＯ52・ＬＮ52グリッドの第Ⅲ層で確認した。ＳＩ94・ＳＫＰ77より本遺構が古い。本遺構の立地点は調査区の東端付近で、南側は急斜面となっている。周辺は耕作に伴う撹乱が地山まで到達しており、本遺構も本来の構築面は失われていると考える。平面形は楕円形で、検出された残存部分を測ると長軸1.38m、短軸0.86m、検出面からの深さは0.18mである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は鍋底状である。

遺物（第18図）　46は底部から胴部への立ち上がりが外傾する深鉢形土器と考えられる。胴部下半は無文だが、上方にはＬＲ斜縄文が施されている。47はＲＬ斜縄文が施され、口縁部が内湾する。48はＲＬ斜縄文の上に幅の広い横位沈線が施された土器片である。これらの遺物は重複する遺構であるＳＩ94の土器埋設炉の遺物と比較し、遺構の前後関係をふまえると、遺構に伴う遺物ではなく、流れ込みによるものである可能性が高い。49には細い線刻があり、黒色の物質が付着している。この礫を利用して何らかの作業を行った可能性がある。

まとめ　本遺構の性格は不明である。所属時期は、明確な根拠を欠くが周囲の遺構群との関連から縄文時代中期末葉～後期初頭と考える。

ＳＫ103（第９図）

ＬＮ52グリッドの第Ⅲ層で確認した。本遺構の立地点は調査区最東端で、本遺構の大部分が調査区外にかかっている。また、南東側は急斜面であることから、残存状況は極めて不良である。本遺構はＳＩ94より古く、ＳＫＰ104より新しい。平面形並びに規模、周壁や床面状態の詳細は不明であるが、残存部分で計測すると、長軸0.64m、短軸0.60m、検出面からの深さは0.20mである。

遺物　遺物は出土しなかった。

まとめ　性格及び所属時期は不明である。

（５）性格不明遺構

ＳＸ46（第13図、図版５）

ＭＤ50グリッドの第Ⅲ層で確認した。長軸0.53m、短軸0.42m、検出面からの深さが0.33mのピットの中央部に、長さ26.4cm、幅9.9cm、厚さ5.35cmの縦半分に割られた石が、検出面から半分頭を出すように立った状態で埋設されている。堆積土は１層のみ確認した。

遺物　細かい縄文土器片が２点出土した。

まとめ　性格及び所属時期は不明である。

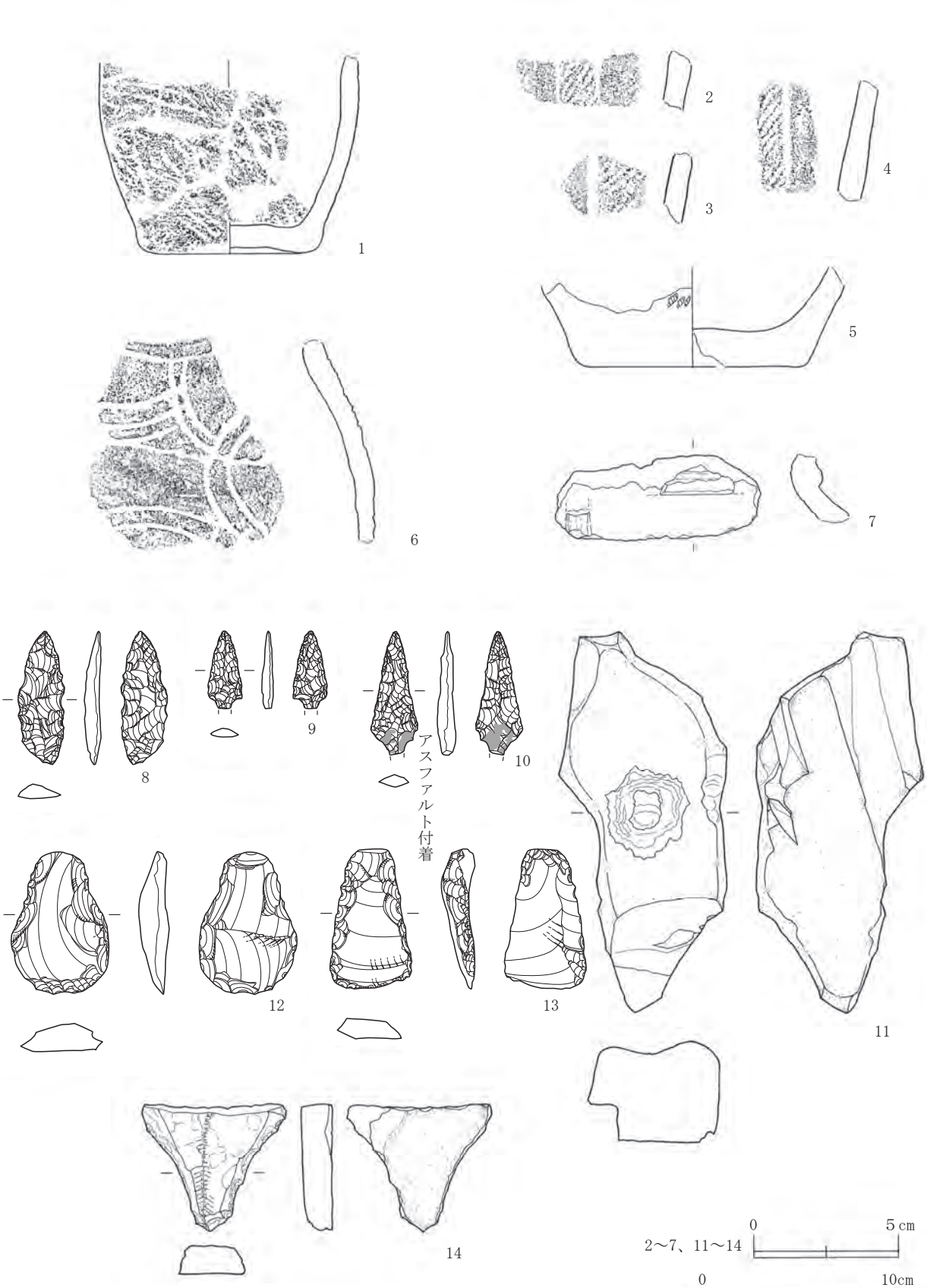
（６）柱穴様ピット

主として調査区北西側（ＭＢ53グリッド～ＭＦ54グリッド範囲内の北側）、調査区東側（ＬＮ52グリッド～ＭＡ53グリッド）で確認した。調査区北西側の柱穴様ピットは黒褐色土調の堆積土が主体で、第Ⅲ層以下で検出可能であった。平面形は円形か楕円形で規模は長軸0.23～0.48m、短軸0.22～0.40m、検出面からの深さは0.19～0.50mである。調査区東側の柱穴様ピットは暗褐色土調の堆積土が主体である。平面形は楕円形が多く、規模は長軸0.25～0.80m、短軸0.24～0.57m、検出面からの深さは0.13～0.57mである。ＳＫＰ88・109・111では径30cm程の柱痕が確認できた。ＳＫＰ53からは口唇部は平坦で、口縁部が外反し、横走沈線が施されている土器片（第19図51）が出土した。ＳＫＰ75からは口縁部が外反し、口唇部が丸みを帯びている土器片（第19図52）が出土した。口縁部には斜位沈線が施されている。外面調整はナデである。ＳＫＰ90から底部～胴部が出土した土器（第19図53・54）は外面に吹きこぼれ痕があり、全体的に器厚が薄い。底部からの立ち上がりは外径、胴部は直立気味に立ち上がる。胴部下半は無文だが、上半部には０段多条のＲＬ斜縄文が施文されている。ＳＫＰ91から出土した土器片（第19図55）は口縁部が内湾気味に立ち上がる。口唇部は丸みを帯びており、撚糸文が施されている。ＳＫＰ49からは、凹石（第19図50）が出土した。

第６表　柱穴様ピット一覧

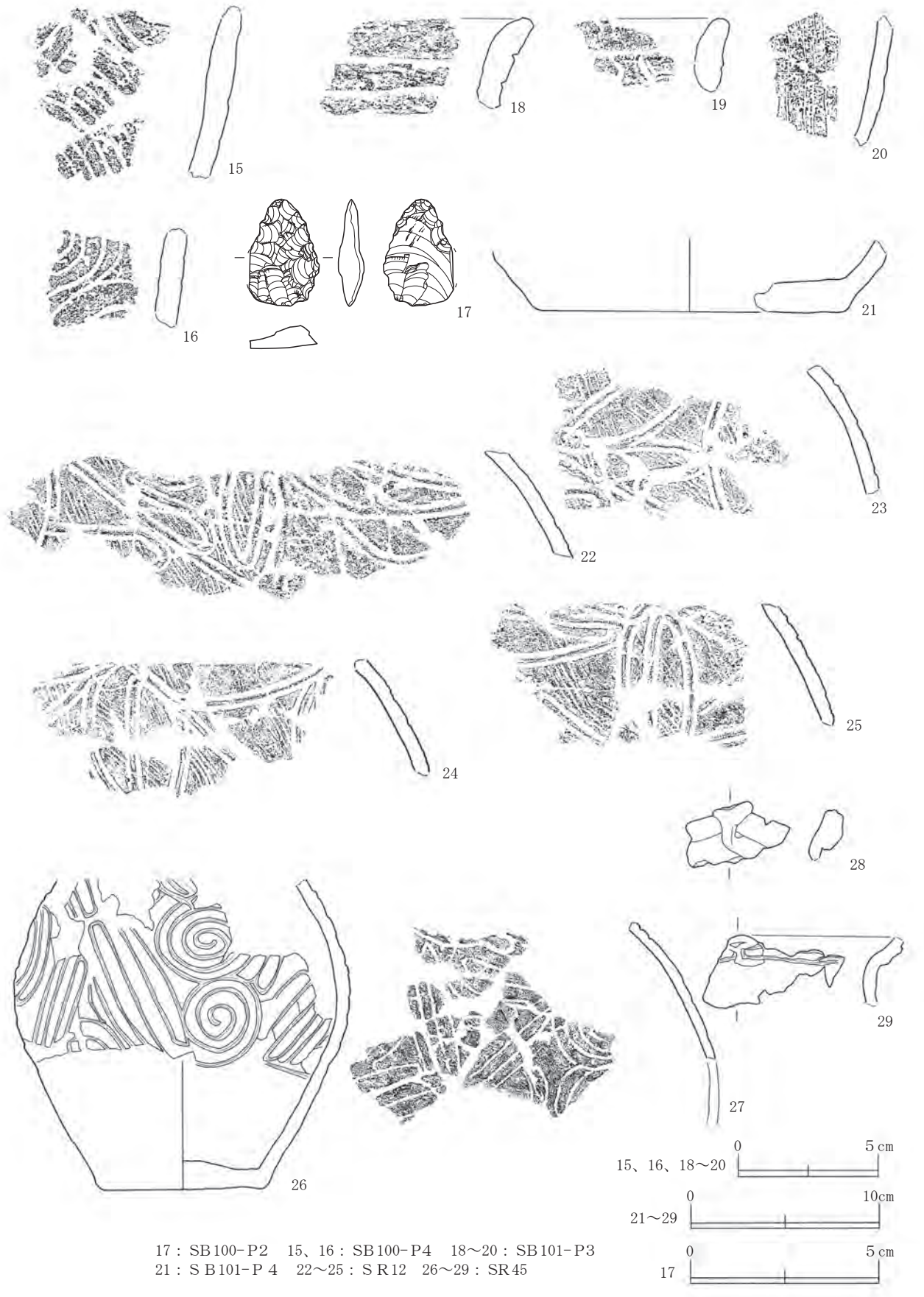
（　）内の数値は残存値

番号	グリッド	平面形	規模(m)			底面標高(m)	備　　考
			長軸	短軸	深さ		
40	ＭＣ53	円	0.28	0.27	0.46	37.94	
42	ＭＢ53	楕円	0.29	0.24	0.25	38.29	
43	ＭＢ53	円	0.23	0.22	0.33	38.30	
49	ＭＦ54	楕円	0.42	0.36	0.36	37.68	
50	ＭＦ54	円	0.27	0.25	0.40	37.62	
51	ＭＥ54	不整円	0.48	0.40	0.19	37.89	
53	ＬＳ51	楕円	0.48	0.46	0.54	38.12	
66	ＬＴ53	円	0.25	0.24	0.18	38.53	
70	ＬＲ52	楕円	0.60	(0.45)	0.57	38.23	径約 20cm の柱痕
73	ＭＥ51	楕円	0.44	0.32	0.20	38.14	
74	ＬＲ51	不整楕円	0.74	0.57	(0.18)	38.20	
75	ＬＲ53	楕円	0.80	0.51	0.50	38.39	径約 20cm の柱痕
77	ＬＮ52・ＬＯ52	楕円	0.54	0.50	0.46	38.25	ＳＫ76・ＳＩ94 炉より新しい
79	ＬＰ52	楕円	0.30	0.25	0.15	38.80	
80	ＬＰ52・ＬＱ52	不整楕円	0.46	0.37	0.26	38.59	
86	ＬＲ51	不整楕円	0.56	0.38	0.34	38.46	径約 16cm の柱痕
88	ＬＳ52・ＬＳ53	楕円	0.53	0.47	0.31	38.48	径約 32cm の柱痕
89	ＬＳ52	不整円	0.53	0.52	0.40	38.37	
90	ＬＯ52	楕円	0.36	0.33	0.26	38.45	
91	ＬＲ51	楕円	0.34	0.28	0.31	38.42	
93	ＬＱ51・ＬＲ51	楕円	0.31	0.25	0.13	38.61	
95	ＬＯ52	不整楕円	0.35	0.25	0.17	38.53	
96	ＬＯ52	不整楕円	0.42	0.37	0.21	38.49	
97	ＬＯ51・52	円	0.40	0.39	0.21	38.51	
98	ＬＯ51・52	楕円	0.47	0.37	0.21	38.47	
104	ＬＮ52	不整楕円	0.46	(0.15)	0.38	38.23	ＳＫ103・105 より古い
105	ＬＮ52	不整楕円	0.50	0.44	0.47	38.22	ＳＫＰ104・106 より新しい
106	ＬＮ52	楕円	0.35	0.28	0.24	38.41	ＳＫＰ105 より古い
108	ＬＴ53	楕円	0.43	0.40	0.48	38.12	
109	ＭＡ53	楕円	0.42	0.36	0.38	38.48	径約 35cm の柱痕
110	ＭＢ53・ＭＣ53	楕円	0.42	0.39	0.50	37.86	
111	ＭＣ52	楕円	0.39	0.35	0.45	37.78	径約 31cm の柱痕
112	ＬＮ52	楕円	0.39	(0.33)	(0.10)	38.48	
113	ＬＮ52	楕円	0.29	0.22	0.06	38.64	ＳＫ76 より新しい



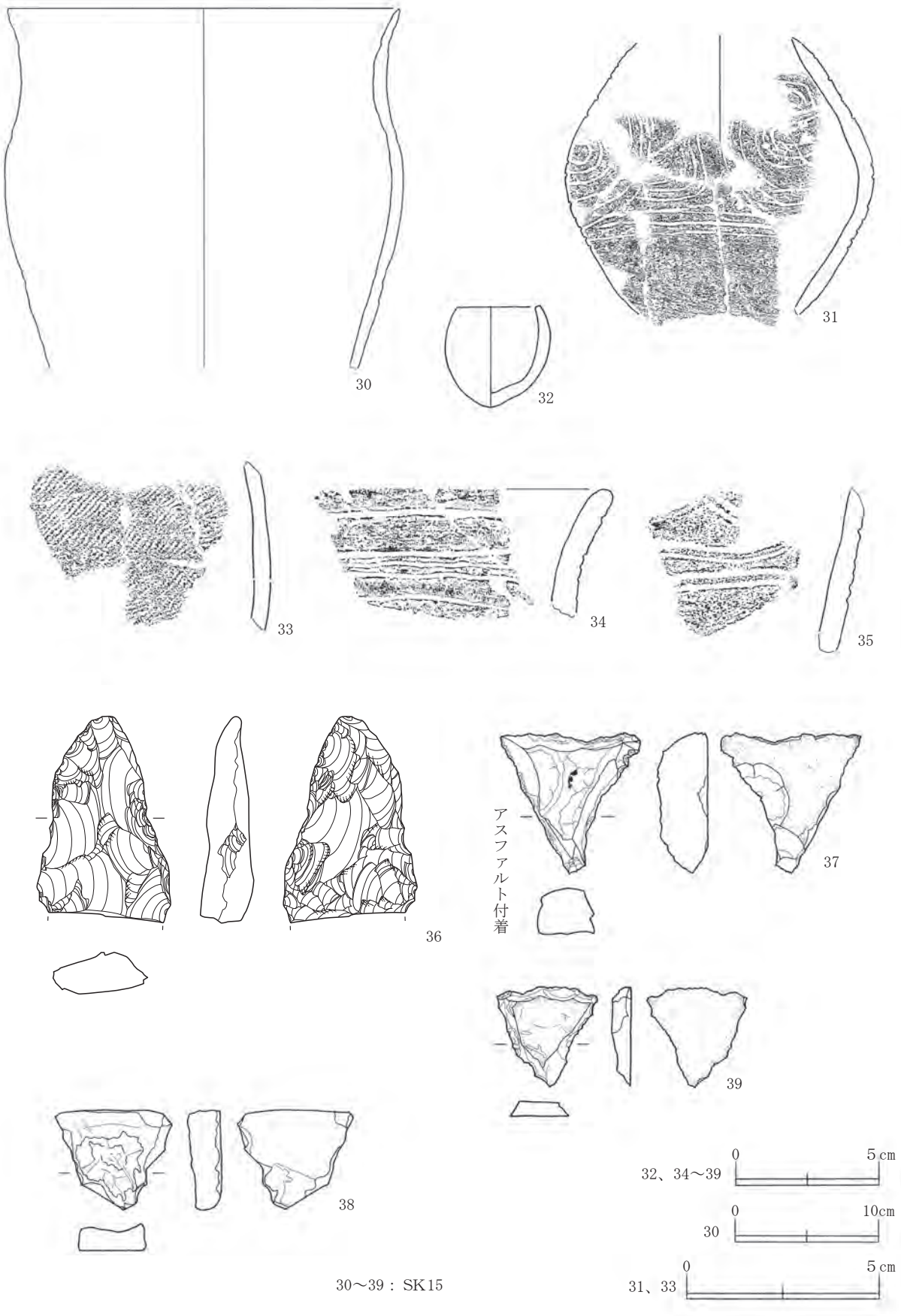
1：SI78　2～5：SI94炉　8、12：SB69-P1　6、9：SB69-P2
13：SB69-P3　7、10、11、14：SB69-P4

第14図　遺構内出土遺物（１）

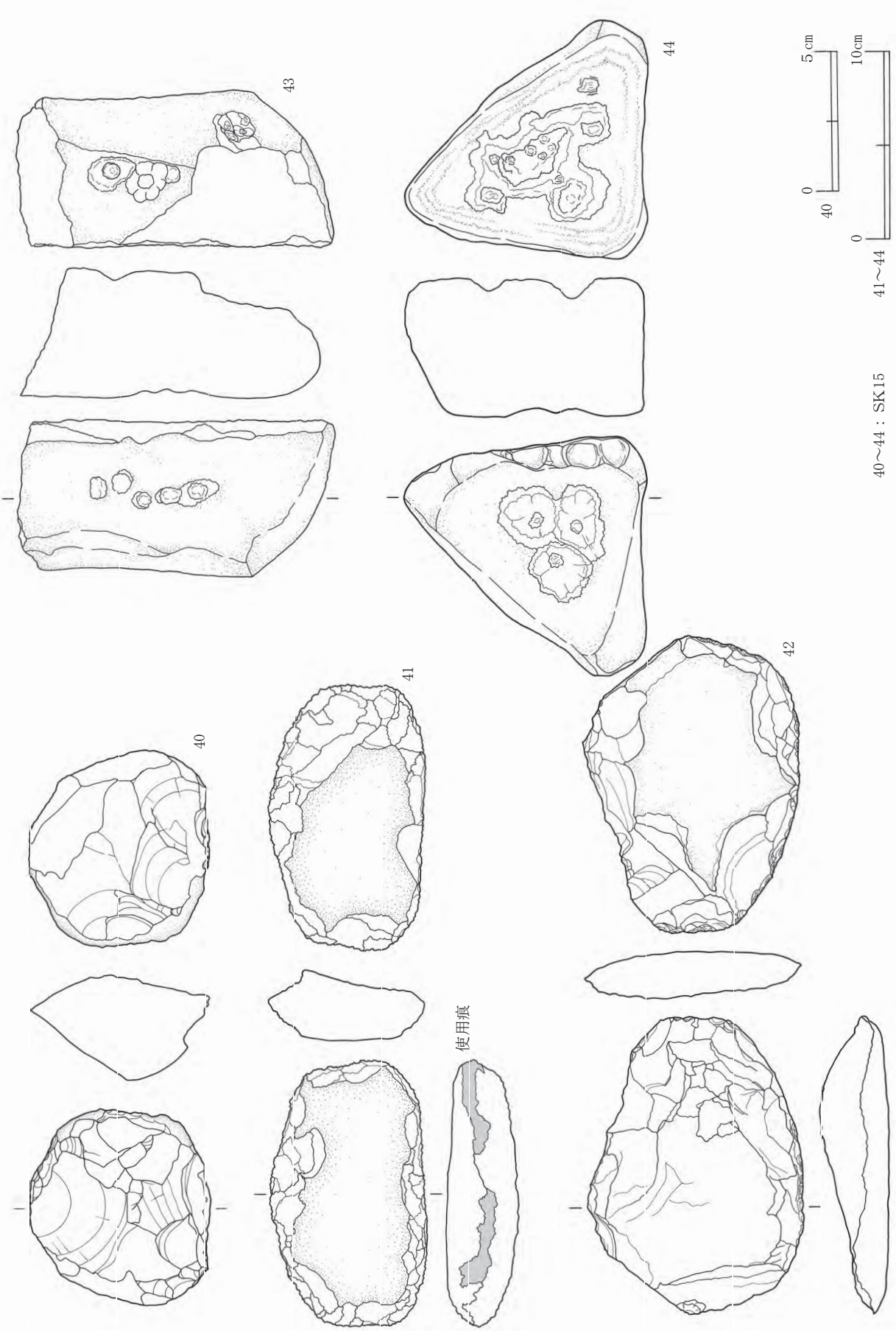


17：SB100-P2　15、16：SB100-P4　18～20：SB101-P3
21：ＳB101-Ｐ４　22～25：ＳR12　26～29：SR45

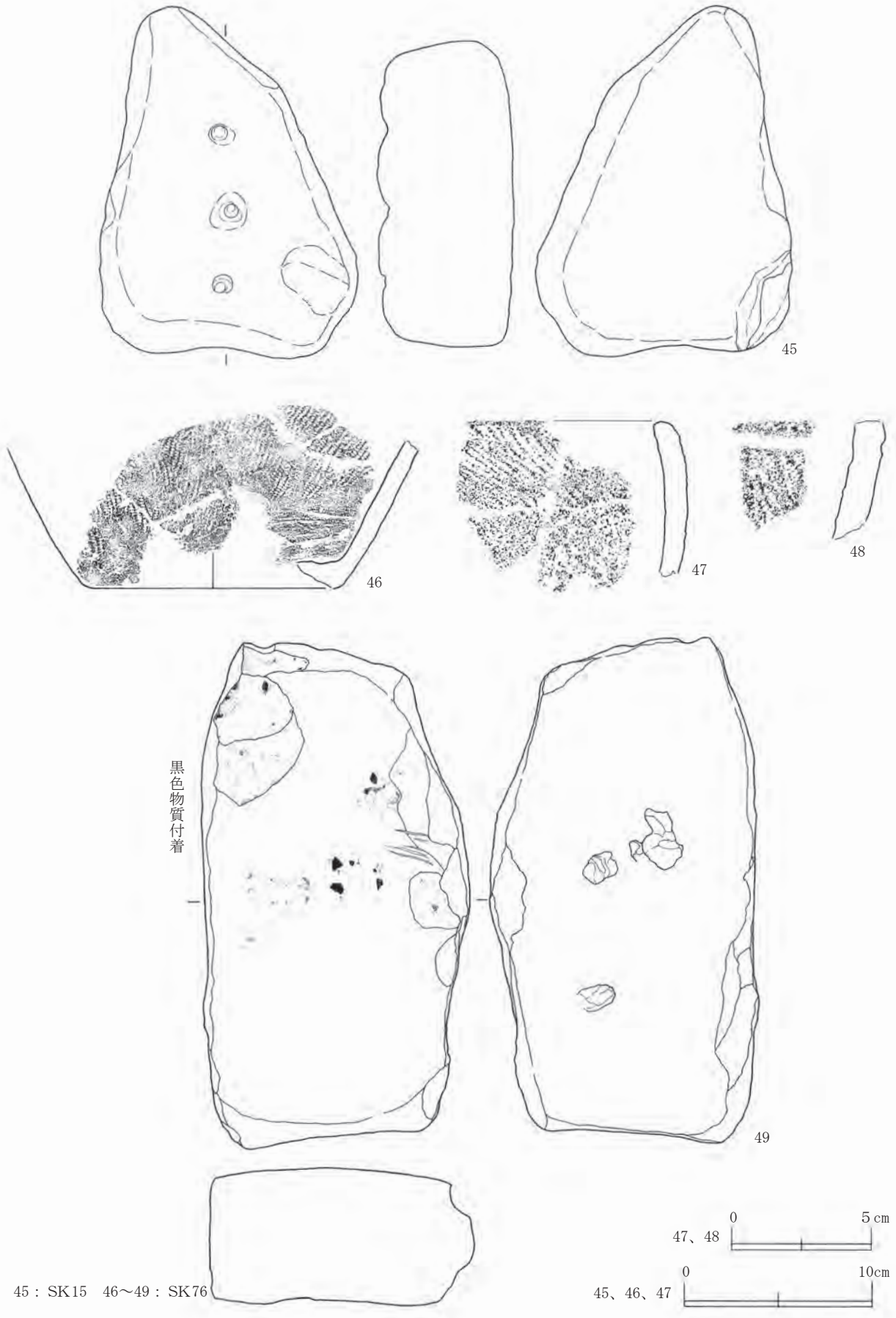
第15図　遺構内出土遺物　（２）



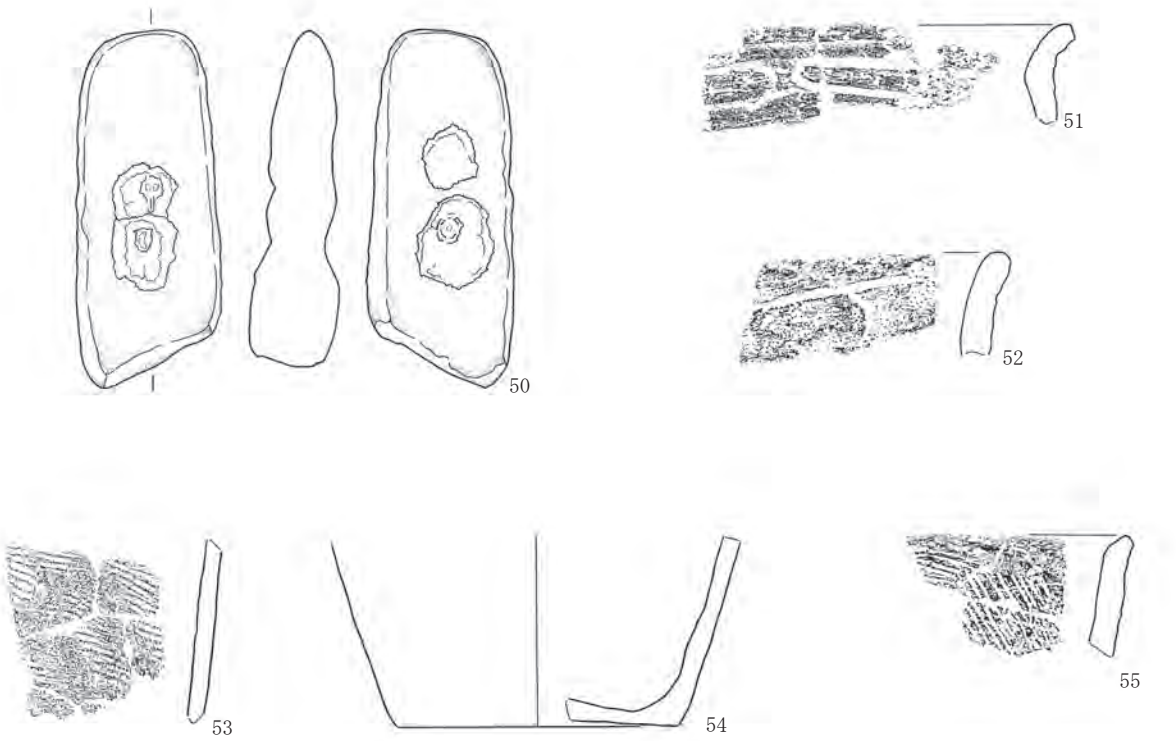
第16図　遺構内出土遺物（３）



第17図　遺構内出土遺物（４）



第18図　遺構内出土遺物（５）



50：SKP49　51：SKP53　52：SKP75　53、54：SKP90　55：SKP91

第19図　遺構内出土遺物（６）

第７表　遺構内出土土器観察表（１）

挿図番号	図版番号	器種	部位	層位	口径×底径×器高	文様の特徴・器面調整	出土遺構	備考
14-１	６-１	深鉢	底部～胴部	３層	－ ×8.9 ×(10.2)	胎土：繊維混入、風化により施文は不明、底部端にも施文	ＳＩ78	円筒下層式
14-２	６-２	深鉢	胴部	－	－	幅の狭い縦位沈線→ＬＲ斜縄文	ＳＩ94 炉	14-3.4.5 と同一 大木 10 式
14-３	６-２	深鉢	胴部	－	－	幅の広い縦位沈線→ＬＲ斜縄文	ＳＩ94 炉	14-2.4.5 と同一 大木 10 式
14-４	６-２	深鉢	胴部 底部～	－	－	幅の広い縦位沈線→ＬＲ斜縄文	ＳＩ94 炉	14-2.3.5 と同一 大木 10 式
14-５	６-２	深鉢	胴部	－	－ ×(3.4) ×7.5	ＬＲ斜縄文、胴部下半：無文	ＳＩ94 炉	14-2.3.4 と同一 大木 10 式
14-６	６-２	壺	肩部	－	－	弧線文２条と３条単位の曲線文	ＳＢ69 Ｐ２	十腰内１式
14-７	６-２	壺	頸部	－	－	粘土紐貼り付け→縁を囲むように沈線 頸部：くびれ、口縁部：外反。 外面調整：ナデ	ＳＢ69 Ｐ４	十腰内１式
15-15	６-２	深鉢	胴部	－	－	渦巻状平行沈線	ＳＢ100 Ｐ４	15-16 と同一 十腰内１式
15-16	６-２	深鉢	胴部	－	－	渦巻状平行沈線	ＳＢ100 Ｐ４	15-15 と同一 十腰内１式
15-18	６-２	深鉢	口縁部	－	－	口縁部：外反、横走平行沈線２条 口唇部：平坦、吹きこぼれ痕あり	ＳＢ101 Ｐ３	
15-19	６-２	深鉢	口縁部	－	－	口縁部：外反 口唇部：平坦。沈線文	ＳＢ101 Ｐ３	
15-20	６-２	深鉢	胴部	－	－	細い工具による沈線 内面調整：ミガキ	ＳＢ101 Ｐ３	
15-21	７-２	深鉢	底部	－	×15.3 ×(3.9)	底部から胴部が内湾気味に立ち上がる ２次的に被熱を受けている。	ＳＢ101 Ｐ４	
15-22	－	壺	胴部	－	－	単軸絡条体による撚糸文→竹管状工具によってつけられた沈線は輪ゴム状に始点終点が連結、直線・弧線文。 内面調整：ナデ	ＳＲ12	15-23.24.25 と同一 十腰内１式
15-23	７-２	壺	胴部	－	－	単軸絡条体による撚糸文→竹管状工具によってつけられた沈線は輪ゴム状に始点終点が連結、直線・弧線文。 内面調整：ナデ	ＳＲ12	15-22.24.25 と同一 十腰内１式
15-24	７-２	壺	胴部	－	－	単軸絡条体による撚糸文→竹管状工具によってつけられた沈線は輪ゴム状に始点終点が連結、直線・弧線文。 内面調整：ナデ	ＳＲ12	15-22.23.25 と同一 十腰内１式
15-25	７-２	壺	胴部	－	－	単軸絡条体による撚糸文→竹管状工具によってつけられた沈線は輪ゴム状に始点終点が連結、直線・弧線文。 内面調整：ナデ	ＳＲ12	15-22.23.24 と同一 十腰内１式
15-26	８-１	壺	胴部	－	－ ×(9.0) ×(16.6)	胴部上半に渦巻沈線文、下部の無文地との境界に横走沈線、斜位平行沈線３条は中央部で交錯。最大径は胴部中央	ＳＲ45	15-27.28.29 と同一 十腰内１式
15-27	８-１	壺	胴部	－	－	胴部上半に渦巻状沈線文 斜位平行沈線３条は間に中央部で交錯	ＳＲ45	15-26.28.29 と同一 十腰内１式
15-28	８-１	壺	口縁～頸部	－	－	波状口縁：粘土紐貼り付け →細い工具による沈線	ＳＲ45	15-26.27.29 と同一 十腰内１式
15-29	８-１	壺	口縁～頸部	－	－	口縁部：外反 頸部：くびれ 粘土紐貼り付け→沈線	ＳＲ45	15-26.27.28 と同一 十腰内１式
16-30	８-２	深鉢	胴部上半	１層 ２層 ３層 ５層	27.4× － ×(25.7)	口縁部：外反 頸部：くびれ 最大径：肩部。無文。頸部に厚み。 口縁部につれ、薄くなっていく。	ＳＫ15	
16-31	９-１	壺形	胴部	２層	－	３条の横走平行沈線を境界に胴部上半に渦巻状沈線文。	ＳＫ15	十腰内１式

第８表　遺構内出土土器観察表（２）

挿図番号	図版番号	器種	部位	層位	口径×底径×器高	文様の特徴・器面調整	出土遺構	備考
16-32	8－2	ミニチュア土器	完形	１層	3.0 × 0.2 × 3.7	無文尖底土器	ＳＫ15	尖底
16-33	9－1	深鉢	胴部	２層	－	ＬＲ斜縄文、綾繰文	ＳＫ15	
16-34	9－1	深鉢	口縁部	１層	－	口縁部：外反 横位平行沈線１条・３条	ＳＫ15	十腰内１式
16-35	9－1	深鉢	胴部	１層	－	２条の曲線状平行沈線	ＳＫ15	十腰内１式
18-46	10－2	深鉢	胴～底部	－	－ × 13.0 ×（7.9）	ＬＲ斜縄文、胴部下半一部は無文 底部～胴部への立ち上がりは緩やかに外傾 外面底部周辺：ナデ	ＳＫ76	
18-47	10－2	深鉢	口縁部	－	－	口唇部：平坦。口縁部：内湾して立上り。 ＲＬ斜縄文。焼きしまりは硬質。	ＳＫ76	
18-48	10－2	深鉢	胴部	－	－	ＲＬ斜縄文→幅の広い横位沈線	ＳＫ76	
19-51	10－2	深鉢	口縁部	－	－	口縁部：外反 ２条の沈線とそれをつなぐ弧線	ＳＫＰ53	
19-52	10－2	深鉢	口縁部	－	－	口縁部：外反 口唇部：丸みを帯びる 斜位沈線と弧線	ＳＫＰ75	
19-53	－	深鉢	胴部	－	－	０段多条のＲＬ斜縄文。 外面に吹きこぼれ痕。	ＳＫＰ90	19-54 と同一
19-54	10－2	深鉢	底部	－	－ × 11.0 ×（7.5）	胴部下半：無文。	ＳＫＰ90	9-53 と同一
19-55	10－2	深鉢？	口縁部	１層	－	単軸絡条体による撚糸文 内面調整：ミガキ	ＳＫＰ91	

第９表　遺構内出土石器計測表

（　）内の数値は残存値

挿図番号	図版番号	種別	出土位置	長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）	重量（g）	備考
14－8	7－1	石鏃	ＳＢ69　Ｐ１	34.7	12.2	4.4	1.6	尖基鏃
14－9	7－1	石鏃	ＳＢ69　Ｐ２　１層	(20.2)	9.0	3.0	0.5	凸基有茎鏃　茎部折損
14-10	7－1	石鏃	ＳＢ69　Ｐ４　２層	(32.1)	12.3	4.9	1.3	天然アスファルト付着　茎部折損
14-11	7－1	凹石	ＳＢ69　Ｐ４　２層	58.0	133.0	36.5	234.6	
14-12	7－1	石篦	ＳＢ69　Ｐ１	50.0	34.4	10.9	17.1	丸刃 横長剥片
14-13	7－1	石篦	ＳＢ69　Ｐ３	49.1	28.9	11.9	12.7	丸刃 縦長剥片
14-14	7－1	三脚石器	ＳＢ69　Ｐ４　２層	44.0	50.0	11.0	21.3	魚の脊椎が化石として残る石
15-17	7－1	石鏃	ＳＢ100　Ｐ２	28.8	(18.9)	7.0	3.1	円基鏃　欠損
16-36	7－1	石槍	ＳＫ15　１層	72.1	47.7	19.7	51.6	基部折損
16-37	7－1	三脚石器	ＳＫ15　１層	49.5	49.0	17.5	27.5	天然アスファルト付着
16-38	7－1	三脚石器	ＳＫ15	35.0	41.0	11.5	10.7	表面に凹みが１つある
16-39	7－1	三脚石器	ＳＫ15　３層	35.0	35.0	6.5	6.4	両面に自然面
17-40	9－2	両面調整礫器	ＳＫ15　１層	64.5	71.0	38.0	189.8	
17-41	9－2	半円状扁平打製石器	ＳＫ15　１層	84.0	143.0	38.0	553.9	使用痕
17-42	9－2	半円状扁平打製石器	ＳＫ15　３層	115.0	159.0	36.0	495.9	
17-43	9－2	凹石	ＳＫ15　５層	170.0	85.0	75.0	1184.6	
17-44	9－2	凹石	ＳＫ15　１層	130.0	128.0	75.0	859.3	
18-45	10－1	凹石	ＳＫ15　２層	189.0	137.5	73.5	1560.0	
18-49	10－1	礫石器	ＳＫ76　１層	272.0	143.0	76.0	3590.0	
19-50	10－1	凹石	ＳＫＰ49	142.0	58.0	36.0	225.3	

第３節　遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、調査区全域の第Ⅱ層下面から第Ⅲ層にかけての遺物包含層から出土した。調査区は平成16年まで畑地として使用されており、これらの土を巻き上げたⅠ層にも多くの遺物が混入している。調査区北東側の表土は南東側に移動し整地された形跡があり、遺物の出土量は少ない。調査区の西側はⅣ層地山までの層厚が増し、特に北西側のＭＤ54・ＭＥ54・ＭＦ54グリッドは層が厚く、他に比べて遺物が集中する範囲である。ここでは、各出土遺物の特徴を説明する。

１　土器

縄文時代前期・後期、弥生時代の土器が出土している。中でも縄文時代後期初頭の十腰内１式土器に包括されるものが多い。縄文時代の遺物は遺跡全体から出土している。最も遺物が集中して出土したのはＭＥ54・ＭＦ54グリッド及びその周辺である。周辺に遺構は検出されていない。

１類（第20図１～13）

胎土に繊維を混入させたもので、全体的に厚みがあり、焼成は脆い。施文は撚糸文・斜縄文が多くみられる。10～12は条痕文が胴部下半まで施文された土器片で、これらは円筒下層ａ式、ｂ式土器と考えられる。

２類（第21～23図14～63）

主に無文地に渦巻き・平行沈線を施すものが多く、文様は胴部上半に集中するものが多い。胴部下半の無文地との境には平行沈線などで区画・境界線を引くものがみられる。胴部上半の沈線は曲線状、もしくは渦巻き状・幾何学状の文様が占める。中には縄目文の上に沈線を施すものや胴部下半にまで沈線を施すものもみられる。14は小型の深鉢形土器で、山形口縁頂部にボタン状貼付文の様な装飾とその内面に沈線を施す。外面口縁部は突帯で区画、沈線で縁取り、胴部は３条の斜位平行沈線が胴部中央で交錯している。15は球形の小型の壺形土器で、胴部上半に帯状に沈線文様が一周する。無文地に横位の沈線が施され、その間に曲線状に３単位同一の文様が施される。これらは十腰内１式土器と考えられる。その他、磨消縄文や充填斜縄文の土器片が出土している。

３類（第23図64）

口縁部に巨大な環状装飾把手をもつもので、環状の周囲は沈線が施されている。胴部は欠損しており、全体を確認することはできない。これらは十腰内２式土器にみられる特徴である。

４類（第23図65）

胴部にハケメ調整を行った後、ＬＲ斜縄文を施している。頸部には縄文地の上から縦方向にハケメ調整がなされている。

以上の１類は縄文時代前期、２類は縄文時代中期末葉～後期初頭、３類は縄文時代後期前葉、４類は弥生時代の土器である。

２　土製品

鐸形土製品（第23図66）

上部と下部に渦巻状沈線が施され、側面部は稜線を形成している。片面の一部が欠損しているもの

の、稜線を境に両面とも同じ文様である。内面頂部は丸みをおび、調整はナデである。

３　石器

遺構外出土石器と剥片･砕片を併せた出土量は、18ℓの遺物収納箱72箱である。剥片･砕片を除いた石器の種類別の比率は、石鏃27％、石槍７％、石匙13％、石錐２％、石篦６％、掻器８％、磨石１％、凹石８％、磨製石斧１％、石錘３％、半円状扁平打製石器５％、三脚石器19％である。

石鏃（第24図）

73点出土した。長軸５㎝未満の尖頭器を石鏃とし、形状から５つに大別できる。各種別ごとの内訳は、凹基無茎鏃３点（４％）、平基無茎鏃３点（４％）、円基鏃14点（20％）、有茎鏃36点（50％）、尖基鏃16点（23％）であり、有茎鏃が圧倒的に多い。１～３は凹基無茎鏃である。１は側縁が外に膨らむ凸刃状のもので抉れが深い。２は側縁が部分的に凹刃状で茎部の抉れが浅い。３は側縁が直線で茎部の抉れが深い。４～６は平基無茎鏃である。４は側縁が部分的に凹刃状で、５、６は側縁が外に膨らむ凸刃状である。７～12は円基鏃である。13～27は有茎鏃である。14、16、17、19は側縁が外に膨らむ凸刃状の凸基有茎鏃、13、18、20、24～26は側縁が直線もしくは部分的凹刃状の凸基有茎鏃、15、27は凹基有茎鏃、21～23は側縁が部分的凹刃状の平基有茎鏃である。28～29は段のない弧状の側縁の尖基鏃、30は柳葉形鏃である。

石槍（第25・26図）

17点出土した。長軸５㎝以上の尖頭器を石槍とし、長短比から２つに大別できる。31～39は長：幅の比が10：４以下のものである。31は先端付近に最大幅をもつ。32～36は中央部に最大幅をもつ。37は基部付近に最大幅をもつ。38、39は調整が粗雑である。40～47は長：幅の比が10：５以上のものである。40は中央部に最大幅をもつ。41～47は基部付近に最大幅をもつ。

石篦（第27・28図）

14点出土した。末端部に刃部を作り出すものを石篦とした。すべて横長剥片を素材としている。刃部形状は48～54が丸刃状、55、57、58は直刃である。56は製作途中の破損品と考える。

石錐（第28図）

４点出土した。先端を刺突具状に尖らせているもので、石鏃に比べて断面が角張るものを石錐とした。59、60は流線形のもので、60の先端は使用によって摩滅している。61、62は先端を細く作り出し、基部が広いものであり、62には天然アスファルトが付着している。

石匙（第28・29図）

35点出土した。つまみを作り出しているものを石匙とした。63～69、73は縦型石匙で、縦長剥片を素材としている。63～65は両側縁が線対称で主要剥離両側への調整が少なく、先が平らになっている。66～68は片側縁が長く主要剥離両側への調整が少ない。69は片側面が長く全体的に角張り主要剥離両側への調整が少なく、側縁の長短比が大きい。73はつまみ中軸ラインに末端部のラインが直行する形状のものである。70～72、74は横型石匙で、横長剥片を素材としている。68、71～74には草本植物に対して使用したと思われる使用痕光沢がみられる。

掻器（第30・31図）

20点出土した。分厚い剥片の一端に片面調整による急斜度の刃部を作出した石器である。75、77、

79、80、82、84～86は剥片の一端にＵ字形の刃部を作出したものである。76、81、83は剥片の一端にＶ字形の刃部を作出したものである。78は剥片の一端に直線的な刃部を作出したものである。

石錘（第31図）

８点出土した。87～93は自然礫長軸の両端に抉りを有するものである。87、88、90は大型の石錘で、87は礫の１面に複数の敲打痕があり、側面に磨面が認められる。90は側面に磨面が認められる。89、91～93は小型の石錘で、89、93は切込みを打ち欠いて作っている。

半円状扁平打製石器（第32図）

14点出土した。94、95は直線的な底縁が主な使用面で、両端から打ち欠いて調整している。96は扁平な楕円礫の長軸側側縁に敲打による不規則な剥離が認められる。97は側縁に抉りがみられる。98、99は磨痕が顕著である。

凹石（第33・34図）

22点出土した。礫の片面、または両面に凹み状を呈する敲打痕を有する石器である。100は扁平な礫の片面に凹みが１つできており、両面には敲打痕がみられる。101～103は連続した凹みが片面に認められる。104は両面に凹みが１つずつ認められる。105は連続した凹みが両面に認められる。

磨製石斧（第34図）

106、107は定格式磨製石斧である。両側縁および頭部が研磨されたもので、断面が隅丸長方形を呈するものである。106は小型である。

磨石（第34図）

礫の面を磨いている石器である。108は楕円形の礫の先端を磨っているものである。

石皿（第34図）

中央を凹めた皿形の石器である。109は中央部分に摩耗痕と敲打痕が認められる。

三脚石器（第35～38図）

52点出土した。主として盤状の礫を剥離して３つの脚部を作出している石器であり、自然面を残すものが多い。形状から４つに大別できる。110～119は３つの脚部が広角の二等辺三角形状を呈する。120～131は３つの脚部がほぼ正三角形状を呈する。132～133は３つの脚部が狭角の二等辺三角形状を呈する。134は三叉状に抉りの無い三角形を呈し、135～143は不定形状のものである。110、124～126、128は表面の中央部に天然アスファルトを塗布している。111～113、133、137は自然面に線刻がある。

円盤状石製品（第39図）

144、145は盤状の礫の周囲を剥離成形して円盤状の形状に作り出したものである。

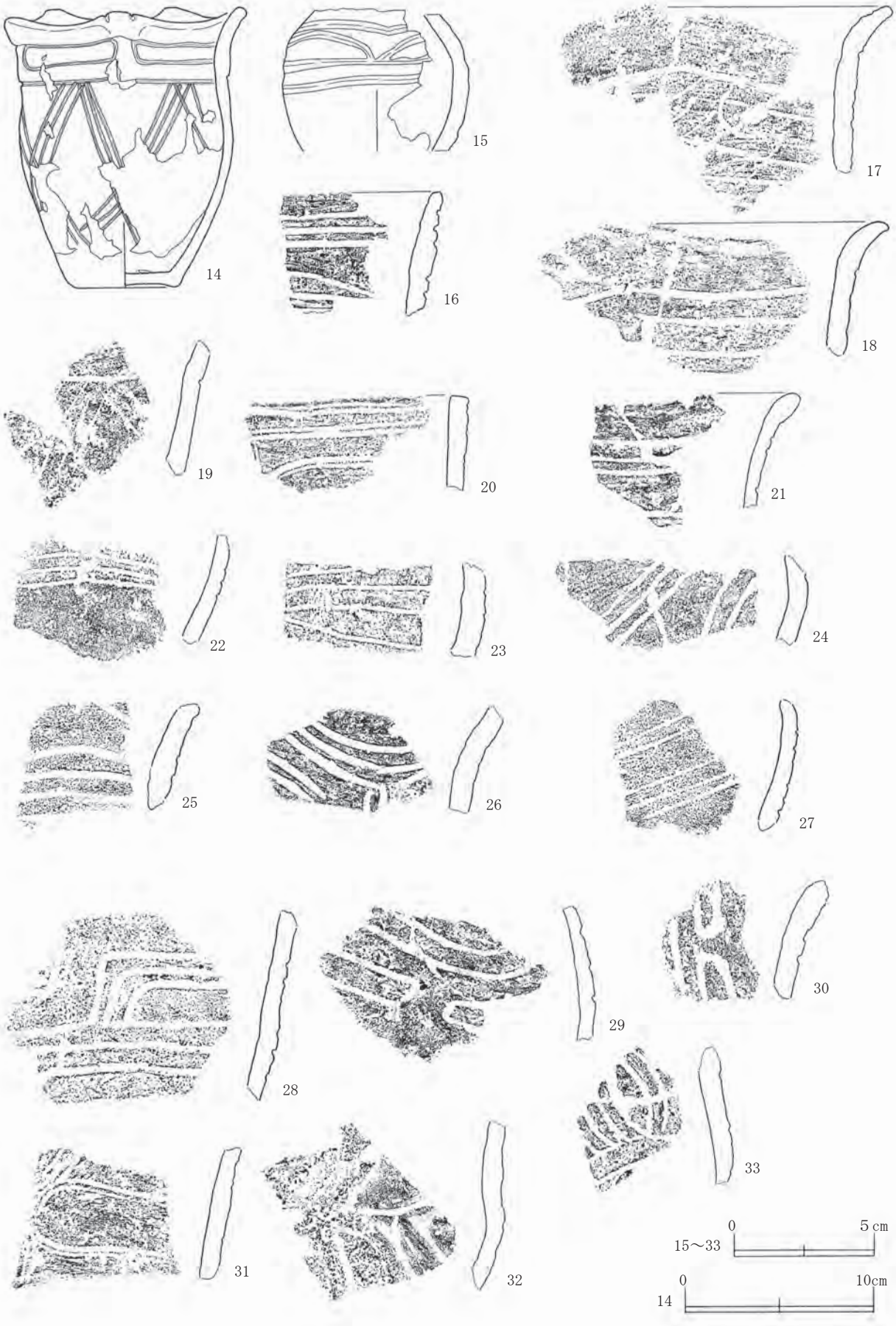
線刻礫（第39図）

礫の平坦面に細い刻みを施しているものを線刻礫とした。146は男根状と思われる線刻を片面に施している。147は扁平な礫の平坦面に、桝目状に細い刻みを施している。

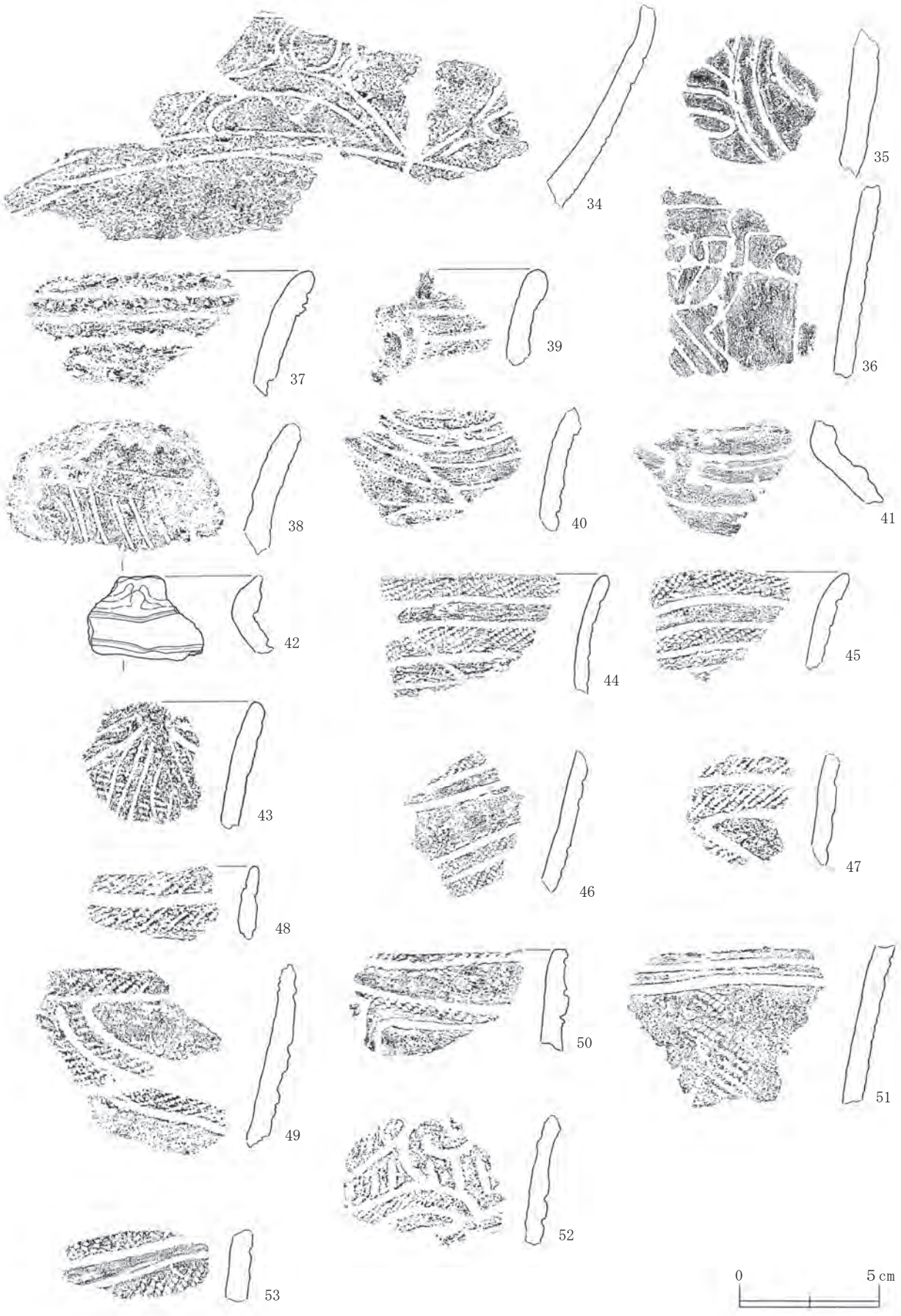
球状石製品（第39図）

球状の形状を呈する石製品である。149、150は球形の中央部分に浅い凹みが認められる。

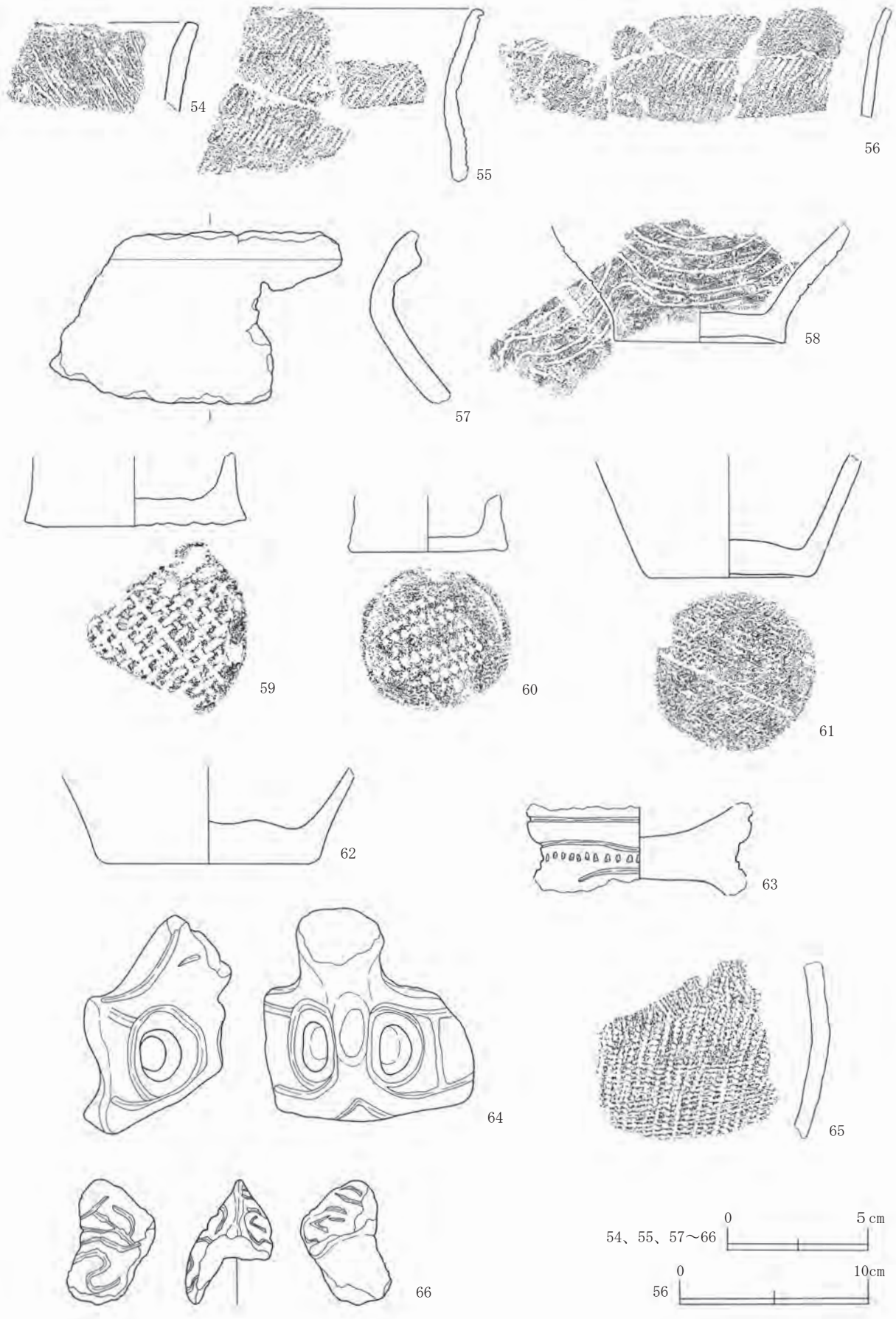
第20図　遺構外出土遺物　土器（１）



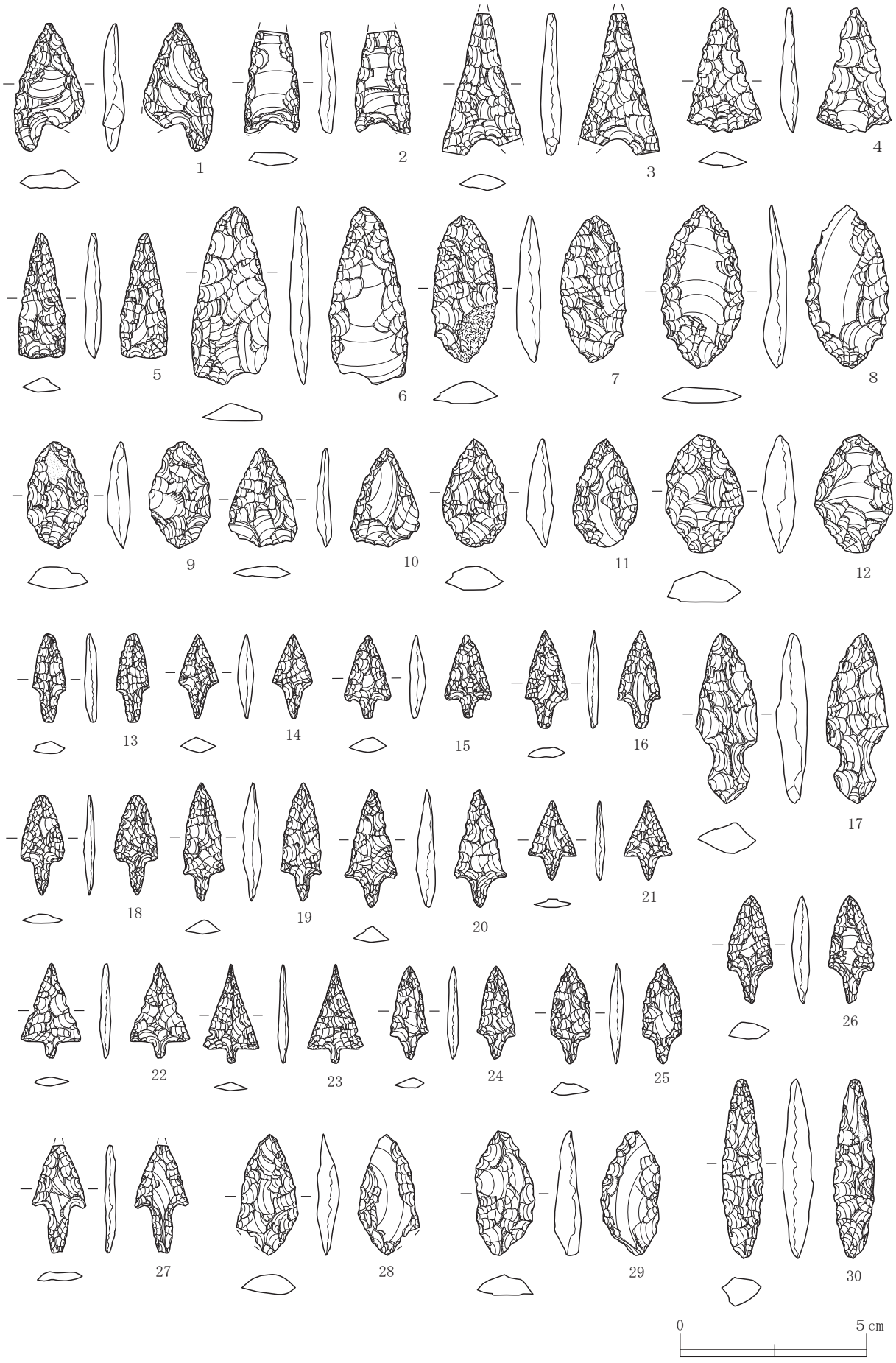
第21図　遺構外出土遺物　土器（２）



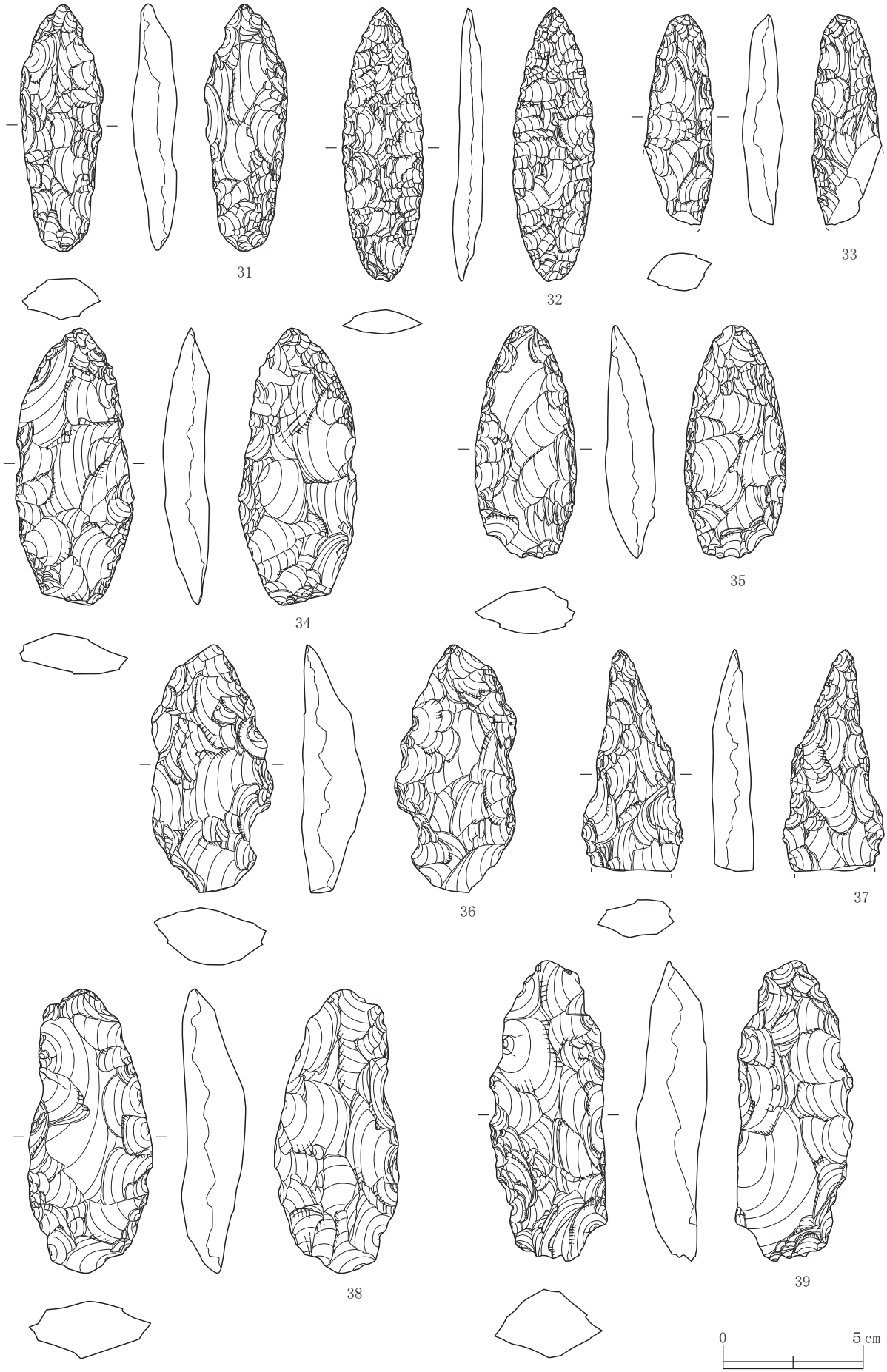
第22図　遺構外出土遺物　土器（３）



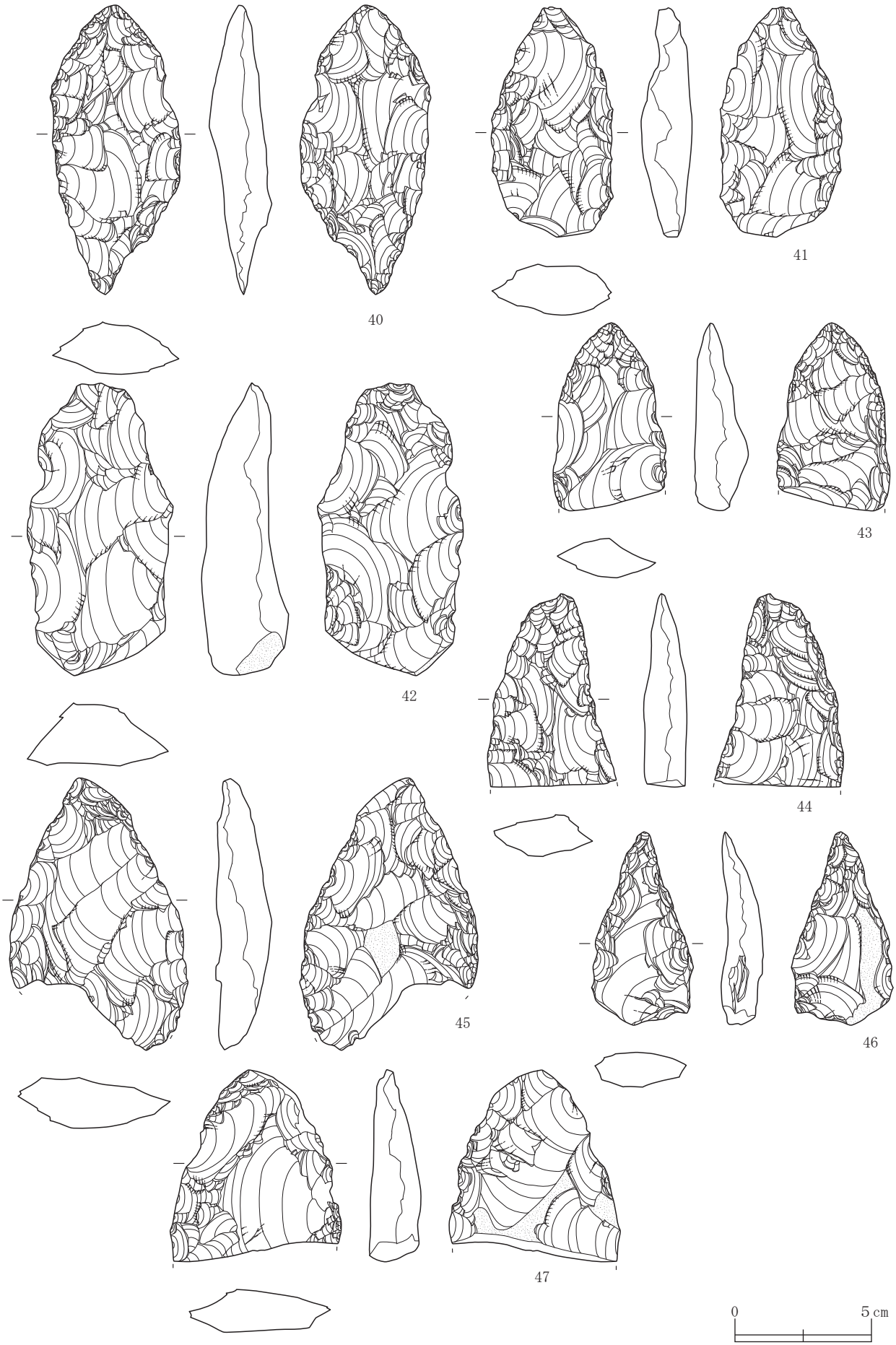
第23図　遺構外出土遺物　土器（４）



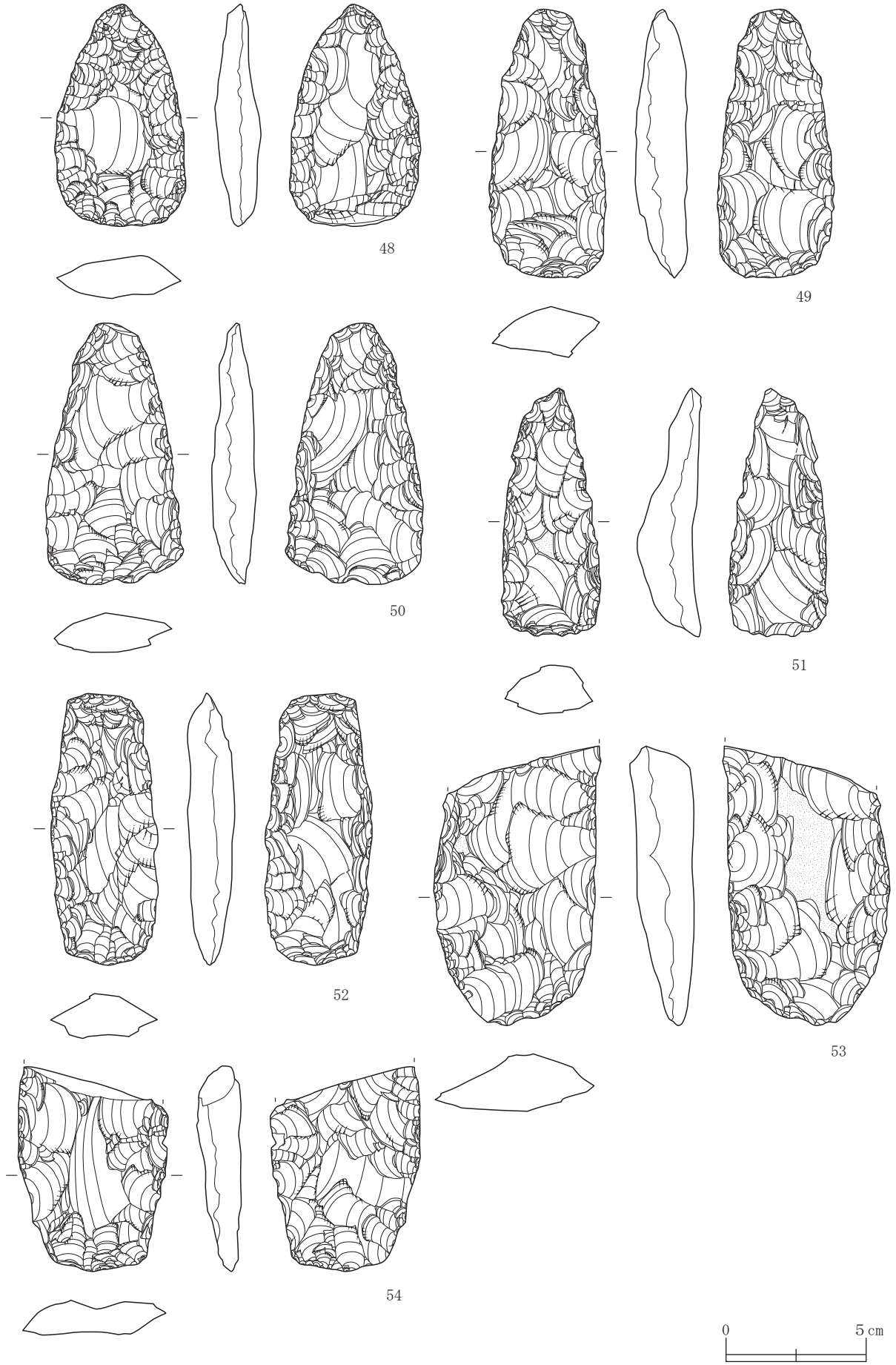
第 24 図　遺構外出土遺物　石器（１）



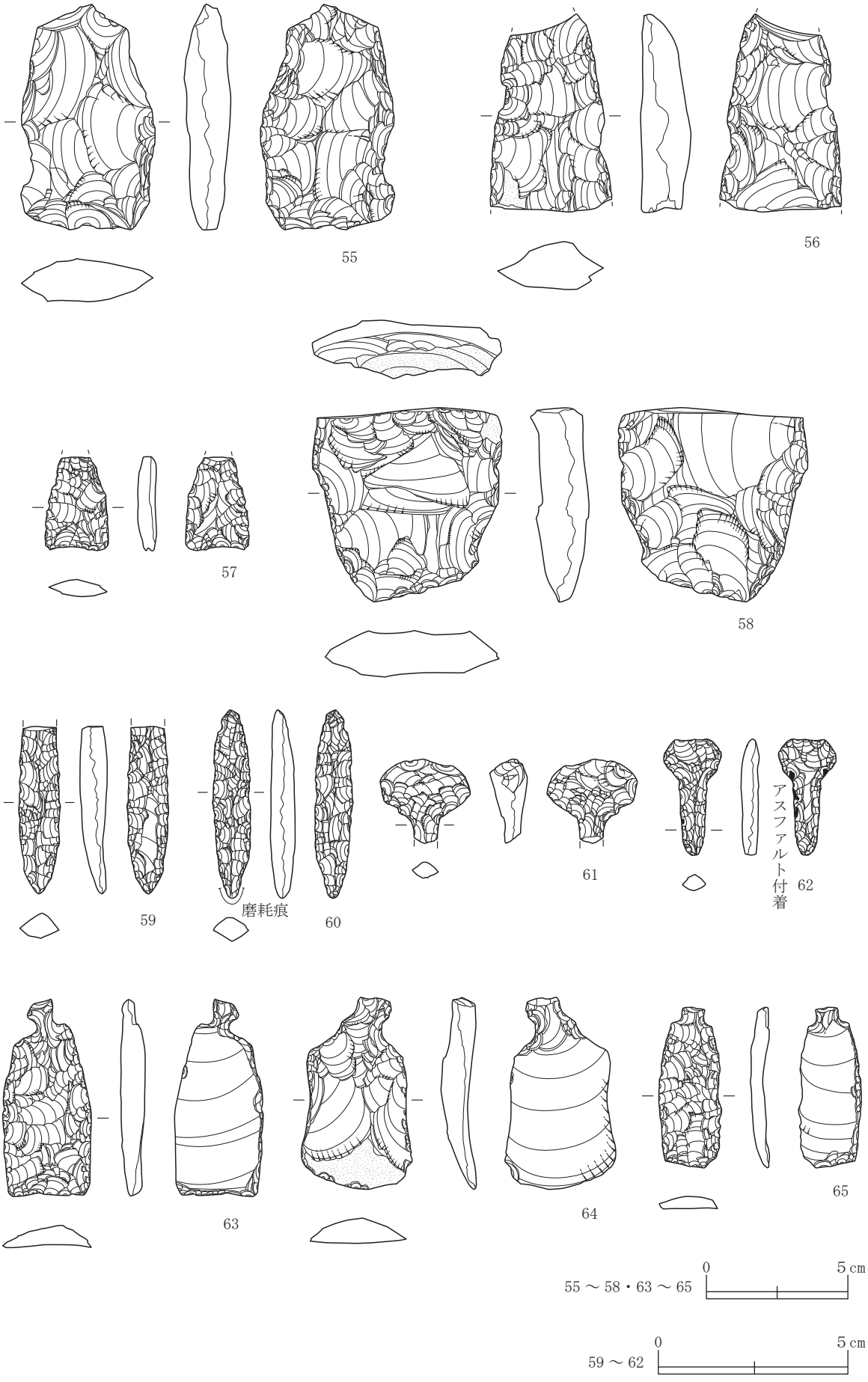
第 25 図　遺構外出土遺物　石器（２）



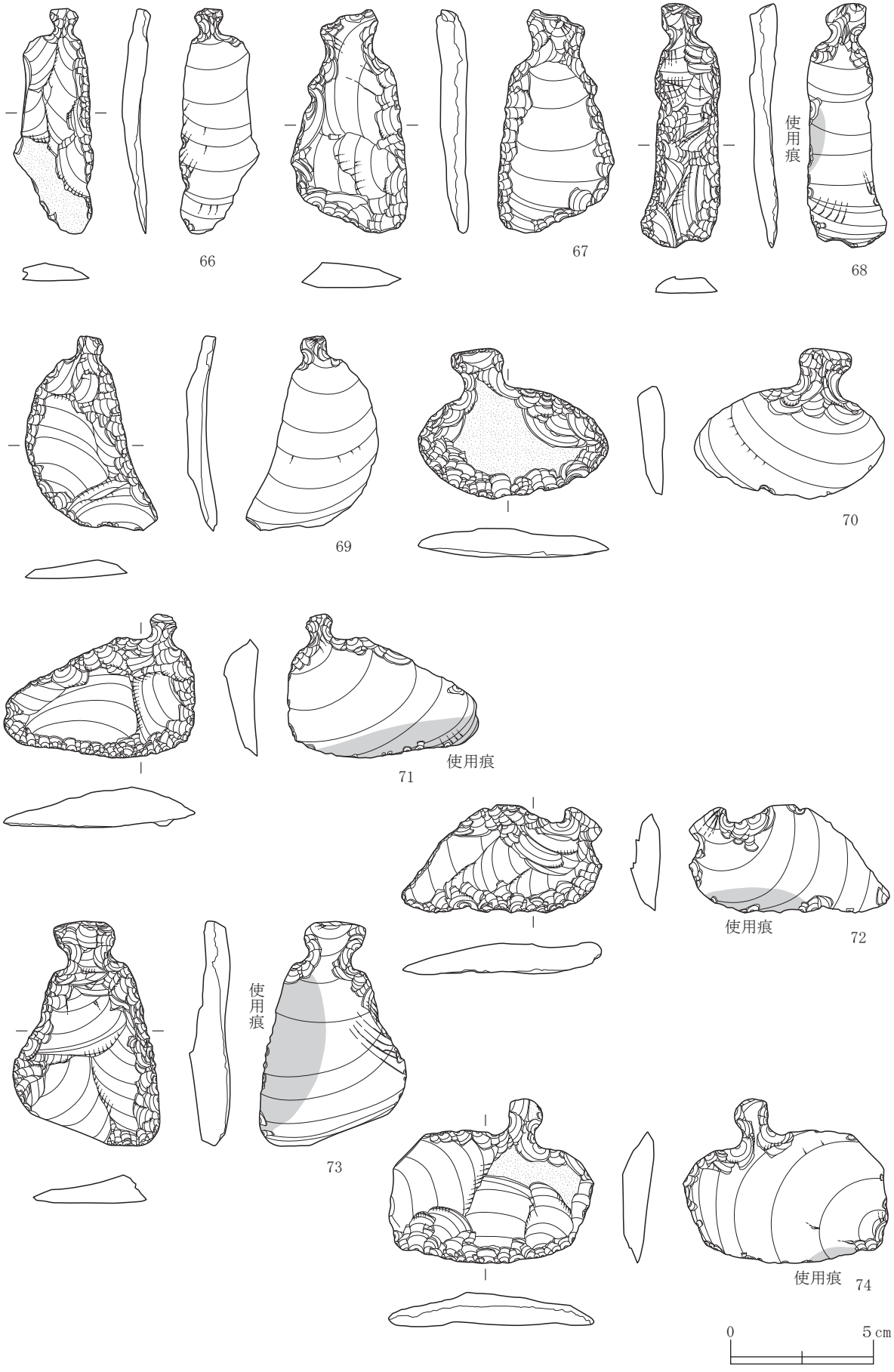
第 26 図　遺構外出土遺物　石器（３）



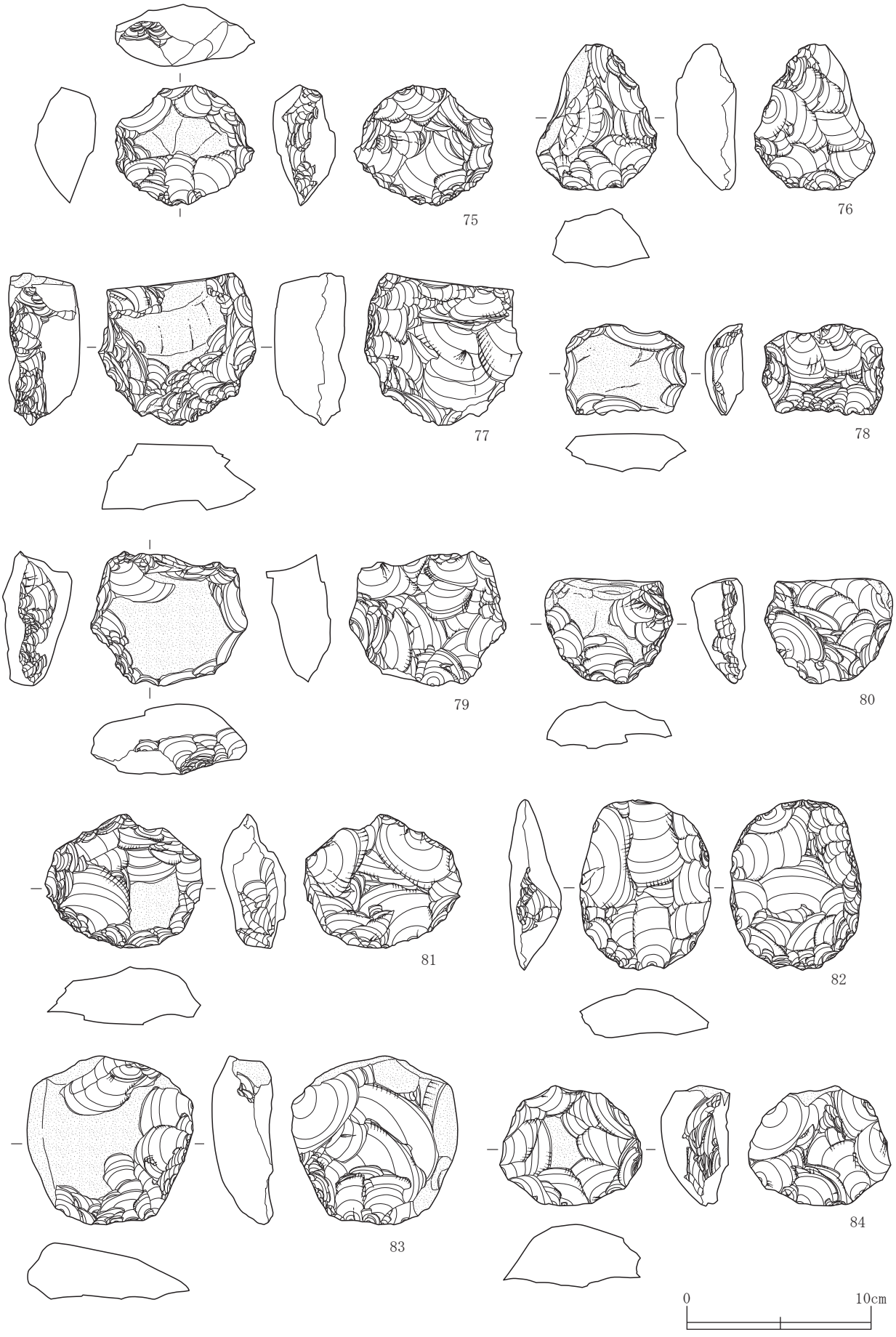
第 27 図　遺構外出土遺物　石器（４）



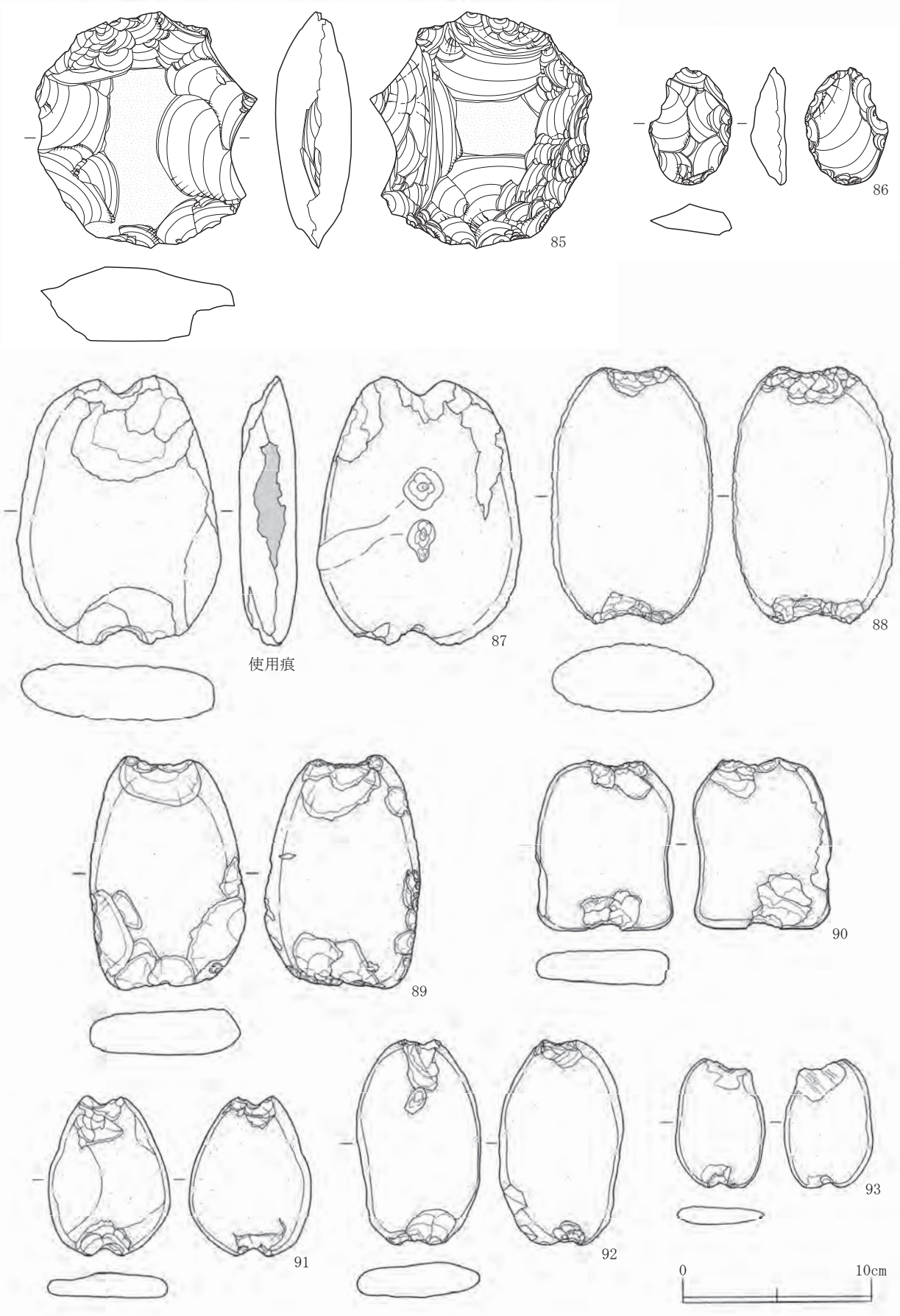
第 28 図　遺構外出土遺物　石器（５）



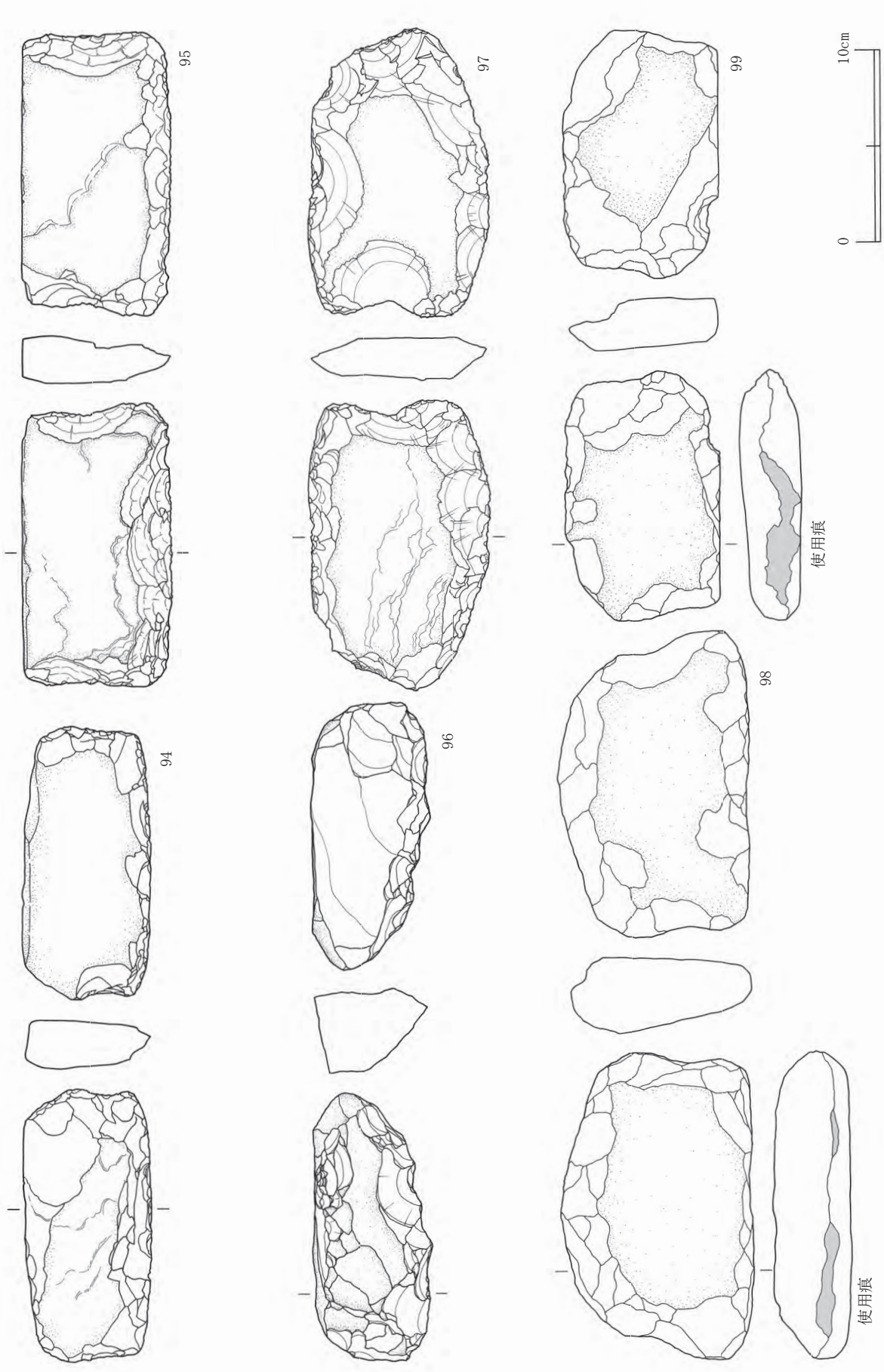
第 29 図　遺構外出土遺物　石器（６）



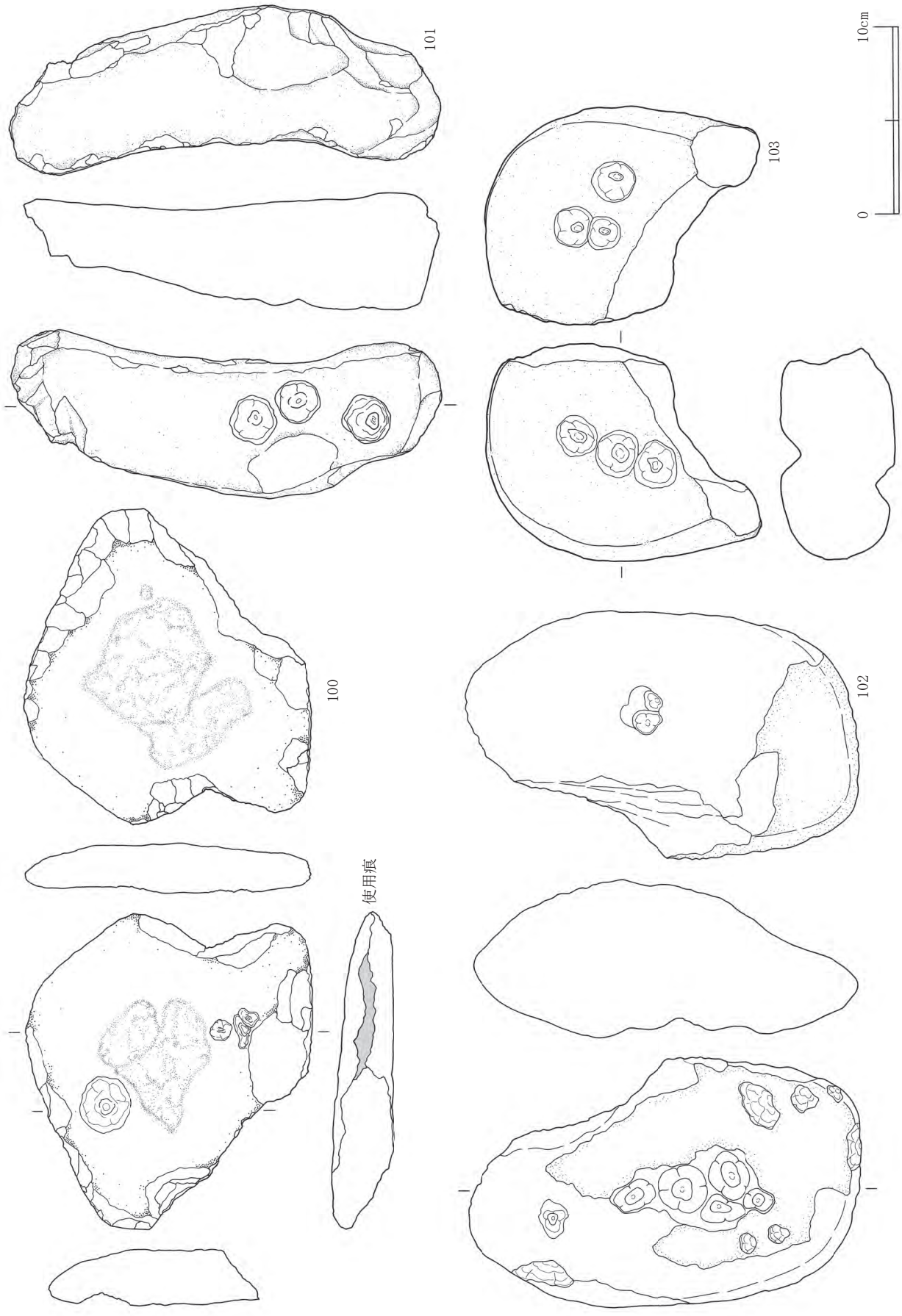
第 30 図　遺構外出土遺物　石器（７）



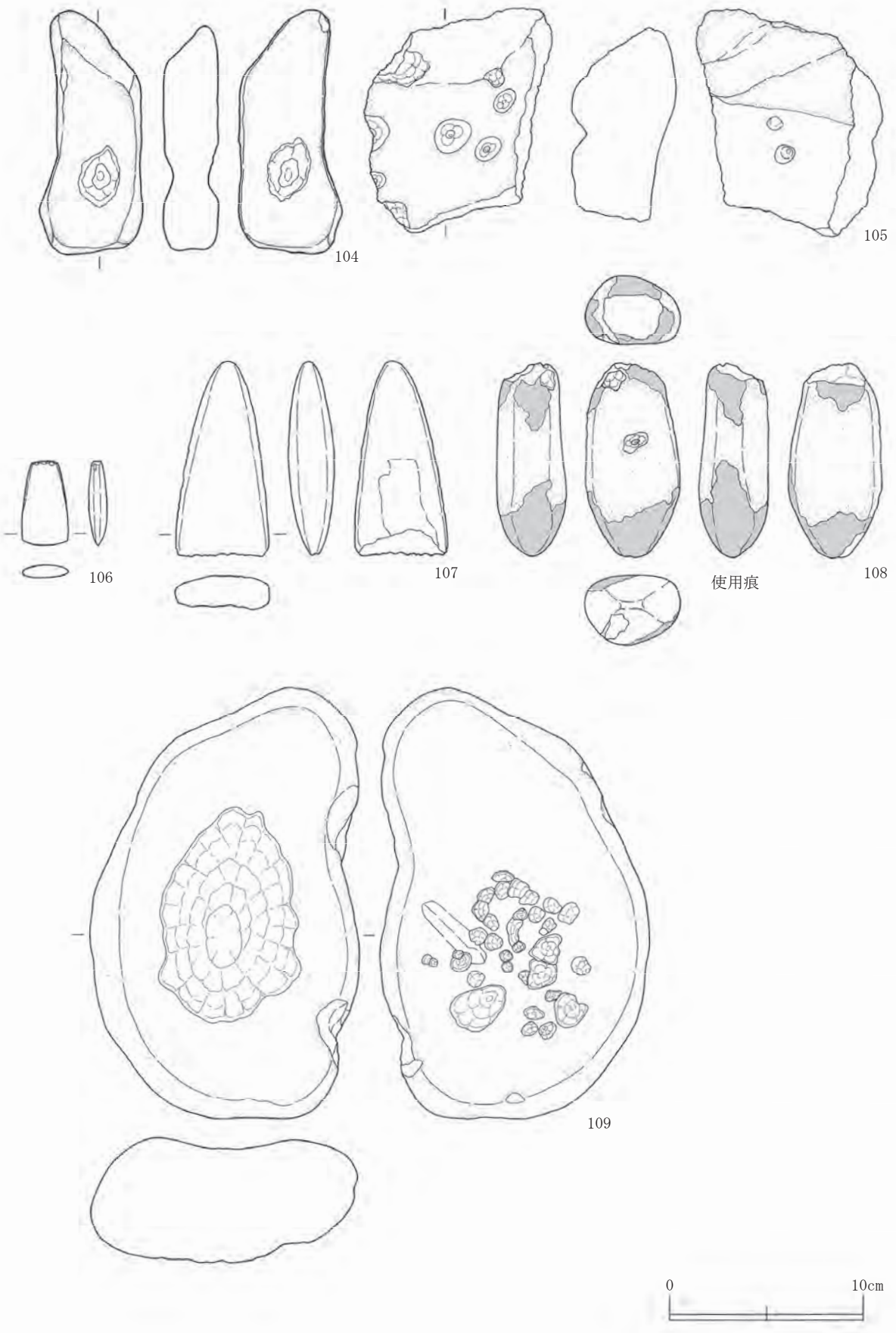
第31図　遺構外出土遺物　石器（８）



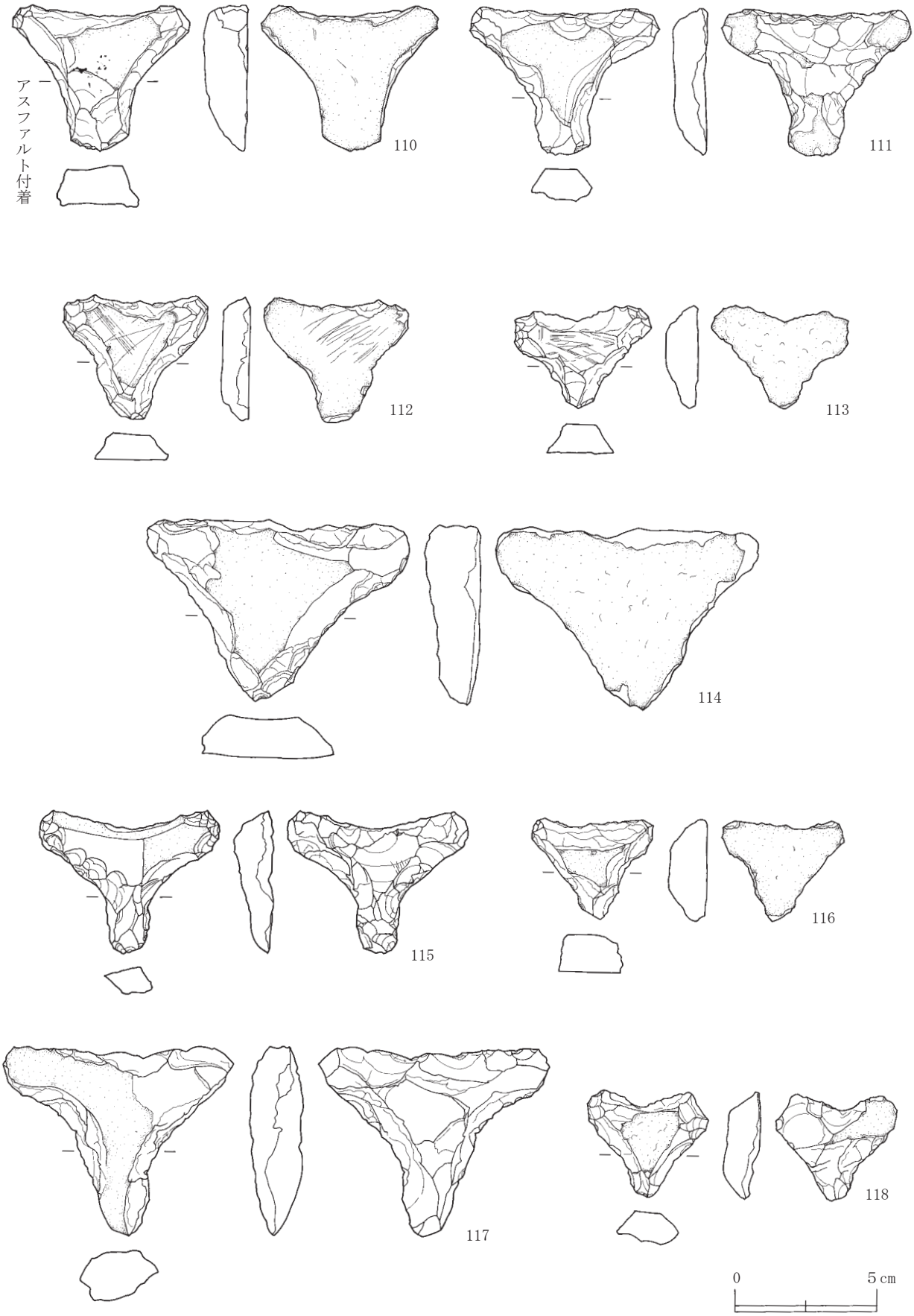
第32図　遺構外出土遺物　石器（９）



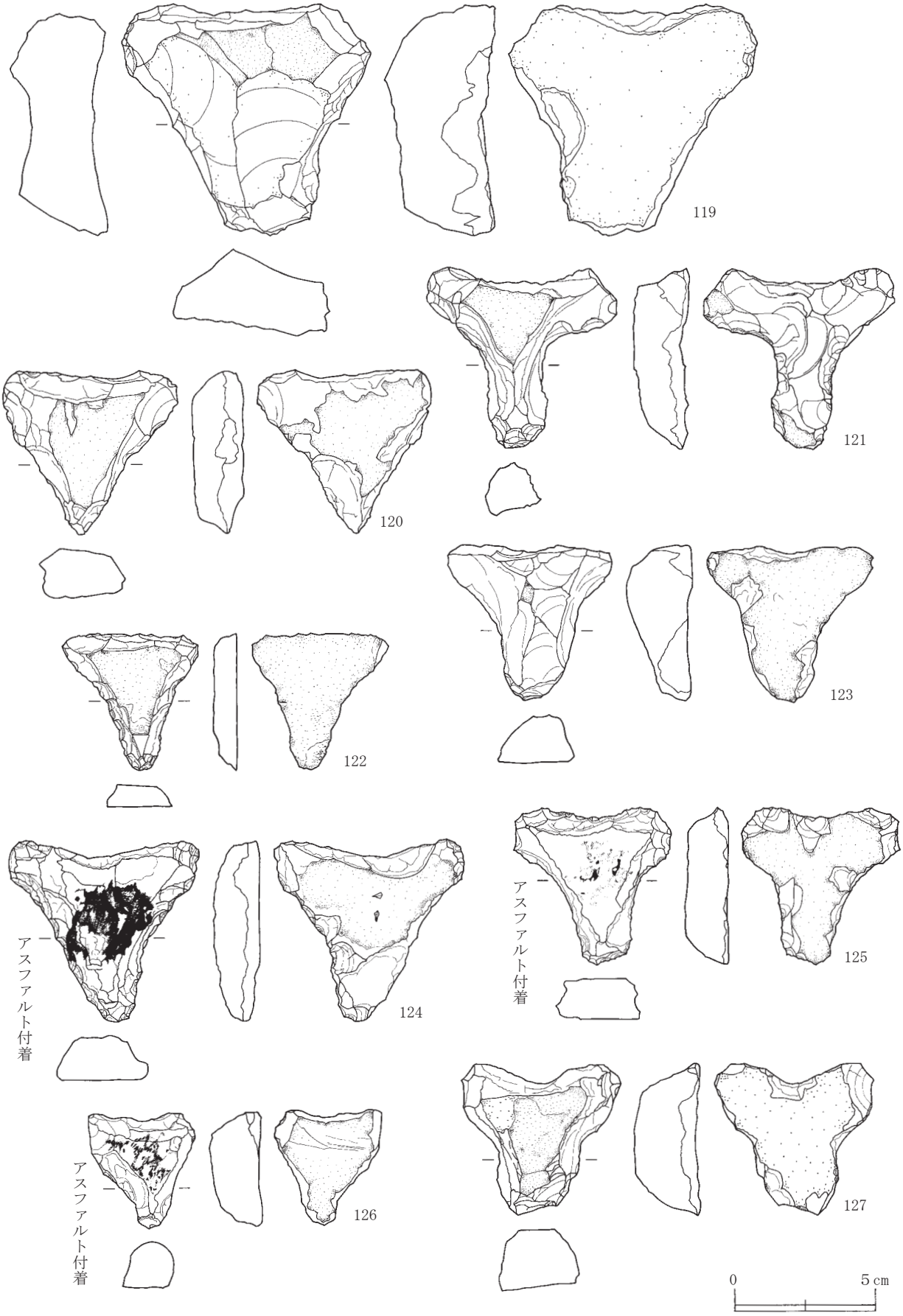
第33図　遺構外出土遺物　石器(10)



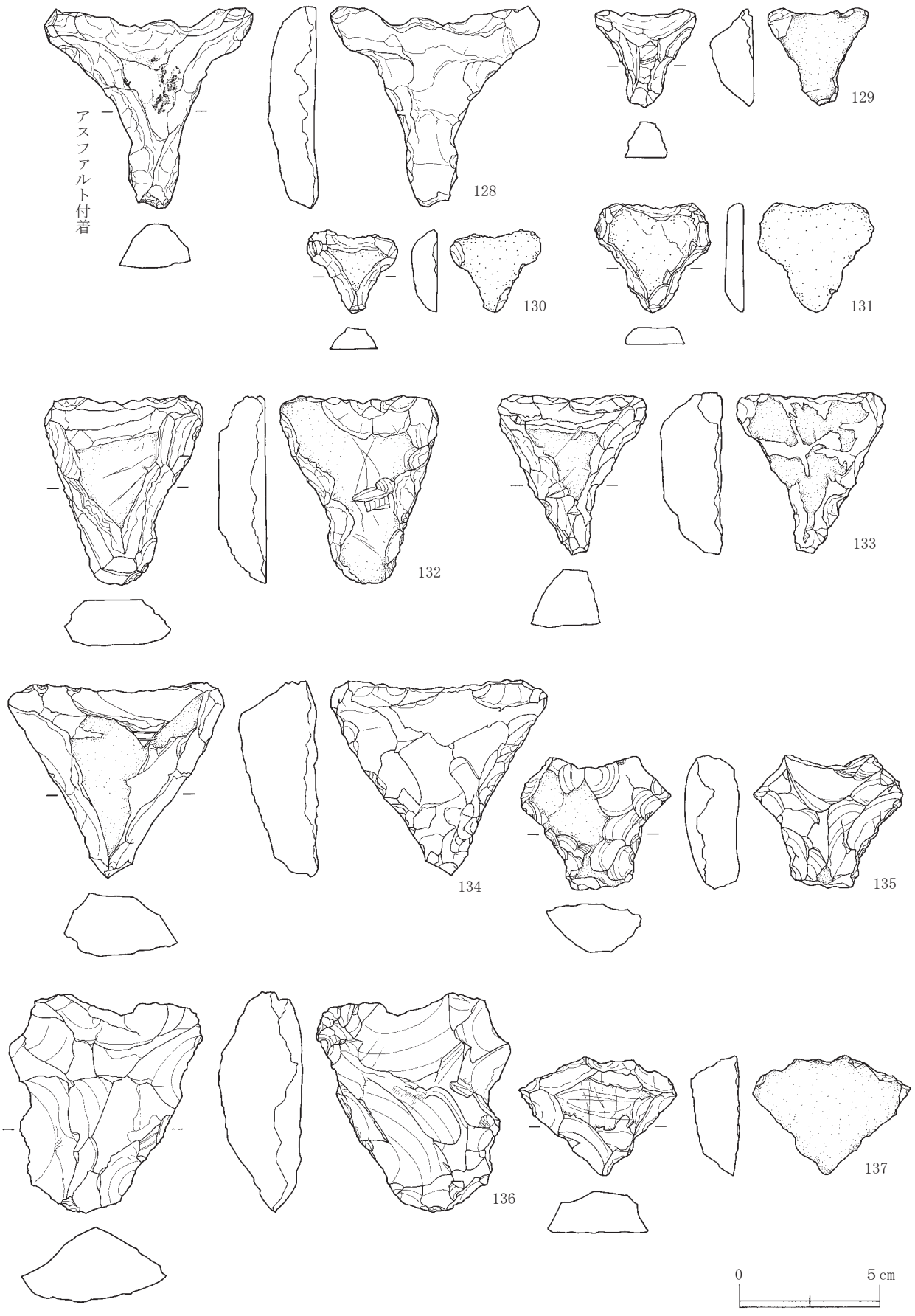
第34図　遺構外出土遺物　石器(11)



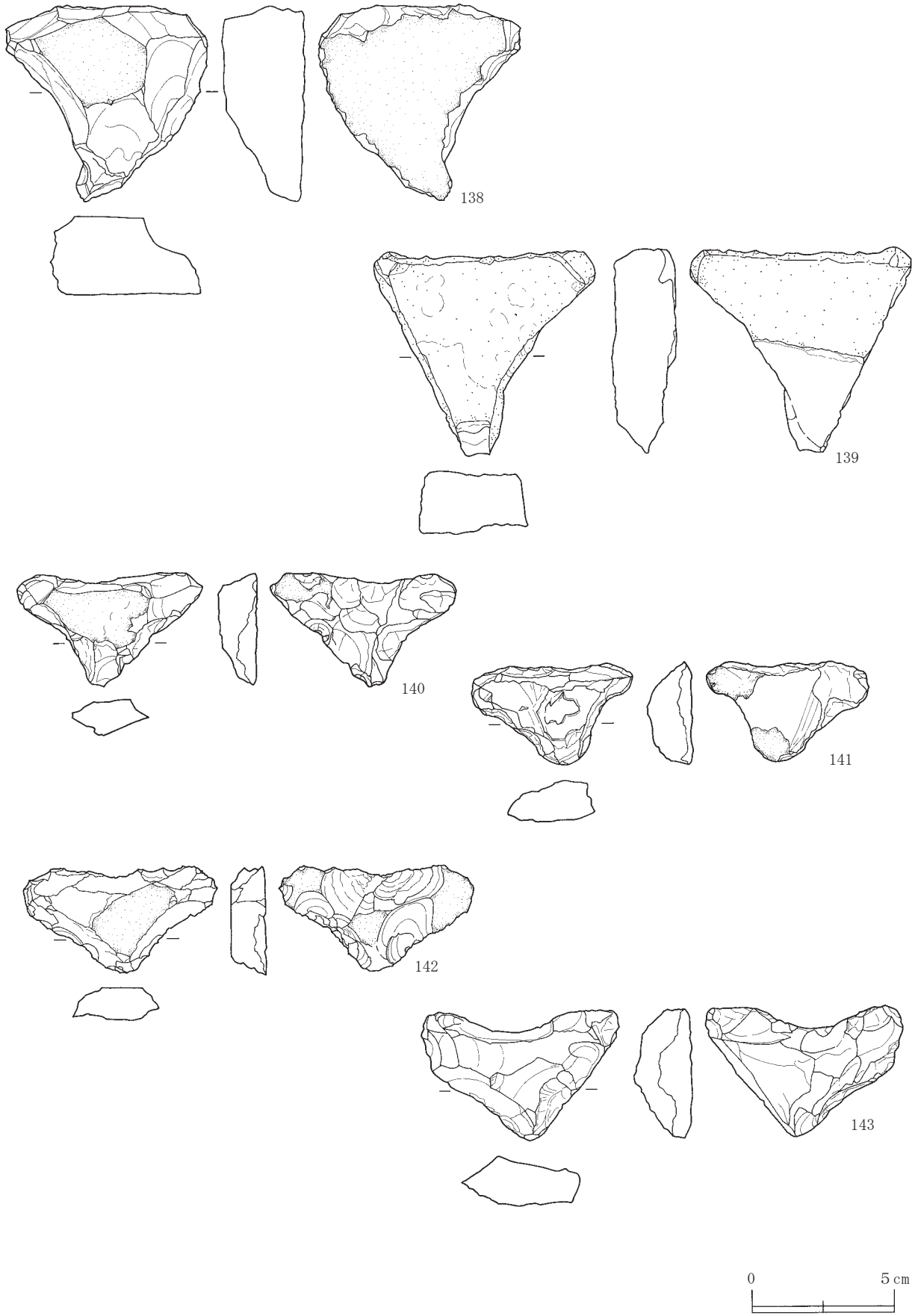
第35図　遺構外出土遺物　石器(12)



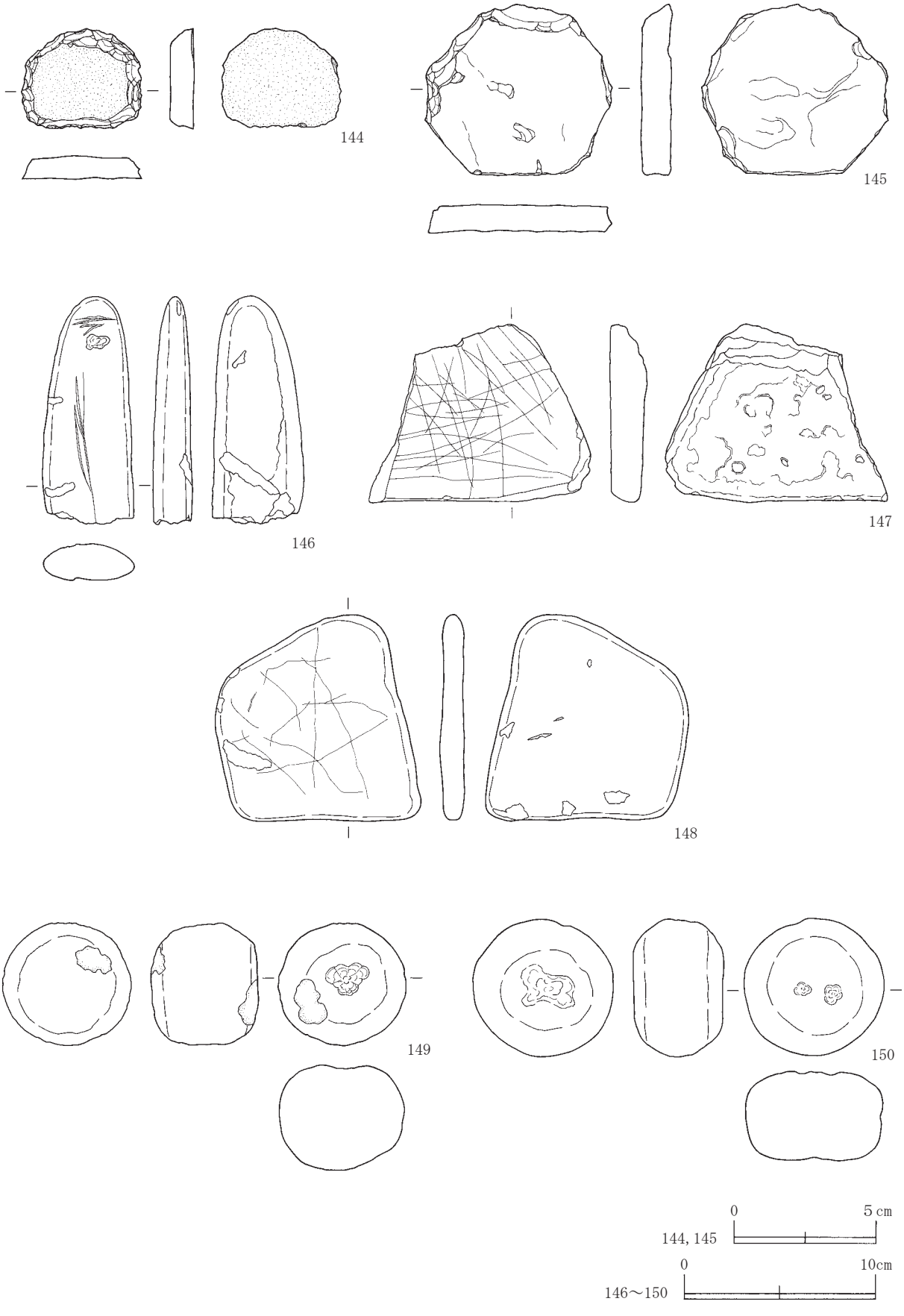
第36図　遺構外出土遺物　石器(13)



第37図　遺構外出土遺物　石器(14)



第38図　遺構外出土遺物　石器(15)



第39図　遺構外出土遺物　石器(16)

第 10 表 遺構外出土土器観察表（１）

挿図番号	図版番号	器種	部位	層位	口径×底径×器高	文様の特徴・器面調整	出土遺構	備考
20-１	11-1	深鉢	口縁部	Ⅱ層	－	胎土に繊維混入、ＲＬ斜縄文	ＭＣ51	円筒下層式
20-２	11-1	深鉢	口縁部	Ⅳ層	－	ＬＲ原体による綾繰文	ＭＤ52	
20-３	11-1	深鉢	口縁部	Ⅲ層	－	胎土に繊維混入、外反気味	ＭＦ54	円筒下層式
20-４	11-1	深鉢	胴部	Ⅱ層	－	胎土に繊維混入、多軸絡条体の回転圧痕 胴部下半は０段多条のＬＲ斜縄文 外面調整：ミガキ	ＭＧ51	20-5.6.7 と同一
20-５	11-1	深鉢	胴部					20-4.6.7 と同一
20-６	11-1	深鉢	胴部					20-4.5.7 と同一
20-７	11-1	深鉢	胴部					20-4.5.6 と同一
20-８	11-1	深鉢	胴部	Ⅱ層	－	胎土に繊維混入、ＬＲ斜縄文	ＭＣ51	
20-９	11-1	深鉢	胴部	Ⅰ層	－	胎土に繊維混入 上部：ＲＬ斜縄文 下部：細かいＬＲ斜縄文	２トレンチ	円筒下層式
20-10	－	深鉢	胴部	Ⅰ層	－	胎土に繊維混入、条痕文	２トレンチ	円筒下層式
20-11	－	深鉢	胴部	Ⅲ層	－	条痕文	７トレンチ	円筒下層式
20-12	11-1	深鉢	底部～胴部	Ⅲ層	－×(12.0)×(4.5)	条痕文	７トレンチ	円筒下層式
20-13	11-1	深鉢	胴部	－	－	ＬＲ斜縄文	1・11トレンチ	
21-14	11-1	深鉢	ほぼ完形	Ⅲ層	13.0×5.5×14.9	５単位の山形口縁頂部にボタン状貼付文の様な装飾（内側に沈線で）、口縁部文様帯は、横井の粘土紐貼り付けと沈線によって区画する。３条の斜位平行沈線が胴部中央で交錯。最大径は胴部中央部。	ＭＦ54	十腰内１式
21-15	11-1	壺	胴部	Ⅱ層	－×－×(5.1)	胴部上半の上下に横位沈線が走り、間に曲線状に３単位で同じ文様が繰り返し施されている	ＭＤ52	内面に粘土紐巻き上げ痕 十腰内１式
21-16	12-1	深鉢	口縁部	Ⅲ層	－	平行沈線文	ＭＤ54	
21-17	12-1	深鉢	口縁部	－	－	平行沈線、間に弧線	６トレンチ	21-18 と同一 十腰内１式
21-18	12-1	深鉢	口縁部	－	－	口縁部：外反・ゆがみ、３条の平行沈線	６トレンチ	21-17 と同一 十腰内１式
21-19	12-1	深鉢	胴部	Ⅱ層	－	口縁部：外反、平行沈線の下に３条の斜位平行沈線が交錯	ＭＥ54	十腰内１式
21-20	12-1	深鉢	口縁部	－	－	口唇部：平坦、２条の横位平行沈線が口縁部に２列・胴部曲線状	１トレンチ	十腰内１式
21-21	12-1	深鉢？ 壺？	口縁部	Ⅲ層	－	口縁部：外反、平行沈線	ＭＤ53	十腰内１式
21-22	12-1	壺？	胴部	北側	－	平行沈線	４トレンチ	十腰内１式
21-23	12-1	？	胴部	Ⅱ層	－	平行沈線	ＭＥ51	十腰内１式
21-24	12-1	壺	肩部	Ⅱ層	－	平行沈線	ＭＣ52	十腰内１式
21-25	12-1	壺	頸部	Ⅱ層	－	平行沈線	ＭＦ54	十腰内１式
21-26	12-1	壺	頸部	－	－	曲線状の平行沈線 外面調整：ミガキ	１トレンチ	十腰内１式
21-27	12-1	？		Ⅰ層	－	平行沈線文	２トレンチ	十腰内１式
21-28	12-1	深鉢	胴部	Ⅲ層	－	３条の平行沈線	ＭＤ52	十腰内１式
21-29	12-1	壺	胴部	Ⅱ層	－	沈線	ＭＤ52	十腰内１式
21-30	12-1	？	頸部	Ⅱ層	－	太い沈線文	ＭＤ52	十腰内１式
21-31	12-1	深鉢？		－	－	２条と３条の曲線状平行沈線	５トレンチ	十腰内１式
21-32	12-1	壺？ 深鉢？	肩部	Ⅱ層	－	隆帯貼り付け→曲線状沈線	ＭＤ53	十腰内１式
21-33	12-1	壺	頸部	Ⅱ層	－	曲線状の沈線	５トレンチ	十腰内１式
22-34	13-1	壺？	胴部	－	－	胴部上半に曲線状の沈線 内面調整：ミガキ	ＭＢ50 ＭＣ51	十腰内１式
22-35	13-1	壺？ 深鉢？	胴部	Ⅱ層	－	曲線状の隆帯文→曲線状の沈線	ＭＦ54	十腰内１式
22-36	13-1	深鉢？	胴部	－	－	幾何学状の沈線	２トレンチ	十腰内１式
22-37	13-1	深鉢？	口縁部	Ⅱ層	－	口縁部：外反 粘土紐貼り付け→刺突。沈線。	ＭＥ54	十腰内１式

第 11 表 遺構外出土土器観察表（２）

挿図番号	図版番号	器種	部位	層位	口径×底径×器高	文様の特徴・器面調整	出土遺構	備考
22-38	13-1	？	頸部	Ⅱ層	－	粘土紐貼り付け→刺突文 縦斜沈線	ＭＥ54	十腰内１式
22-39	13-1	壺	口縁部	Ⅱ層	－	曲線状の平行沈線 波状口縁頂部に突起貼り付	５トレンチ	22-40 と同一
22-40	13-1	壺	肩部	Ⅱ層	－	曲線状の沈線	５トレンチ	22-39 と同一
22-41	13-1	壺		－	－	粘土紐貼り付け→縁を沈線 外面調整：ナデ	６トレンチ	
22-42	13-1	壺	肩部	Ⅰ層	－	口縁部：外反 粘土紐貼り付け→沈線 頸部：くびれ	２トレンチ	
22-43	13-1	深鉢	口縁部	Ⅱ層	－	口縁部：外反、波状口縁：口縁部に沈線→口縁頂部から垂下する３条の沈線と、その両側に斜位の沈線。 ＬＲ斜縄文→沈線	ＭＣ52	
22-44	13-1	？	口縁部	Ⅱ層	－	ＲＬ斜縄文→沈線	２トレンチ	22-45.46 と同一
22-45	13-1	？	口縁部	Ⅱ層	－	ＲＬ斜縄文→沈線	２トレンチ	22-44.46 と同一
22-46	13-1	？	口縁部	Ⅱ層	－	縄文→沈線	２トレンチ	22-44.45 と同一
22-47	13-1	深鉢	胴部	Ⅱ層	－	ＲＬ斜縄文→沈線	ＭＥ54	十腰内１式
22-48	13-1	深鉢？	胴部	Ⅱ層	－	口縁部：外反、 ＲＬ充填斜縄文→沈線	ＭＥ54	22-49 と同一
22-49	13-1	深鉢	口縁部	－	－	ＲＬ充填斜縄文→沈線	５トレンチ	22-48 と同一
22-50	13-1	深鉢？	胴部	Ⅱ層	－	口縁部：平坦、縄文→沈線 一部：ミガキ	２トレンチ	
22-51	13-1	深鉢	口縁部	Ⅲ層	－	上部：外傾 部分的にＬＲ斜縄文→横走平行沈線。	ＭＣ52	口縁部付近
22-52	13-1	深鉢？	胴部	Ⅱ層	－	撚糸文→沈線	ＭＥ54	十腰内１式
22-53	13-1	深鉢	胴部	Ⅱ層	－	ＬＲ斜縄文→沈線	ＭＥ54	
23-54	14-1	深鉢	胴部	－	－	口唇部：平坦、口縁部：外反、 撚糸文	ＭＥ54	
23-55	14-1	深鉢	口縁部	Ⅱ層	－	口縁部：外反、口唇部：平坦、 ０段多条のＲＬ斜縄文。 使用痕有り	ＭＥ54	
23-56	14-1	深鉢	口唇部	Ⅱ層	－	頸部：外反 ０段多条のＲＬ斜縄文。	６トレンチ	
23-57	14-1	壺	頸部	Ⅲ層	－	頸部：くびれ	ＭＥ54	粘土紐巻き上げ痕
23-58	14-1	壺？ 深鉢？	頸部	Ⅱ層	－×6.1×(4.3)	波状平行沈線、 内面調整：ミガキ	ＭＥ51	十腰内１式
23-59	14-1	？	底部	Ⅱ層	－×8.0×(2.5)	底部：籠目状圧痕	ＭＥ54	
23-60	14-1	？	底部	Ⅲ層	－×5.7×(2.0)	外面底部：多軸絡条体による回転圧痕	ＭＦ54	
23-61	14-1	深鉢	底部	Ⅲ層	－×5.8×(4.4)	底部：笹葉状圧痕、外面調整：丁寧なミガキ	ＭＦ54	
23-62	－	深鉢	底部	Ⅲ層	－×7.9×(3.5)	底部から外反気味に立ち上がる	ＭＦ54	
23-63	14-1	台付土器	底部	－	－	横走平行沈線、連続刺突文	６トレンチ	
23-64	14-1	深鉢	底部	－	－	環状把手→環状周囲を沈線	１トレンチ	装飾把手 十腰内２式
23-65	14-1	甕	把手	撹乱	－	ハケメ調整→直前段多条のＬＲ斜縄文 頸部付近は施文の後にハケメ 内面調整：ミガキ	ＭＧ50	弥生土器
23-66	14-1	鐸形土製品	胴部	Ⅱ層	(3.6)×－×4.5	沈線	ＭＤ52	

第 12 表　遺構外出土石器計測表（1）

トレンチは確認調査時、（　）内の数値は残存値

挿図番号	図版番号	種別	出土位置	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	備考
24-1	15-1	石鏃	４トレンチ北側	34.4	18.7	5.8	3.0	基部折損
24-2	15-1	石鏃	２トレンチⅠ層	(27.5)	14.9	4.8	1.8	先端・基部折損
24-3	15-1	石鏃	ＭＦ50Ⅲ層	(38.1)	21.3	5.7	2.8	先端・基部折損
24-4	15-1	石鏃	７トレンチ	33.5	20.0	4.9	2.0	
24-5	15-1	石鏃	７トレンチ拡張部	33.7	12.8	4.4	1.7	
24-6	15-1	石鏃	４トレンチ北側	47.8	21.2	5.5	4.9	
24-7	15-1	石鏃	ＬＰ52Ⅲ層	39.5	17.8	6.7	4.2	基部欠損
24-8	15-1	石鏃	ＬＳ52Ⅳ層	43.8	22.3	6.5	4.7	
24-9	15-1	石鏃	ＬＳ53Ⅲ層	28.6	16.5	6.2	2.3	
24-10	15-1	石鏃	ＭＣ54Ⅰ層	26.6	18.6	4.1	1.5	
24-11	15-1	石鏃	ＬＱ51Ⅰ層	29.1	17.4	7.4	3.2	
24-12	15-1	石鏃	ＬＲ51 撹乱	31.7	21.0	8.9	5.4	
24-13	15-1	石鏃	表採	23.9	8.9	3.5	0.6	
24-14	15-1	石鏃	ＬＴ51Ⅲ層	22.6	10.7	4.4	0.6	
24-15	15-1	石鏃	ＭＤ51Ⅰ層	22.3	12.5	4.4	0.8	
24-16	15-1	石鏃	４トレンチ北側	26.2	11.5	3.2	0.7	
24-17	15-1	石鏃	５トレンチ中央Ⅲ層	45.7	16.7	8.3	5.1	
24-18	15-1	石鏃	２トレンチ	26.9	11.8	3.1	0.6	
24-19	15-1	石鏃	ＭＥ53 撹乱	31.8	11.0	5.1	1.3	
24-20	15-1	石鏃	ＭＥ52 撹乱	31.6	14.1	5.3	1.4	
24-21	15-1	石鏃	ＭＥ52Ⅰ層	21.3	12.9	2.6	0.4	
24-22	15-1	石鏃	９トレンチⅠ層	25.5	16.0	3.1	0.7	
24-23	15-1	石鏃	ＬＱ51Ⅲ層	26.6	14.9	3.0	0.6	
24-24	15-1	石鏃	６トレンチⅠ層	24.9	10.2	3.0	0.6	
24-25	15-1	石鏃	７トレンチ	26.9	10.7	3.8	0.8	
24-26	15-1	石鏃	６トレンチ南側Ⅱ層	28.9	12.2	4.9	1.4	
24-27	15-1	石鏃	１・11トレンチ交差部地山上部	(29.0)	14.4	3.0	0.8	先端欠損
24-28	15-1	石鏃	ＬＴ52Ⅳ層	32.6	16.5	6.0	2.4	基部欠損
24-29	15-1	石鏃	ＭＤ51Ⅱ層	33.5	16.2	7.3	3.3	
24-30	15-1	石鏃	ＭＥ54Ⅱ層	48.1	11.3	8.3	3.8	
25-31	16-1	石槍	ＭＢ52Ⅱ層	88.3	29.6	16.5	39.1	
25-32	16-1	石槍	表採	97.9	29.4	11.5	28.0	
25-33	16-1	石槍	ＭＥ50Ⅱ層	(75.3)	25.1	14.8	23.3	基部欠損
25-34	16-1	石槍	ＭＤ52Ⅲ層	99.1	43.0	16.7	60.7	
25-35	16-1	石槍	ＭＧ54Ⅱ層	83.5	36.9	17.9	54.5	
25-36	16-1	石槍	ＭＤ52Ⅱ層	88.8	43.7	22.9	72.1	
25-37	16-1	石槍	ＭＣ52Ⅳ層	(79.6)	36.4	15.2	38.8	基部折損
25-38	16-1	石槍	ＭＦ54Ⅲ層	101.9	44.8	23.1	92.8	
25-39	16-1	石槍	ＭＦ54Ⅲ層	107.6	42.3	25.6	98.6	
26-40	16-1	石槍	ＭＦ54Ⅲ層	106.2	48.2	23.2	81.5	
26-41	16-1	石槍	ＭＡ50Ⅱ層	84.3	45.0	19.1	65.4	
26-42	16-1	石槍	ＭＥ54Ⅲ層	107.4	53.8	32.3	158.3	
26-43	16-1	石槍	ＭＡ50Ⅱ層	(68.9)	41.9	19.9	46.2	基部折損
26-44	16-1	石槍	ＭＥ54Ⅲ層	(71.0)	47.3	16.0	47.2	
26-45	16-1	石槍	１トレンチ西側	(99.7)	65.6	20.8	95.7	基部欠損
26-46	16-1	石槍	ＭＢ52Ⅰ層	71.0	37.7	15.5	35.8	
26-47	16-1	石槍	ＭＧ52Ⅲ層	(70.7)	62.8	19.2	77.4	基部折損
27-48	17-1	石篦	ＭＤ52Ⅲ層	79.8	47.2	16.7	56.5	
27-49	17-1	石篦	ＭＦ54Ⅱ層	96.2	42.3	18.9	78.2	
27-50	17-1	石篦	ＭＤ50Ⅱ層	93.3	49.3	16.3	72.8	

第 13 表　遺構外出土石器計測表（２）

トレンチは確認調査時、（　）内の数値は残存値

挿図番号	図版番号	種別	出土位置	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	備考
27-51	17-1	石篦	MD52Ⅱ層	88.8	35.9	23.2	57.6	
27-52	17-1	石篦	MB53Ⅲ層	97.2	38.8	17.3	67.9	
27-53	17-1	石篦	MB52Ⅲ層	(99.9)	60.0	23.2	138.9	頭部折損
27-54	17-1	石篦	MF54Ⅱ層	(73.5)	53.8	16.2	61.0	頭部折損
28-55	17-1	石篦	ME54Ⅱ層	80.0	47.8	17.0	64.9	
28-56	17-1	石篦	ME54Ⅲ層	(70.3)	43.1	18.0	59.7	頭部・刃部折損
28-57	17-1	石篦	MD54	(33.4)	22.6	6.9	5.1	頭部折損
28-58	17-1	石篦	MD53Ⅱ層	68.9	67.3	21.0	96.7	
28-59	17-1	石錐	表採	(44.3)	11.2	7.3	3.8	基部折損
28-60	17-1	石錐	２・７トレンチ交差部Ⅲ層	49.8	10.2	6.7	3.6	先端摩滅
28-61	17-1	石錐	LT53Ⅰ層	(22.3)	23.9	10.0	4.1	先端折損
28-62	17-1	石錐	８・２トレンチ交差部	30.7	15.5	4.9	1.7	アスファルト
28-63	17-1	石匙	MD53Ⅲ層	69.8	31.5	9.1	18.0	
28-64	17-1	石匙	１トレンチ西側	67.9	39.3	12.6	24.0	
28-65	17-1	石匙	２トレンチ西側Ⅱ層	56.9	22.4	7.0	7.6	
29-66	17-1	石匙	５トレンチ	79.1	28.2	10.0	11.2	
29-67	17-1	石匙	７トレンチ	78.4	40.9	11.5	28.9	
29-68	17-1	石匙	８トレンチ南Ⅲ層	85.6	28.0	10.2	17.0	使用痕光沢
29-69	17-1	石匙	ME50Ⅰ層	68.4	46.6	10.7	16.6	
29-70	17-1	石匙	MF54Ⅲ層	53.0	66.9	10.3	29.2	
29-71	17-1	石匙	４トレンチ	50.7	67.2	14.4	26.2	使用痕光沢
29-72	17-1	石匙	LT52Ⅱ層	38.0	70.1	11.6	26.4	使用痕光沢
29-73	17-1	石匙	６トレンチ北側	79.0	51.8	14.4	45.1	使用痕光沢
29-74	17-1	石匙	MD52Ⅱ層	57.8	72.1	12.2	37.8	使用痕光沢
30-75	18-1	掻器	４トレンチ北側	67.0	76.9	34.6	151.9	
30-76	18-1	掻器	MA53Ⅲ層	81.1	66.8	33.5	156.0	
30-77	18-1	掻器	MF54Ⅱ層	84.3	87.2	39.5	326.8	
30-78	18-1	掻器	MD52Ⅱ層	50.5	67.6	21.2	85.0	
30-79	18-1	掻器	MA51Ⅱ層	74.5	86.7	38.8	252.0	
30-80	18-1	掻器	ME52Ⅰ層	58.3	71.1	30.2	128.5	
30-81	18-1	掻器	MF54Ⅲ層	74.2	87.2	35.6	185.4	
30-82	18-1	掻器	５トレンチ北側地山上部	94.2	72.6	29.0	189.9	
30-83	18-1	掻器	MC53Ⅱ層	93.3	92.2	33.8	296.5	
30-84	18-1	掻器	MC52Ⅲ層	66.6	78.7	38.3	199.5	
31-85	18-1	掻器	MA51Ⅱ層	128.9	120.9	41.4	622.2	
31-86	18-1	掻器	MF50Ⅰ層	64.3	45.3	19.6	48.7	
31-87	18-1	石錘	排土	144.0	109.0	31.5	481.6	磨面
31-88	18-1	石錘	４トレンチ北側	136.0	86.0	37.0	650.8	
31-89	18-1	石錘	MC50Ⅱ層	125.0	83.0	25.0	348.4	
31-90	18-1	石錘	MD54Ⅲ層	92.0	74.0	19.0	133.2	磨面
31-91	18-1	石錘	７トレンチ	86.0	65.0	12.5	81.6	
31-92	18-1	石錘	MF50Ⅲ層	109.0	66.0	19.0	144.3	
31-93	18-1	石錘	MD52Ⅲ層	69.0	48.0	10.0	34.1	
32-94	19-1	半円状扁平打製石器	MC52Ⅱ層	66.0	143.0	26.0	278.5	
32-95	19-1	半円状扁平打製石器	MG53Ⅰ層	770.5	148.5	26.0	390.0	
32-96	19-1	半円状扁平打製石器	MF54Ⅱ層	62.0	140.0	46.0	440.1	
32-97	19-1	半円状扁平打製石器	ME52Ⅲ層	94.0	151.5	22.5	435.6	
32-98	19-1	半円状扁平打製石器	表採	101.0	161.0	41.0	895.8	磨痕
32-99	19-1	半円状扁平打製石器	ME54Ⅲ層	81.0	130.5	28.0	435.7	磨痕
33-100	19-1	凹石	MF54Ⅲ層	154.0	169.0	33.0	470.4	

第 14 表　遺構外出土石器計測表（3）

トレンチは確認調査時、（　）内の数値は残存値

挿図番号	図版番号	種別	出土位置	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	備考
33-101	19-1	凹石	ＭＦ54Ⅲ層	229.0	229.0	65.0	1198.0	
33-102	19-1	凹石	ＭＣ52Ⅱ層	210.5	210.5	86.5	2120.0	
33-103	19-1	凹石	ＭＥ54Ⅲ層	147.0	147.0	80.0	1058.6	
34-104	20-1	凹石	ＭＦ54Ⅲ層	127.0	127.0	29.0	208.7	
34-105	20-1	凹石	ＭＤ54Ⅱ層	118.0	118.0	59.5	672.2	
34-106	20-1	磨製石斧	２・７トレンチ交差部	44.0	44.0	10.0	16.5	
34-107	20-1	磨製石斧	ＭＧ55Ⅲ層	101.5	101.5	24.5	162.2	
34-108	20-1	磨石	ＭＡ53Ⅱ層	101.0	101.0	37.5	230.0	
34-109	20-1	石皿	表採	226.0	226.0	65.5	2450.0	
35-110	20-1	三脚石器	ＬＴ50Ⅱ層	52.0	52.0	15.5	37.1	アスファルト
35-111	20-1	三脚石器	ＭＥ54Ⅲ層	52.0	52.0	12.0	24.2	自然面に線刻
35-112	20-1	三脚石器	ＭＤ53Ⅰ層	44.0	44.0	10.0	18.4	自然面に線刻
35-113	20-1	三脚石器	６トレンチ北側	36.5	36.5	11.5	12.3	自然面に線刻
35-114	20-1	三脚石器	２・６トレンチ交差部Ⅲ層	64.5	64.5	20.5	74.0	
35-115	20-1	三脚石器	ＭＥ52Ⅱ層	50.5	50.5	14.0	24.2	
35-116	20-1	三脚石器	ＭＤ52Ⅱ層	36.0	36.0	13.9	14.6	
35-117	20-1	三脚石器	ＭＥ52Ⅱ層	67.0	67.0	19.5	45.4	
35-118	20-1	三脚石器	ＭＣ51	38.0	38.0	12.8	12.7	
36-119	20-1	三脚石器	ＭＢ50Ⅳ層	83.0	83.0	39.5	225.6	
36-120	20-1	三脚石器	ＭＣ52Ⅱ層	58.5	58.5	18.5	43.0	
36-121	20-1	三脚石器	６トレンチⅡ層	65.0	65.0	20.0	41.4	
36-122	20-1	三脚石器	ＭＣ52Ⅱ層	49.0	49.0	8.5	14.6	
36-123	20-1	三脚石器	６トレンチ北地山上部	56.0	56.0	23.5	41.2	
36-124	20-1	三脚石器	２トレンチⅠ層	65.0	65.0	17.0	35.0	アスファルト
36-125	21-1	三脚石器	ＬＰ51Ⅲ層	56.0	56.0	15.5	35.0	アスファルト
36-126	21-1	三脚石器	６トレンチⅢ層	41.0	41.0	18.5	18.7	アスファルト
36-127	21-1	三脚石器	ＬＴ53Ⅰ層	54.0	54.0	23.5	57.4	
37-128	21-1	三脚石器	２トレンチⅠ層	72.0	72.0	17.5	44.7	アスファルト
37-129	21-1	三脚石器	６トレンチ北側	35.0	35.0	15.0	8.8	
37-130	21-1	三脚石器	６トレンチ北側	30.0	30.0	9.0	6.0	
37-131	21-1	三脚石器	８トレンチⅠ層	39.0	39.0	6.5	10.0	
37-132	21-1	三脚石器	ＭＢ49Ⅰ層	67.5	67.5	17.0	47.6	
37-133	21-1	三脚石器	ＬＳ52	58.0	58.0	22.0	47.2	自然面に線刻
37-134	21-1	三脚石器	ＭＥ52Ⅰ層	70.0	70.0	28.0	94.8	
37-135	21-1	三脚石器	ＭＦ54Ⅱ層	48.0	48.0	19.5	43.6	
37-136	21-1	三脚石器	ＭＦ54Ⅲ層	79.0	79.0	30.0	132.3	
37-137	21-1	三脚石器	ＭＥ54	43.0	43.0	17.0	26.3	自然面に線刻
38-138	21-1	三脚石器	ＭＥ53Ⅲ層	69.5	69.5	29.0	107.9	
38-139	21-1	三脚石器	ＭＢ50Ⅱ層	72.5	72.5	22.8	95.0	
38-140	21-1	三脚石器	６トレンチ北側	60.0	60.0	14.0	20.2	
38-141	21-1	三脚石器	ＭＥ54	36.0	36.0	15.5	17.0	
38-142	21-1	三脚石器	６トレンチⅠ層	37.0	37.0	12.0	27.1	
38-143	21-1	三脚石器	ＭＦ54Ⅳ層	46.0	46.0	20.5	50.9	
39-144	21-1	円盤状石製品	ＭＣ52Ⅱ層	35.0	35.0	8.0	14.7	
39-145	21-1	円盤状石製品	ＭＧ54Ⅰ層	61.0	61.0	11.0	53.6	
39-146	21-1	線刻礫	ＭＤ50Ⅰ層	(120.5)	(120.5)	20.0	71.8	折損
39-147	21-1	線刻礫	表採	94.0	94.0	19.5	214.1	
39-148	21-1	線刻礫	表採	109.5	109.5	13.5	151.9	
39-149	21-1	球状石製品	ＬＳ52Ⅲ層	65.0	65.0	56.5	369.0	
39-150	21-1	球状石製品	ＭＤ54Ⅲ層	73.0	73.0	48.0	231.5	

第５章　自然科学的分析

第１節　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
小林紘一・丹生越子・伊藤茂・廣田正史・瀬谷薫
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・佐々木由香

１　はじめに

秋田県山本郡三種町に位置する柏木岱Ⅱ遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。柏木岱Ⅱ遺跡は縄文時代前期から後期までの遺跡であるが、遺構に伴う土器は少なかったことから、その年代観は必ずしも明確ではない。そのため、放射性炭素年代測定を行い、遺構群を相互に比較する資料とすることを目的として行われた。測定試料の選択は佐々木、試料の調製は廣田、瀬谷、Lomtatidze、Jorjoliani、測定は小林、丹生、伊藤が行い、本文は伊藤、佐々木が作成した。

２　試料と方法

測定試料の情報、調製データは第15表のとおりである。試料は竪穴住居（SI94）の炉跡（土器埋設炉内）と掘立柱建物跡（SB69・101）の柱穴の柱材の痕跡内、土器埋設遺構（SR45）の土器内、土坑（SK15）の5層から出土した炭化材各１点である。試料は土壌を回収し、水洗選別して保管されて

第 15 表　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-8756	遺構：SI94 試料 No. ：1 層位：炉跡１層	試料の種類：炭化材（クリ：３年輪分） 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N） サルフィックス
PLD-8757	遺構：SB69 P1 試料 No. ：2 層位：覆土	試料の種類:炭化材（トネリコ属:2 年輪分） 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N） サルフィックス
PLD-8758	遺構：SB101 P2 試料 No. ：3 層位：覆土	試料の種類：炭化材（クリ：３年輪分） 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N） サルフィックス
PLD-8759	遺構：SR45 試料 No. ：4 層位：１層　土器内	試料の種類：炭化材（クリ：1.5 年輪分） 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N） サルフィックス
PLD-8760	遺構：SK15 試料 No. ：5 層位：５層	試料の種類：炭化材（クリ：５年輪分） 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N） サルフィックス

いた炭化物のうち、同一個体で樹種同定と放射性炭素年代測定の双方が可能なものを選び出した。炭化材の樹種はクリまたはトネリコ属の広葉樹で（詳細は樹種同定の項参照）、最外年輪以外の部位不明である。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

３　結果

第16表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲を、第40図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示すものである。なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1σ暦年代範

第 16 表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-8756 試料 No. ：1	-30.91±0.24	4166±30	4165±30	2880BC(12.2%)2850BC 2820BC(37.2%)2740BC 2730BC(18.8%)2670BC	2880BC(19.6%)2830BC 2820BC(75.8%)2630BC
PLD-8757 試料 No. ：2	-27.16±0.26	3599±30	3600±30	2020BC(13.4%)1990BC 1980BC(54.8%)1900BC	2030BC(95.4%)1880BC
PLD-8758 試料 No. ：3	-29.00±0.25	3700±29	3700±30	2140BC(68.2%)2030BC	2200BC(8.3%)2160BC 2150BC(84.9%)2010BC 2000BC(2.2%)1980BC
PLD-8759 試料 No. ：4	-30.41±0.22	4092±29	4090±30	2840BC(12.3%)2810BC 2680BC(55.9%)2570BC	2860BC(19.9%)2800BC 2760BC(6.9%)2720BC 2710BC(66.0%)2560BC 2520BC(2.7%)2490BC
PLD-8760 試料 No. ：5	-27.93±0.18	3714±28	3715±30	2190BC(5.6%)2180BC 2150BC(16.5%)2110BC 2100BC(46.0%)2030BC	2200BC(95.4%)2030BC

囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

４　考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

2σ暦年代範囲に注目して古い順に年代を整理する。2σ暦年代範囲は、95.4％の確率で年代がこの範囲に収まることを意味する。

竪穴住居（SI94）の埋設土器内から出土した試料No.１（PLD-8756）の炭化材は、2σ暦年代範囲で2820-2630calBC（75.8％）、2880-2830calBC（19.6％）の年代範囲であった。埋設土器は遺存状態が脆いため型式がはっきりしないが、縄文時代中期末から後期初頭と考えられている。土器埋設遺構（SR45）の土器内から出土した試料No.４（PLD-8759）の炭化材は、10％を超える年代範囲で2710-2560calBC（66.0％）、2860-2800calBC（19.9％）であった。土器埋設遺構内からは後期の十腰内１式が出土している。上記２点の年代範囲と土器付着炭化物の年代とを比較すると、縄文時代中期末大木10式併行に相当する（藤根ほか，2005；西本編，2006）。

掘立柱建物跡（SB69）から出土した試料No.２（PLD-8757）の炭化材は、2030-1880calBC（95.4％）の年代範囲であった。掘立柱建物跡（SB101）から出土した試料No.３（PLD-8758）の炭化材は、2150-2010calBC（84.9％）が最も確率の高い年代範囲であった。土坑（SK15）から出土した試料No.５（PLD-8760）の炭化材は、2200-2030calBC（95.4％）であった。これらの遺構からは、後期の十腰内１式が出土している。試料No.2はやや新しい年代範囲であるが、土器付着炭化物の年代と比較すると、縄文時代後期前葉十腰内１式併行に相当する（西本編，2006,2007）。

なお、木材の^{14}C年代が示すのは、その部分の年輪が形成された年代である。最外年輪を試料とした場合、その年代が示すのは枯死あるいは伐採の年代であり、木材が利用された年代に近いと考えることができる。一方、最外年輪より内側の部位を試料とした場合、その年代が示すのは枯死あるいは伐採の年代よりも古い年代である。これは古木効果と呼ばれる。今回測定した炭化材は、いずれも最外年輪以外の部位不明であるため、測定した年輪部分と最外年輪の間にどのくらいの年輪数があるかによって古い年代が示されている可能性を考慮する必要がある。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

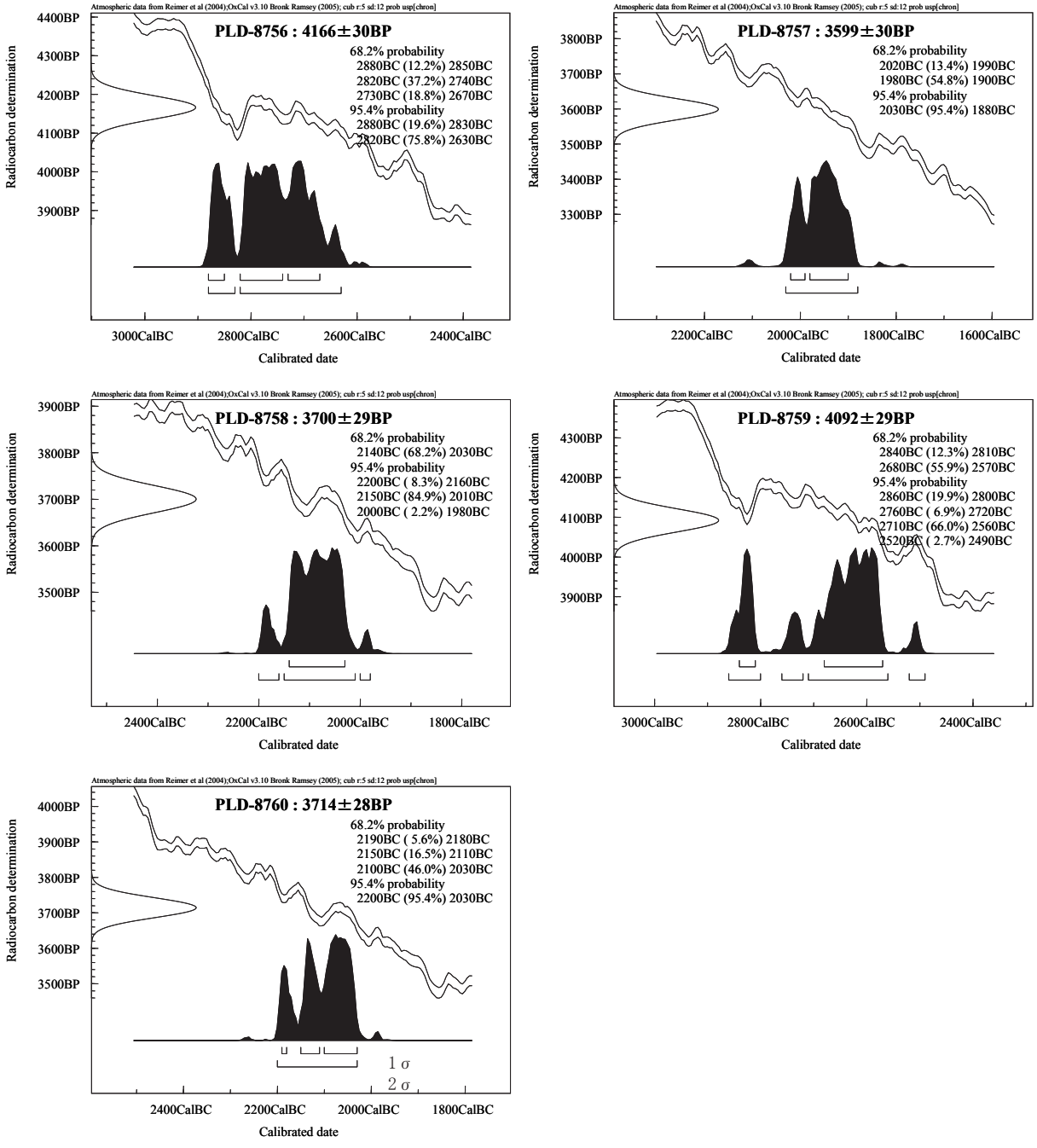
藤根久・佐々木由香・日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会（2005）複式炉の年代．日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集．23-33.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代．3-20.

西本豊弘編（2006）新弥生時代のはじまり第1巻　弥生時代の新年代．143p，雄山閣.

西本豊弘編（2007）新弥生時代のはじまり第2巻　縄文時代から弥生時代へ．185p，雄山閣.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.



第40図　暦年較正結果

第２節　柏木岱Ⅱ遺跡出土炭化材の樹種同定

藤根　久（パレオ・ラボ）

１　はじめに

柏木岱Ⅱ遺跡は、秋田県山本郡三種町に位置する縄文時代の集落跡であり、縄文時代前期から後期にかけての遺物が出土しているが、遺構に伴う土器は少ない。

ここでは、当時の利用木材の種類を把握することを目的として、遺構覆土から出土した炭化材5点の樹種を同定した。なお、樹種を同定した炭化材は、AMS法による放射性炭素年代測定を行っている。

２　試料と方法

炭化材試料は、複数含まれていたもののうち、樹種同定と放射性炭素年代測定の双方が可能なものを選び出した。３断面(横断面・接線断面・放射断面)を直径１cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、銀ペーストを塗布した後乾燥させた。その後、金蒸着して走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-5900LV型）を用いて同定した。同定に使用しなかった残りの試料は秋田県埋蔵文化財センター中央調査課に保管されている。

３　結果および考察

樹種を同定した結果、落葉広葉樹であるブナ科のクリが4試料、モクセイ科のトネリコ属が1試料であった。クリは、竪穴住居跡ＳＩ94の炉跡（土器埋設内）や掘立柱建物跡Ｐ２覆土（柱材の痕跡内）、土器埋設施設ＳＲ45の土器内、土坑ＳＫ15から検出された炭化材であり、燃料材あるいは建物建築材として利用された木材と考えられている。一方、トネリコ属の炭化材は、掘立柱建物跡Ｐ１覆土の柱材の痕跡内底面付近から出土していることから柱材である可能性が高いと考えられている。

年代測定の結果、これらの材は縄文時代中期後半から後期前葉に含まれる（詳細は年代測定の項参照）。該期における建築材および燃料材には本州東半部においてクリが多く出土していることが知られている（山田，1993）。またトネリコ属も割合的には低いが、縄文時代の建築材や土木材、燃料材で使用されたことが判明している（山田，1993）。当遺跡の同定点数は5点と少ないものの、同定された点数は、縄文時代における建築材および燃料材の樹種利用と同様の傾向を示した。

以下に同定された分類群の記載を行い、代表的なものについて写真図版を示して同定の根拠とする。

（1）クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版　1a-1c（№1），2a-2c（№3），3a-3c（№4），4a-4c（№5）

第17表　出土炭化材の詳細とその樹種

試料№	遺構	遺構の特徴	取上げ№	位置	樹種	備考
1	SI94	竪穴住居跡	炭1	炉跡1層	クリ	炉跡内
2	SB69	堀立柱建物跡	炭2	P1覆土	トネリコ属	柱材跡内
3	SB101	堀立柱建物跡	炭3	P2覆土	クリ	柱材跡内
4	SR45	土器埋設遺構	炭4	1層	クリ	土器内
5	SK15	土杭	炭5	5層	クリ	

年輪の始めに大型の管孔が配列し、晩材部は非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状･柵状である。

クリは、北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通に生育する落葉高木である。材は粘りがあり耐朽性に優れている。

（２）トネリコ属　Fraxinus　モクセイ科　図版　5a-5c(№2)

中型～大型の管孔が1～2層配列し、単独または2個複合した小型で厚壁の管孔が散在する環孔材である。木部柔細胞は、周囲状および連合翼状である。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一である。放射組織は同性1～3細胞幅、6～30細胞高である。

トネリコ属は、おもに温帯に生育する落葉高木でシオジ、ヤチダモ、トネリコ、アオダモなど約9種類ある。材は、重硬で弾力性があり折れ難く、機械類・板材・棒・柄などに使われる。

引用文献

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成―用材から見た人間・植物関係史―．植生史研究、特別第1号、242p.

第６章　まとめ

柏木岱Ⅱ遺跡の発掘調査では、縄文時代後期を主体とする遺構が検出され、主に縄文時代前期～後期にかけての遺物が出土した。遺跡は工事により開削された形跡があり、調査範囲の大部分で耕作に伴う撹乱が地山まで到達しており、遺構の遺存状態は必ずしも良好ではなかったが、竪穴住居跡や掘立柱建物跡など、縄文時代の人々の活動の痕跡が残されていた。以下に特徴的な遺構と遺物について検討を行うことにする。

（１）遺構について

柏木岱Ⅱ遺跡で検出された縄文時代の遺構は、竪穴住居跡２軒、掘立柱建物跡４棟、土器埋設遺構２基、土坑４基などで、縄文時代後期初頭の遺構が主体を占めている。

秋田県内で縄文時代後期の掘立柱建物跡を検出した遺跡は、鹿角市大湯環状列石、鹿角市高屋館遺跡、北秋田市伊勢堂岱遺跡などがある。これらの遺跡では、掘立柱建物跡が環状列石の同心円の外側に並ぶ。建物と列石祭祀との同時性から、環状列石における建物を用いる祭祀が、列石内の特定の場所を意識して行われていたことが想定される。大湯環状列石や高屋館遺跡で検出した建物跡の柱穴の配置は、４本柱の方形と６本柱の亀甲形の構造があり、死者を一時的に安置する殯を行った施設として考えられている。

柏木岱Ⅱ遺跡で検出した縄文時代後期初頭の掘立柱建物跡は、柱４本からなる長方形のものが３棟、もう１棟は亀甲形構造と推測される。このうちの１棟は長軸約3.4m、短軸約2.8mの規模があり、建物跡を構成する柱穴は径約60cm～80cm、深さが約60～70cm、柱痕は径30cm程で、前述の遺跡と同様な様相を呈している。また、柱穴様ピットの中には、掘立柱建物跡の柱穴となり得るものが他にもあり、現状では４棟の掘立柱建物跡を復元したが、それ以上の棟数が存在していたと推定される。本遺跡の遺構の性格は不明な点もあるが、検出した竪穴住居跡や掘立柱建物跡は縄文時代後期初頭の集落跡の一角を占めるものであると思われ、台地の縁辺部に集中する傾向を示しているものかと推定される。また、今回の調査範囲は柏木岱Ⅱ遺跡の南東部分の一角であり、調査区の北側は平坦部が広がっていることから、遺跡は調査区の北側に続いているものと推定される。

（２）遺物について

遺物は遺構内外を問わず散乱した状態で出土しており、特に調査区北西側に集中している。出土した土器は、１～４類に分けられる。１類は縄文時代前期の円筒下層ａ式、ｂ式土器、２類は縄文時代中期末葉～後期初頭の大木10式土器、十腰内１式土器、３類は縄文時代後期前葉の十腰内２式土器、４類は弥生時代の土器である。中でも縄文時代後期初頭の十腰内１式土器に包括されるものが多い。

きわだって多く出土したことで注目される石器に、三脚石器56点がある。このうちの６点には天然アスファルトの付着しているものがあり、さらに三つの脚の一つを欠くものや自然面に線刻を施すものがある。三脚石器の出土状況は、縄文時代後期初頭のＳＢ69掘立柱建物跡とＳＫ15土坑から出土した４点の他は、縄文時代後期の遺物包含層から出土した。

秋田県内で三脚石器が出土した遺跡は多い順に、伊勢堂岱遺跡の184点、柏木岱Ⅱ遺跡の56点、藤株遺跡の46点、真壁地遺跡の46点、塚の下遺跡の25点、萩ノ台Ⅱ遺跡の２点、家の下遺跡の２点、萩峠遺跡、萱刈沢Ⅰ遺跡、古館堤頭遺跡などのそれぞれ１点である。点数では伊勢堂岱遺跡、柏木岱Ⅱ

遺跡、藤株遺跡、真壁地遺跡が他の遺跡に比して圧倒的に多い。石材は頁岩あるいは泥岩が多用されている。また、時期的には古館堤頭遺跡の大木７ｂ式期を最古として縄文時代晩期の前半まで認められ、特に縄文時代後期前葉にそのピークがあることが分かる。

三脚石器の用途については、利器としての実用品か非実用品の両論があり、結論は得られていない。三脚石器を利器として考察したものには、「植物から繊維を採るのに用いた刃物」があり、非実用品と考察したものには、「三脚という形態に意義をもつ呪術具」がある。伊勢堂岱遺跡では縄文時代中期末～後期初頭の共同墓域として使われたと考えられる土坑墓から出土しており、死者祭祀に伴い送られる道具に三脚石器が含まれる。柏木岱Ⅱ遺跡や真壁地遺跡例の天然アスファルトの付着と一つの脚が欠損しているという事実は着柄の可能性も類推され、用途を考える上で示唆に富むものである。

（３）交易関連遺物について

柏木岱Ⅱ遺跡に隣接する鹿渡渉Ⅱ・樋向Ⅰなどの遺跡は、縄文時代に石器製作に適した頁岩の原石を大量に採取し、粗割の段階まで加工していた遺跡であることが分かっている。一方、柏木岱Ⅱ遺跡では、剥片素材の元になる頁岩の石核や剥片が多量に出土しているにもかかわらず、原石の採掘跡が見つかっていないことから、石材の供給や交易において周辺遺跡と密接な関わりをもちながら、集落内で石器製作が行われていた可能性が高いと考えられる。これらの遺跡は小又川流域に存在しており、石材の運搬・流通に非常に便利な立地であったと推測される。

他に交易に関わる出土品として、天然アスファルトと黒曜石が挙げられる。天然アスファルトは、三脚石器、石鏃、石錐に付着していた。天然アスファルトの産地としては潟上市の槻の木、能代市二ツ井町駒形地区不動沢があり、柏木岱Ⅱ遺跡は両産地の中間に位置する。黒曜石は、石鏃１点の他は剥片や残核が出土している。県内の黒曜石の産地は、男鹿市の金ヶ崎、脇本・船越海岸であり、頁岩の極めて豊富な本地域にまで少量の黒曜石が持たらされていることが知られる。

引用・参考文献

秋田県教育委員会　『塚の下遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第61集　1979（昭和54）年

秋田県教育委員会　『萩峠遺跡発掘調査報告』　秋田県文化財調査報告書第84集　1981（昭和56）年

秋田県教育委員会　『藤株遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第85集　1981（昭和56）年

秋田県教育委員会　『真壁地遺跡・蟻ノ台発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第102集　1983（昭和58）年

秋田県教育委員会　『高屋館遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第198集　1990（平成２）年

秋田県教育委員会　『萱刈沢Ⅰ遺跡・萱刈沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第231集　1993（平成５）年

秋田県教育委員会　『萩ノ台Ⅱ遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第236集　1993（平成５）年

秋田県教育委員会　『家の下遺跡（１）発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第256集　1995（平成７）年

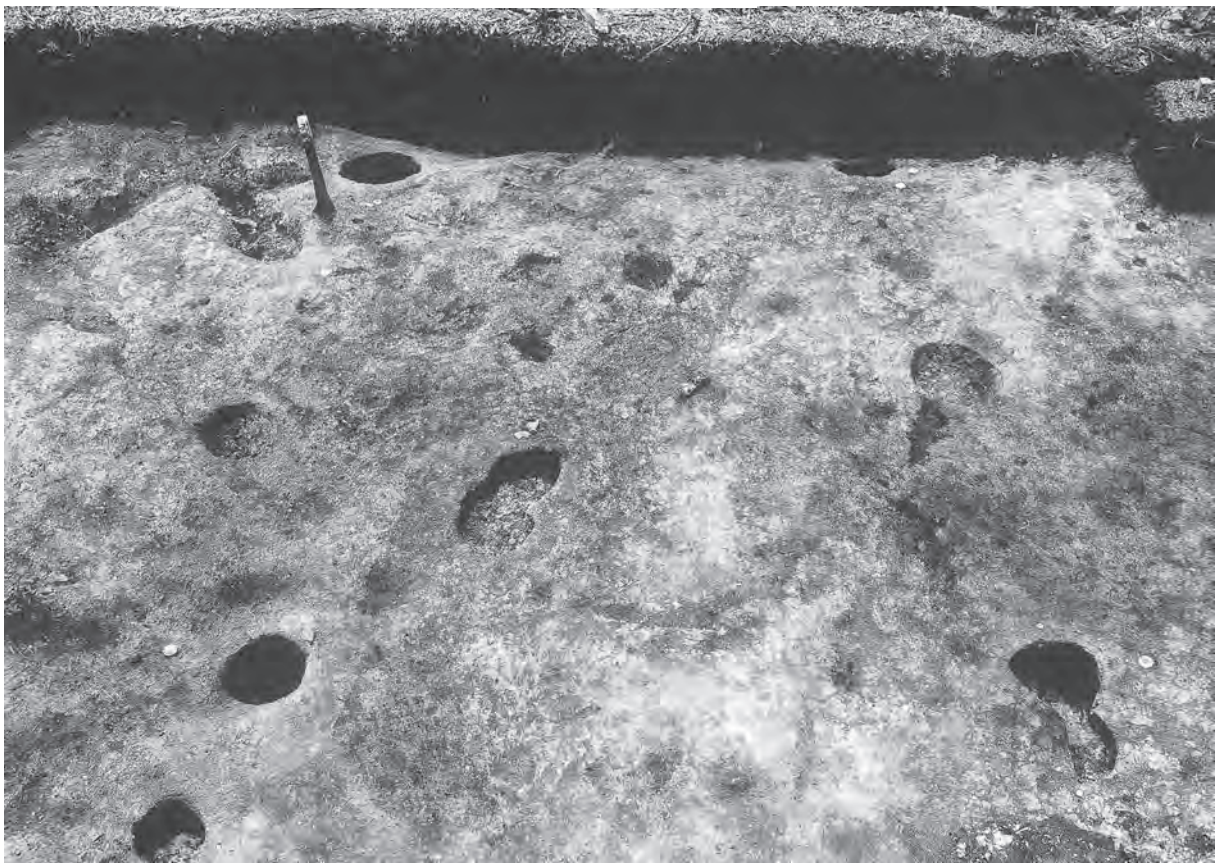
秋田県教育委員会　『伊勢堂岱遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第293集　1999（平成11）年

秋田県教育委員会　『日廻岱Ｂ遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第394集　2005（平成17）年

石倉惣吉「成島の珍石器考」『羽陽文化』第７号　山形県文化財保護協会　1950（昭和25年）

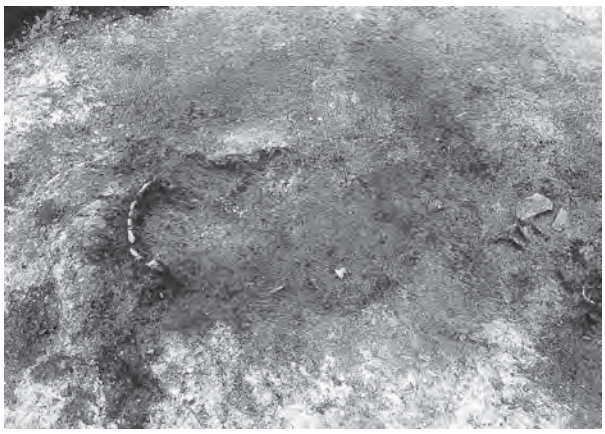
目黒吉明『福島県史第１巻　通史編１』原始古代中世編　福島県　1969（昭和44年）

高橋忠彦「米代川流域の三脚石器」『よねしろ考古』第８号　よねしろ考古学研究会　1993（平成５年）



1　SI78竪穴住居跡（北から）

2　SI94竪穴住居跡（西から）

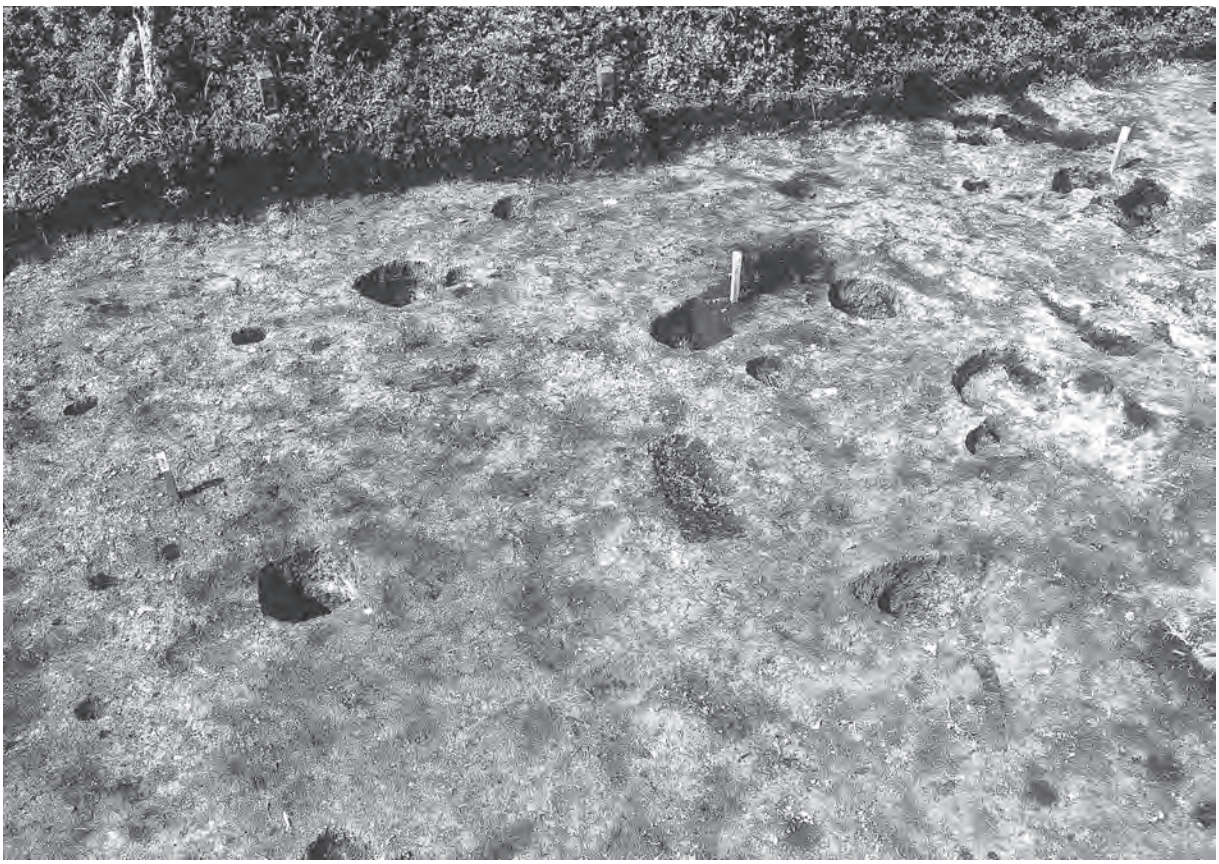


3　SI94竪穴住居炉跡（西から）

4　SI94炉・SK76・SKP77断面（南西から）

5　SI94炉・SK76・SKP77断面（北東から）

図版2



1　ＳＢ69掘立柱建物跡（南西から）

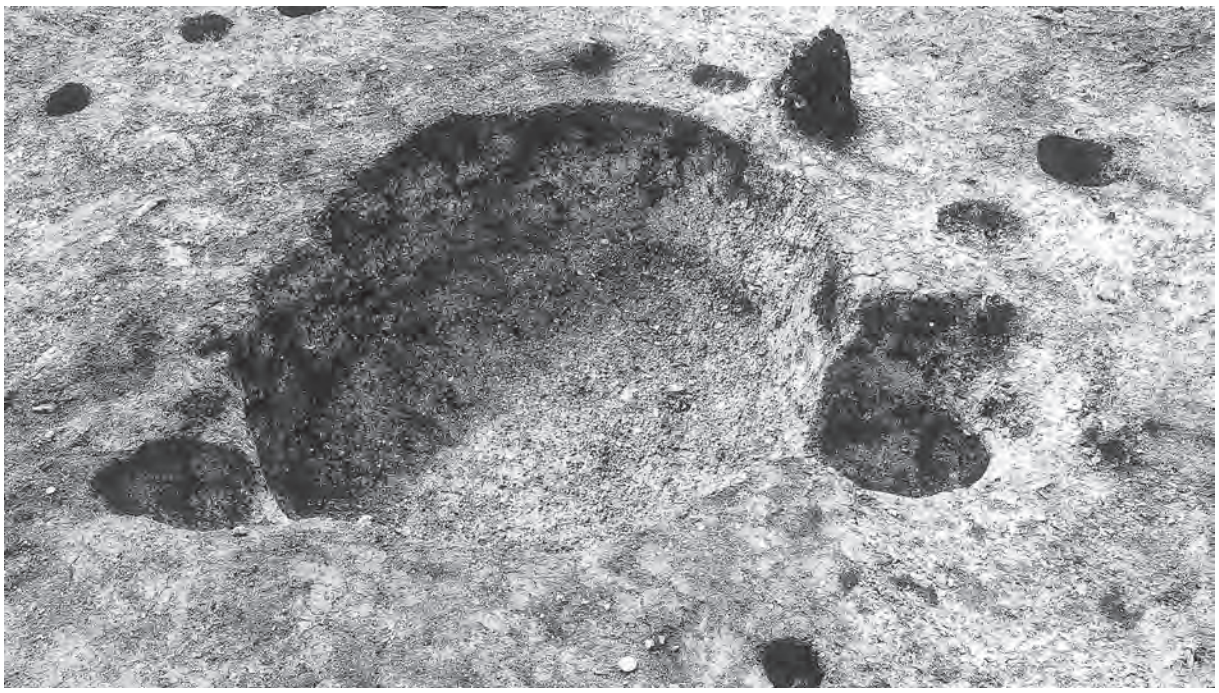
2　ＳＢ100・101・102 掘立柱建物跡（北西から）

1　ＳＢ100・101掘立柱建物跡
（北東から）

2　ＳＢ100−Ｐ２・ＳＢ101−Ｐ２
柱穴断面（南西から）

3　ＳＢ102掘立柱建物跡
（北から）

図版4



1　ＳＫ15・71土坑（東から）

2　ＳＫ15土坑断面（西から）

3　ＳＫ15土坑遺物出土状況（東から）

4　ＳＫ15土坑遺物出土状況（西から）

1　ＳＲ12土器埋設遺構（西から）

2　ＳＲ45土器埋設遺構（南から）

3　ＳＸ46性格不明遺構（南から）

4　ＭＦ54・ＭＥ54グリッド遺物出土状況

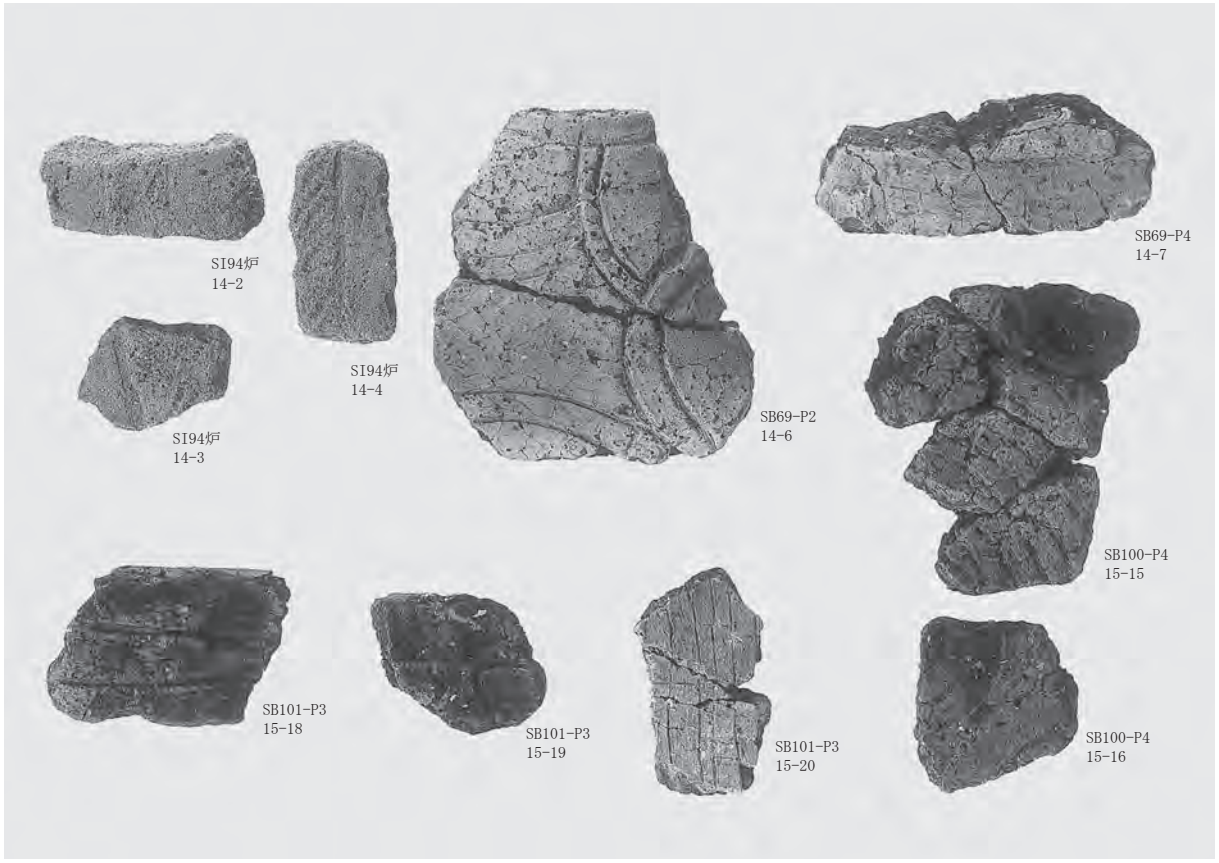
5　三脚石器出土状況

6　凹石出土状況

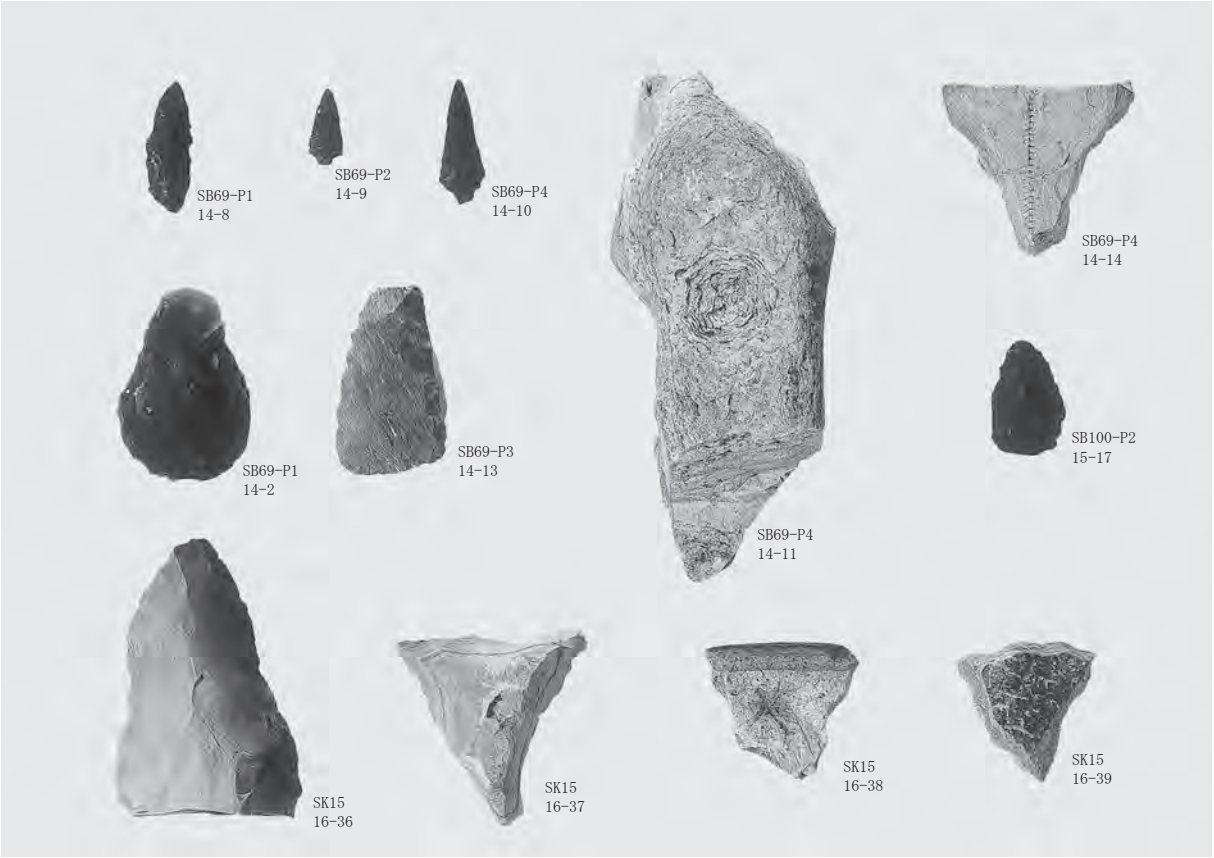
7　土器・石器出土状況

8　作業風景

1　SI78出土遺物



2　SI94炉、SB69・100・101出土遺物



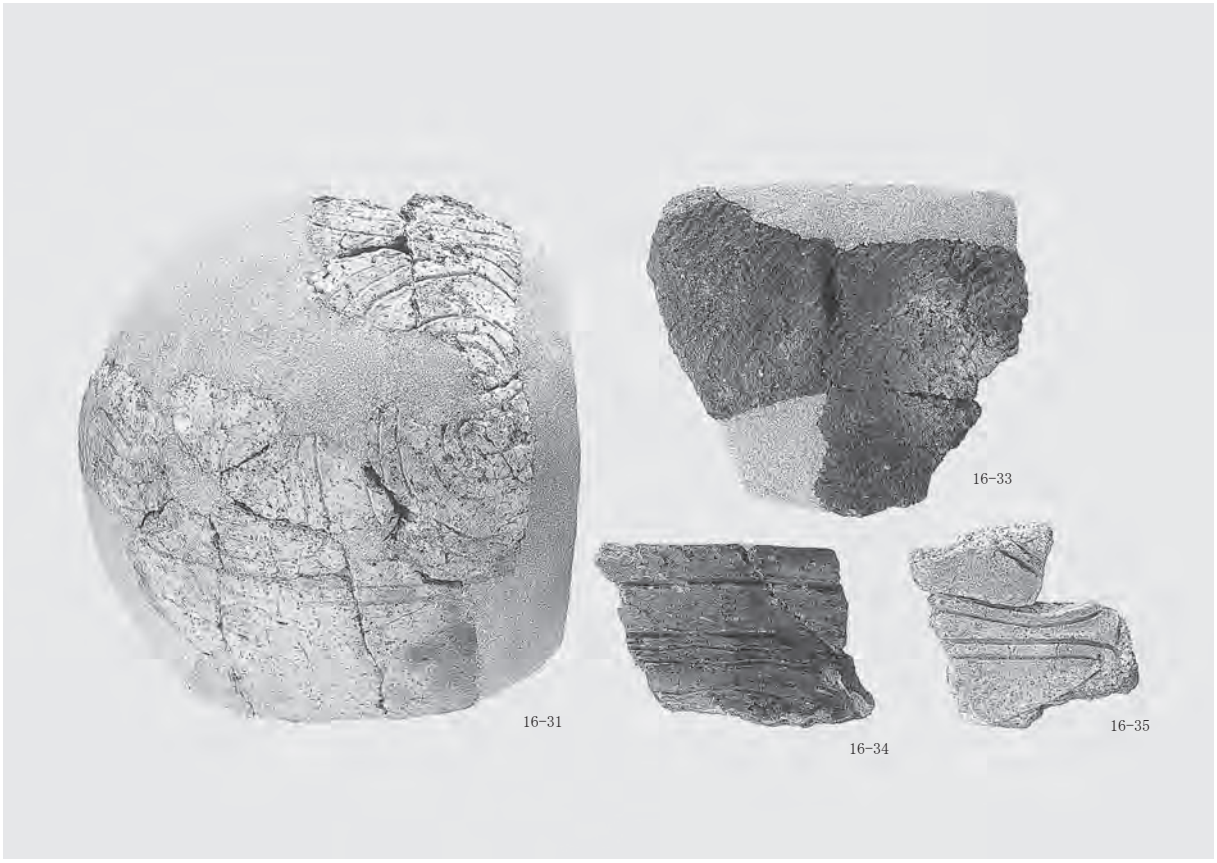
1　SI94、SB69・100・101、SK15出土遺物

2　SR12出土遺物

図版8

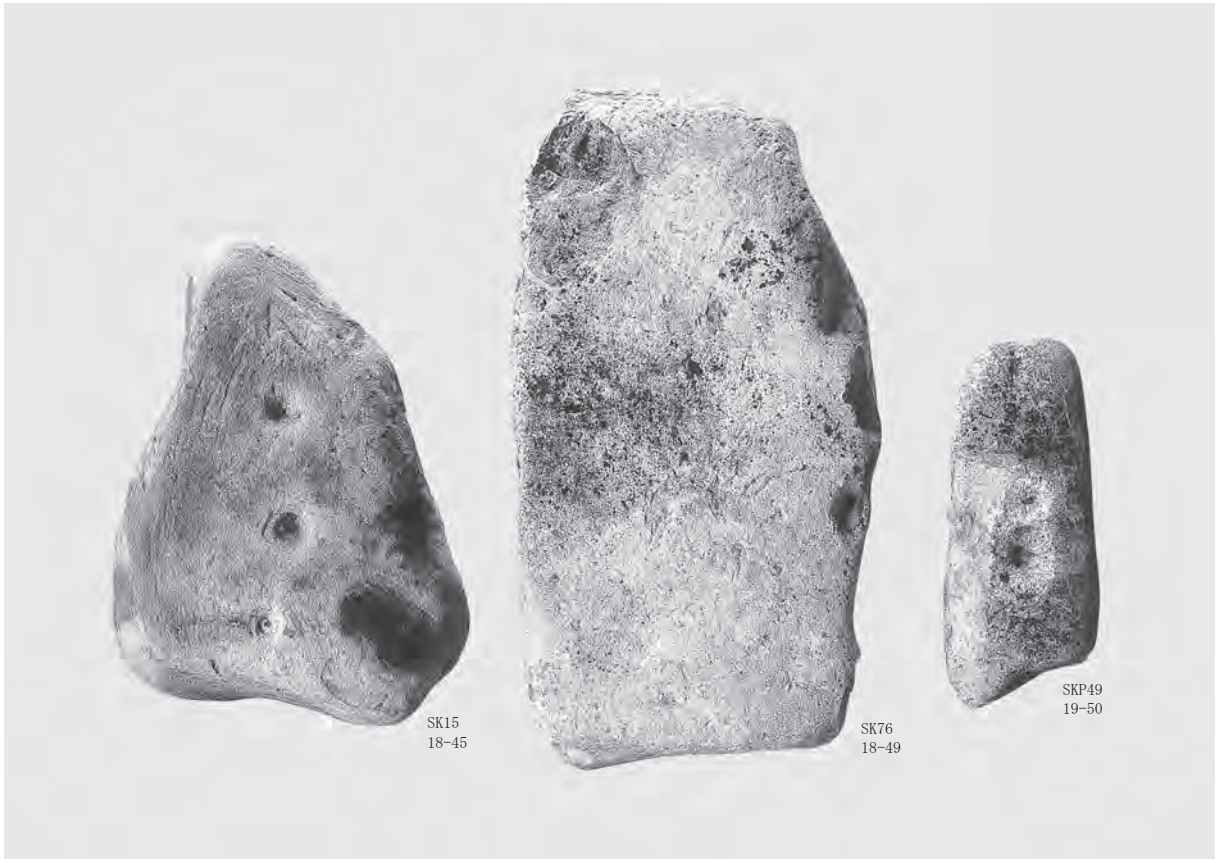
1　ＳＲ45出土遺物

2　ＳＫ15出土遺物



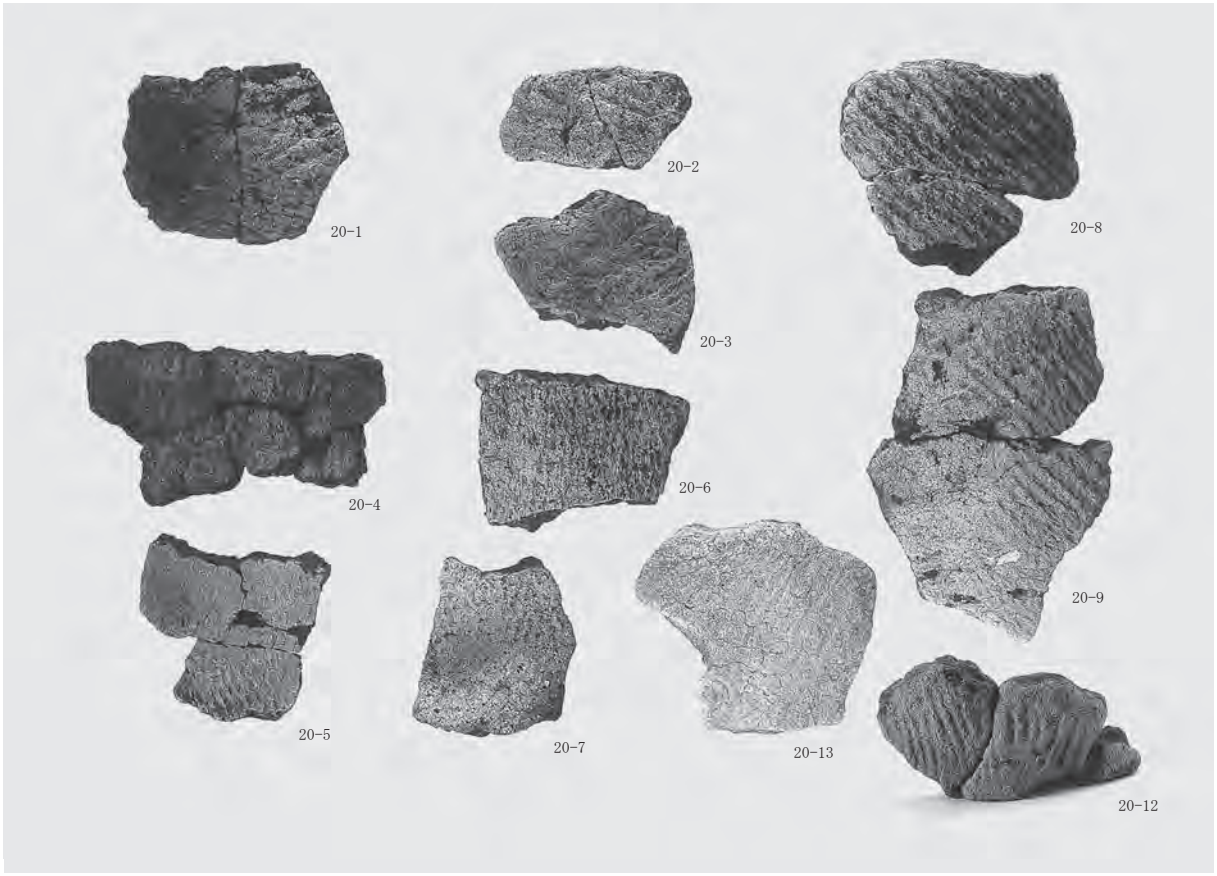
1　ＳＫ15出土遺物

2　ＳＫ15出土遺物



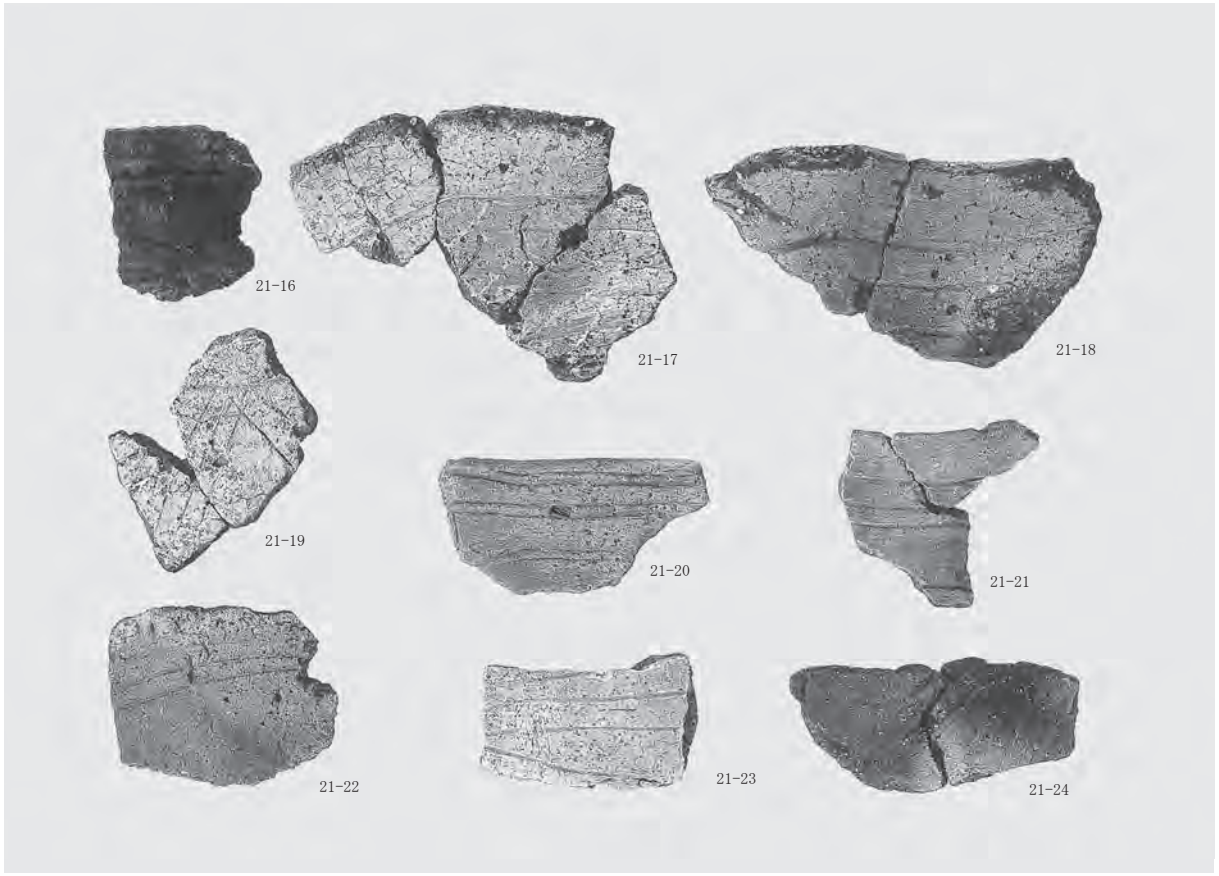
1　ＳＫ15・76、ＳＫＰ49出土遺物

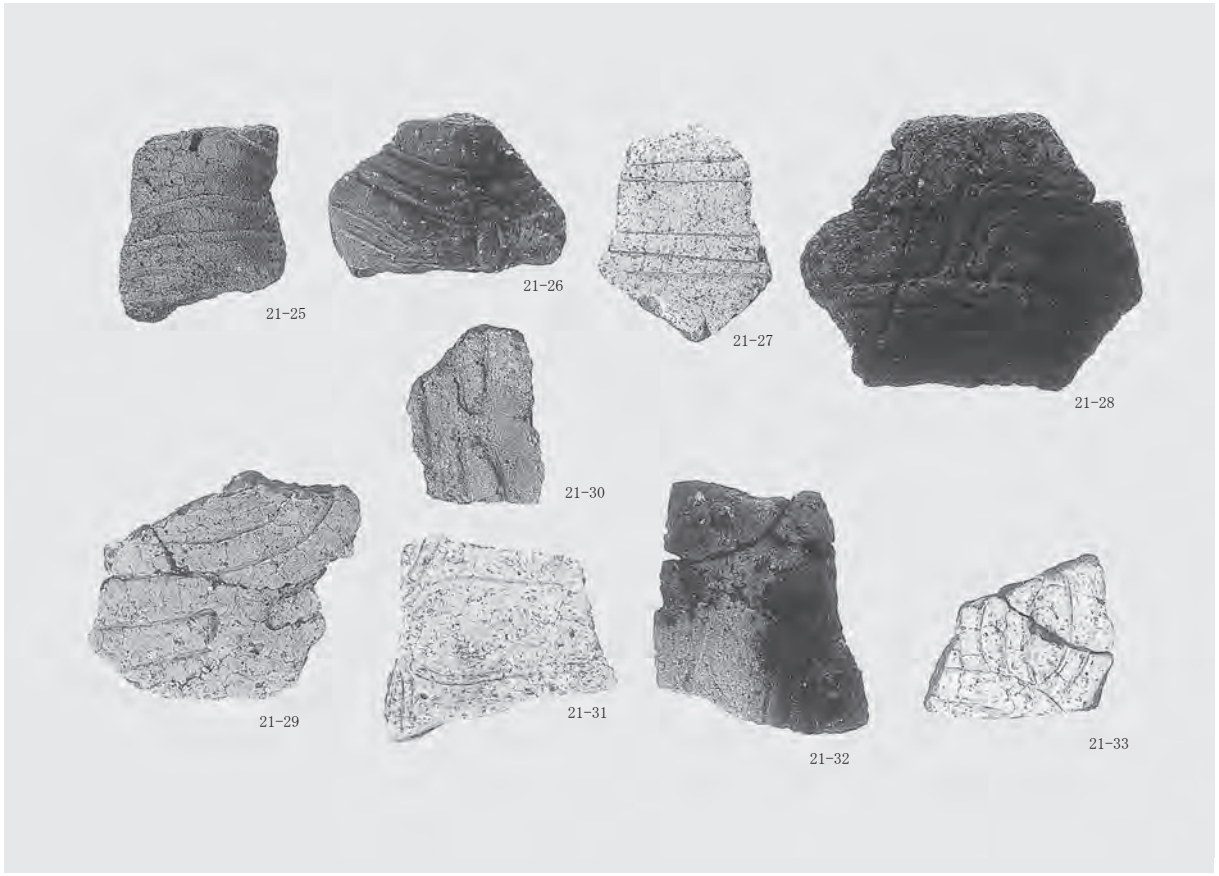
2　ＳＫ76、ＳＫＰ53・75・90・91出土遺物



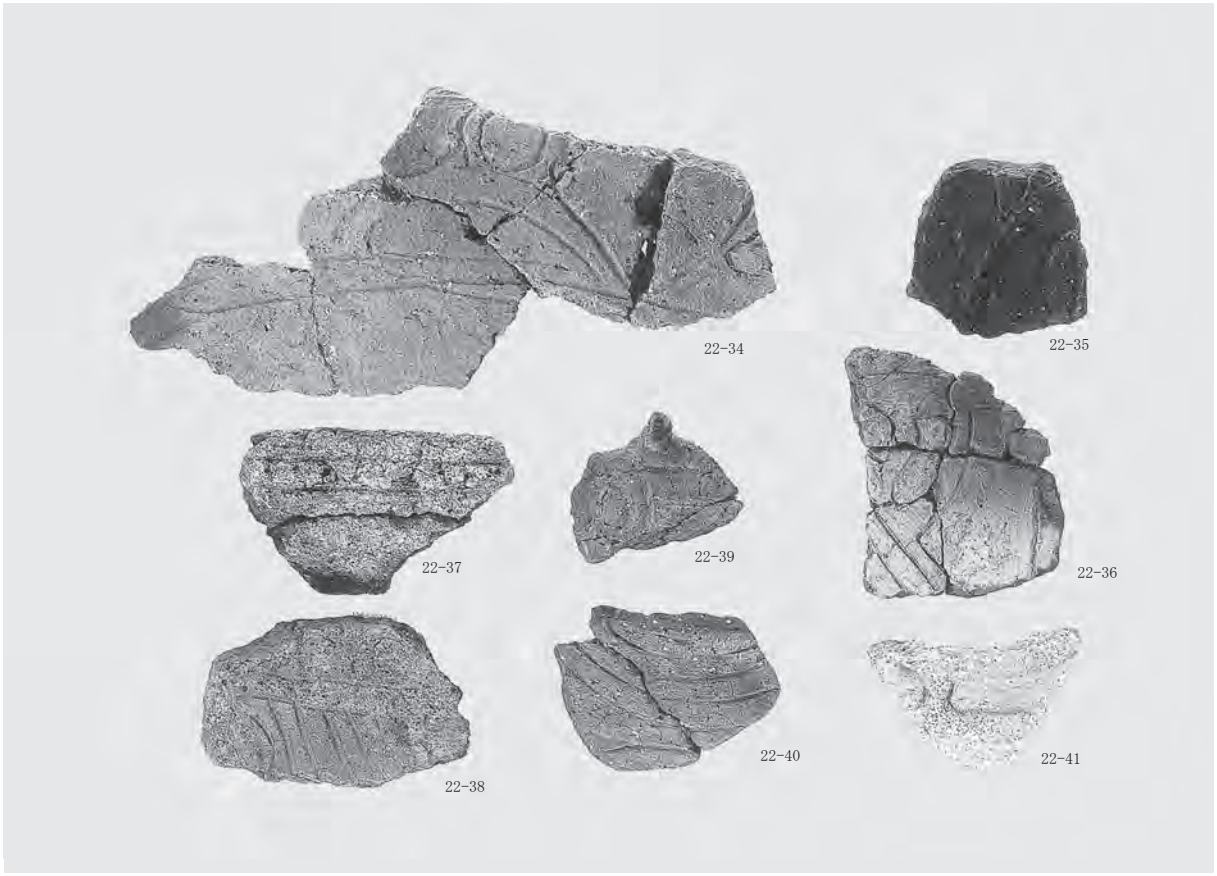
1　遺構外出土土器（1）

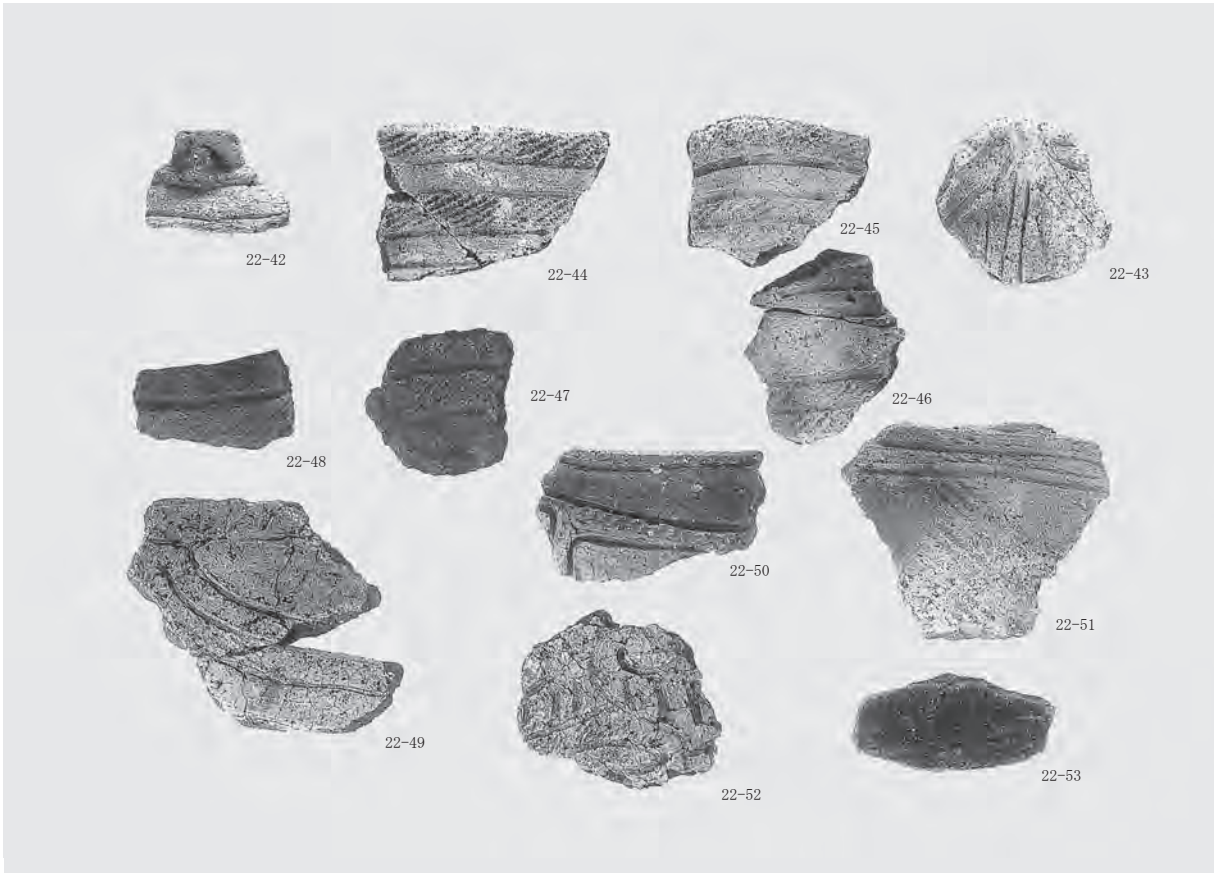
図版12





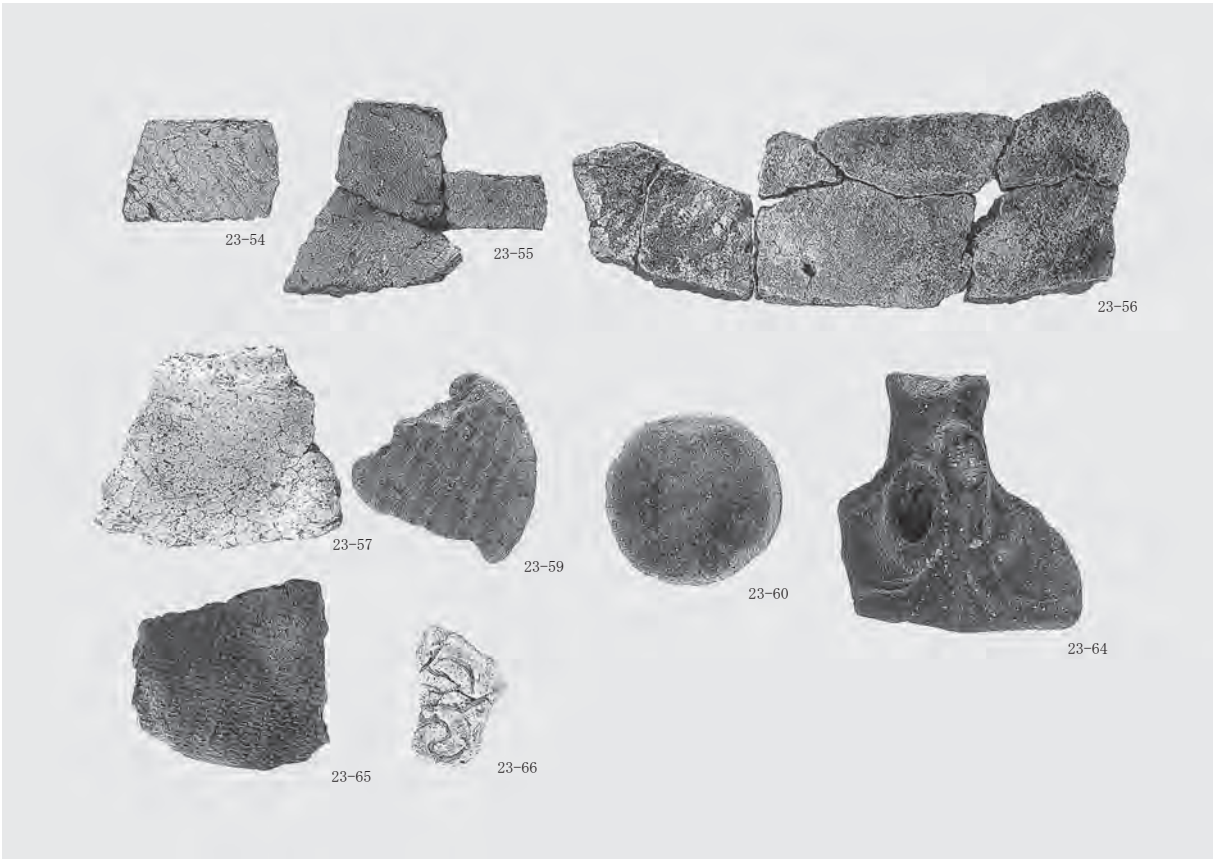
1　遺構外出土土器（２）


22-34
22-35
22-37
22-39
22-36
22-38
22-40
22-41

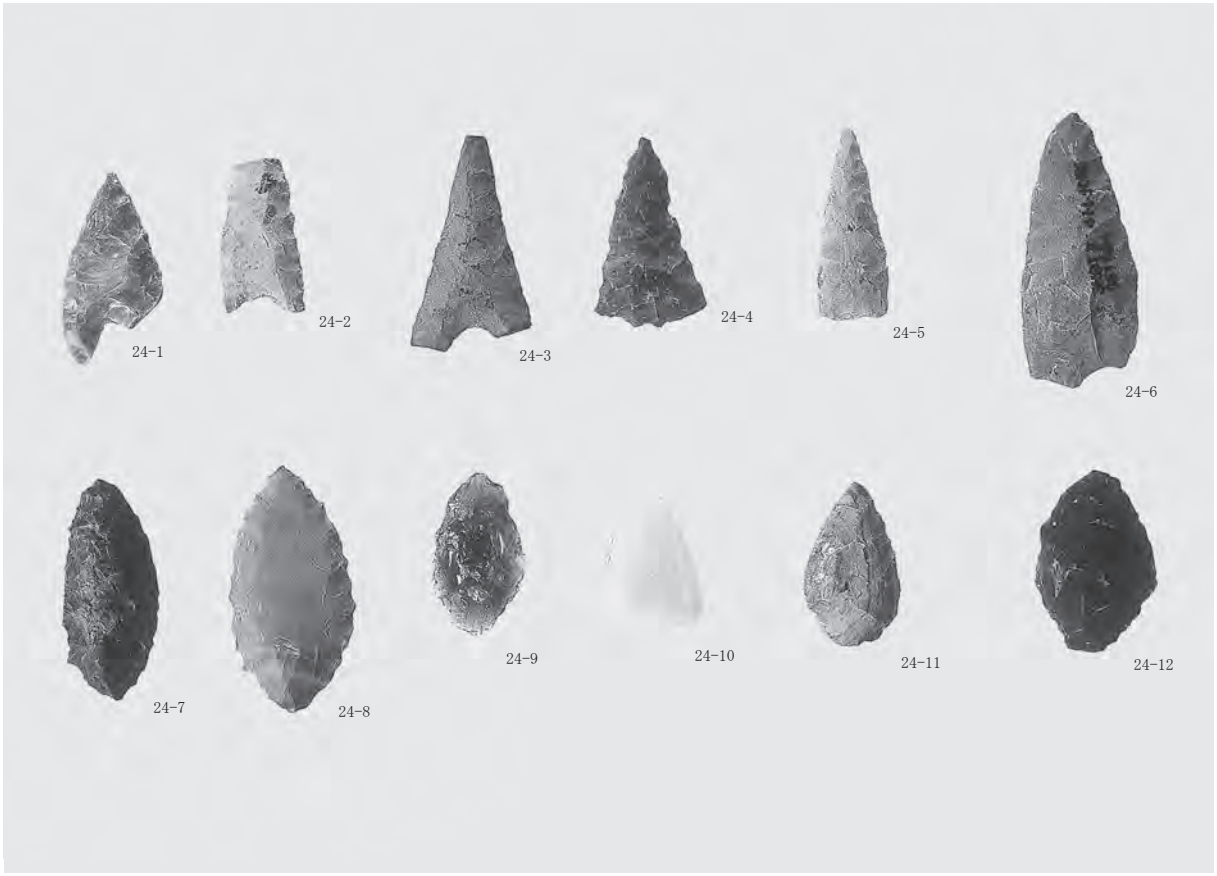

22-42
22-44
22-45
22-43
22-47
22-46
22-48
22-50
22-51
22-49
22-52
22-53

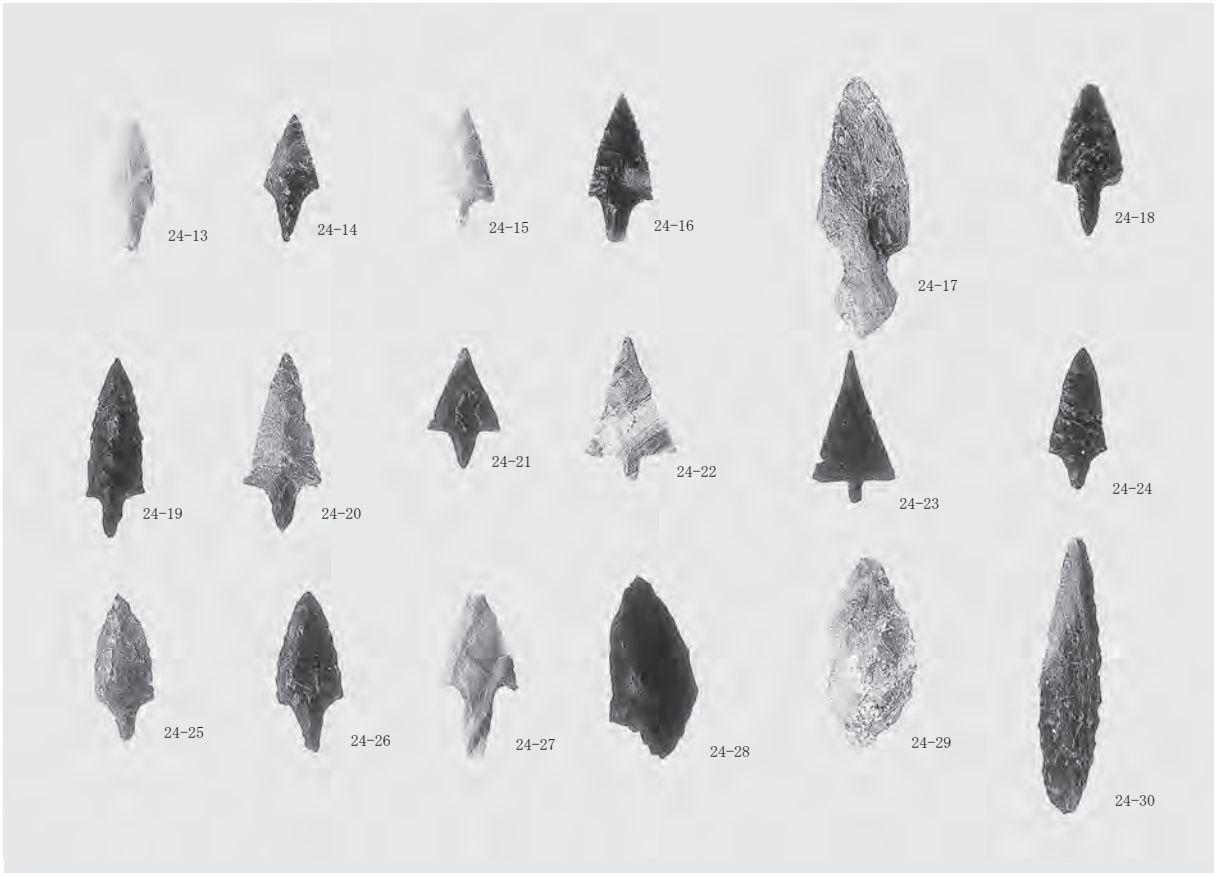
1　遺構外出土土器（３）

図版14



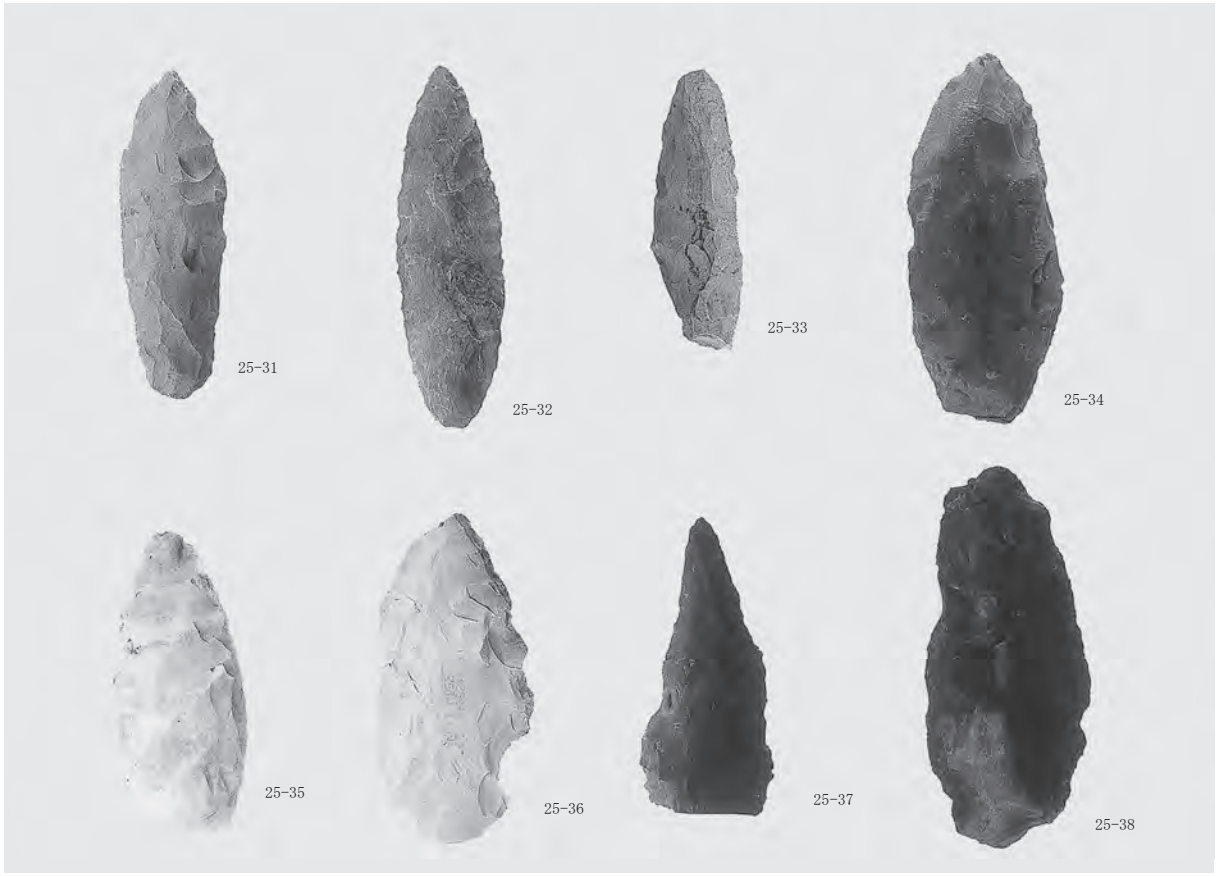
1　遺構外出土土器（４）

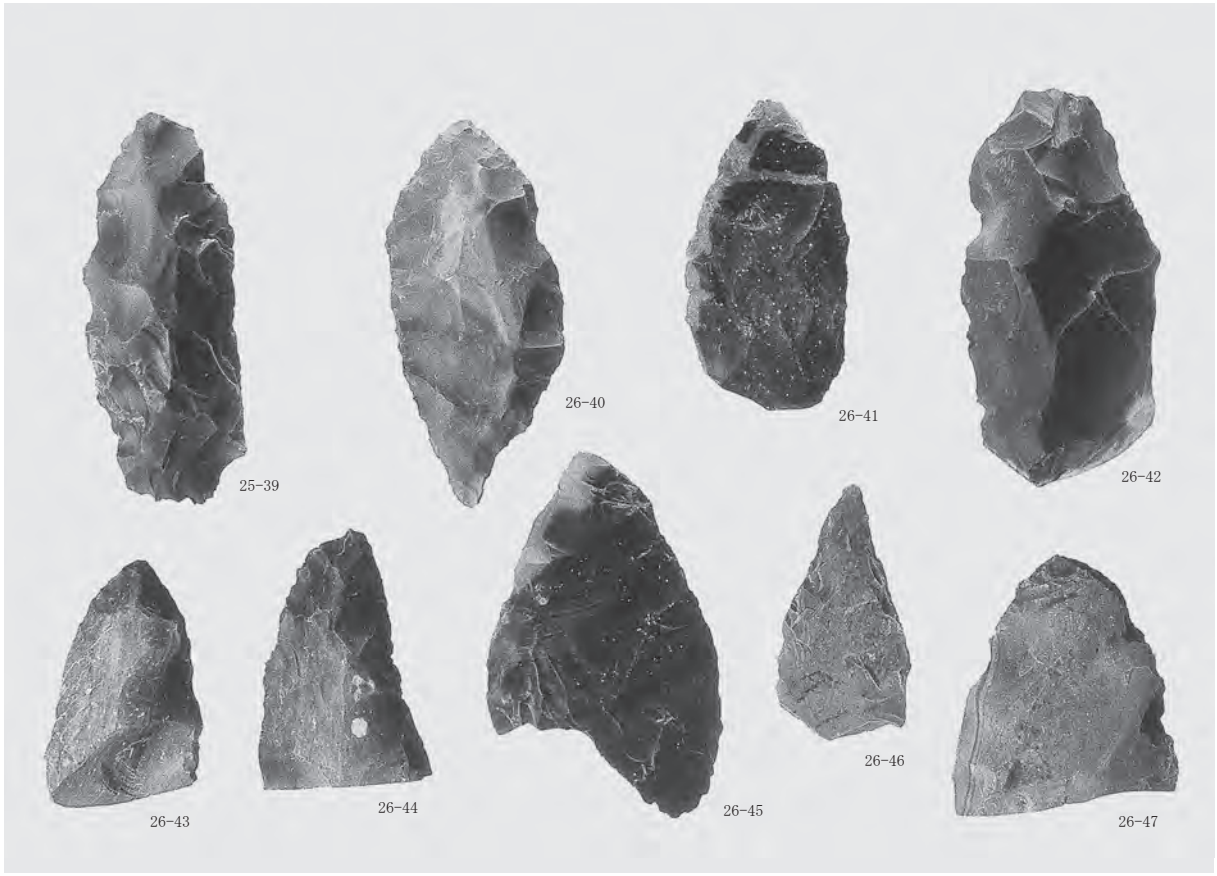

24-1
24-2
24-3
24-4
24-5
24-6
24-7
24-8
24-9
24-10
24-11
24-12


24-13
24-14
24-15
24-16
24-17
24-18
24-19
24-20
24-21
24-22
24-23
24-24
24-25
24-26
24-27
24-28
24-29
24-30

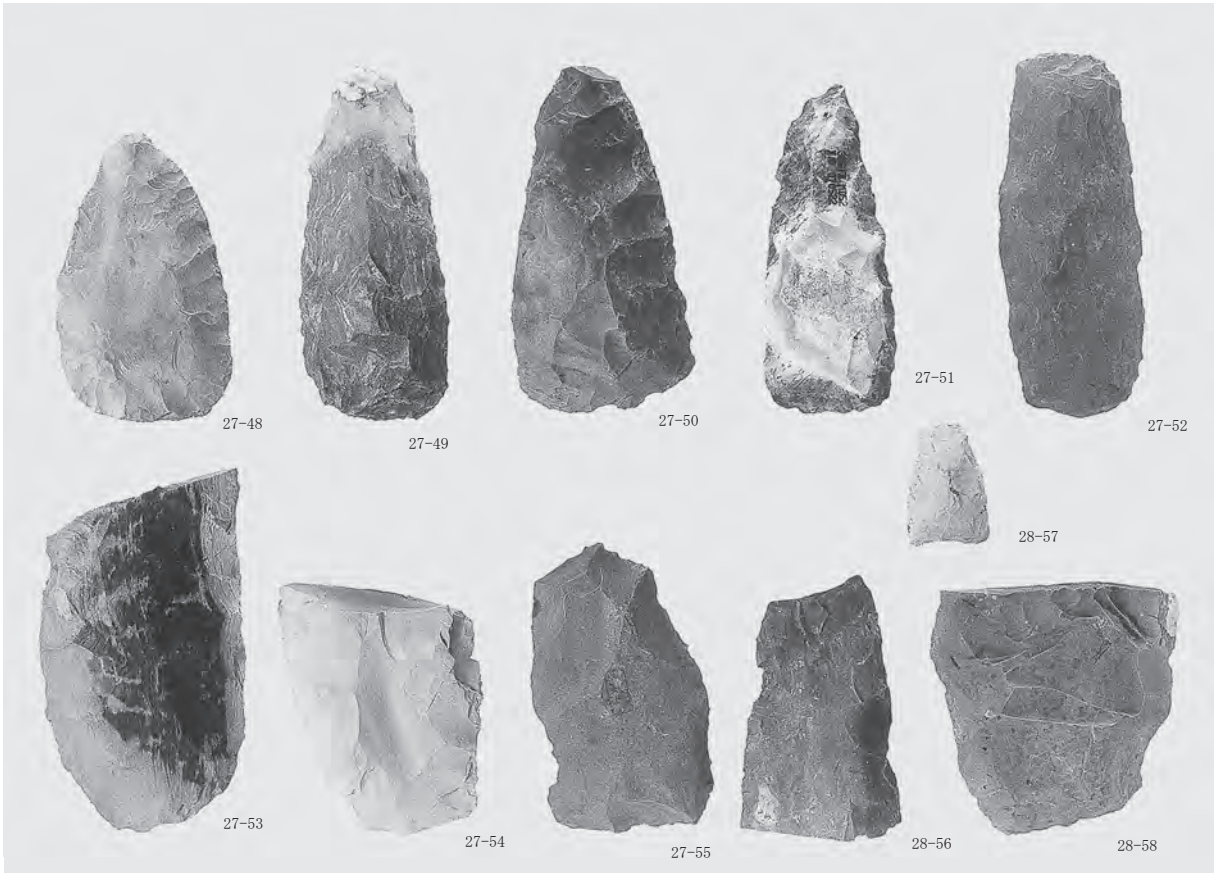
1　遺構外出土石器（1）

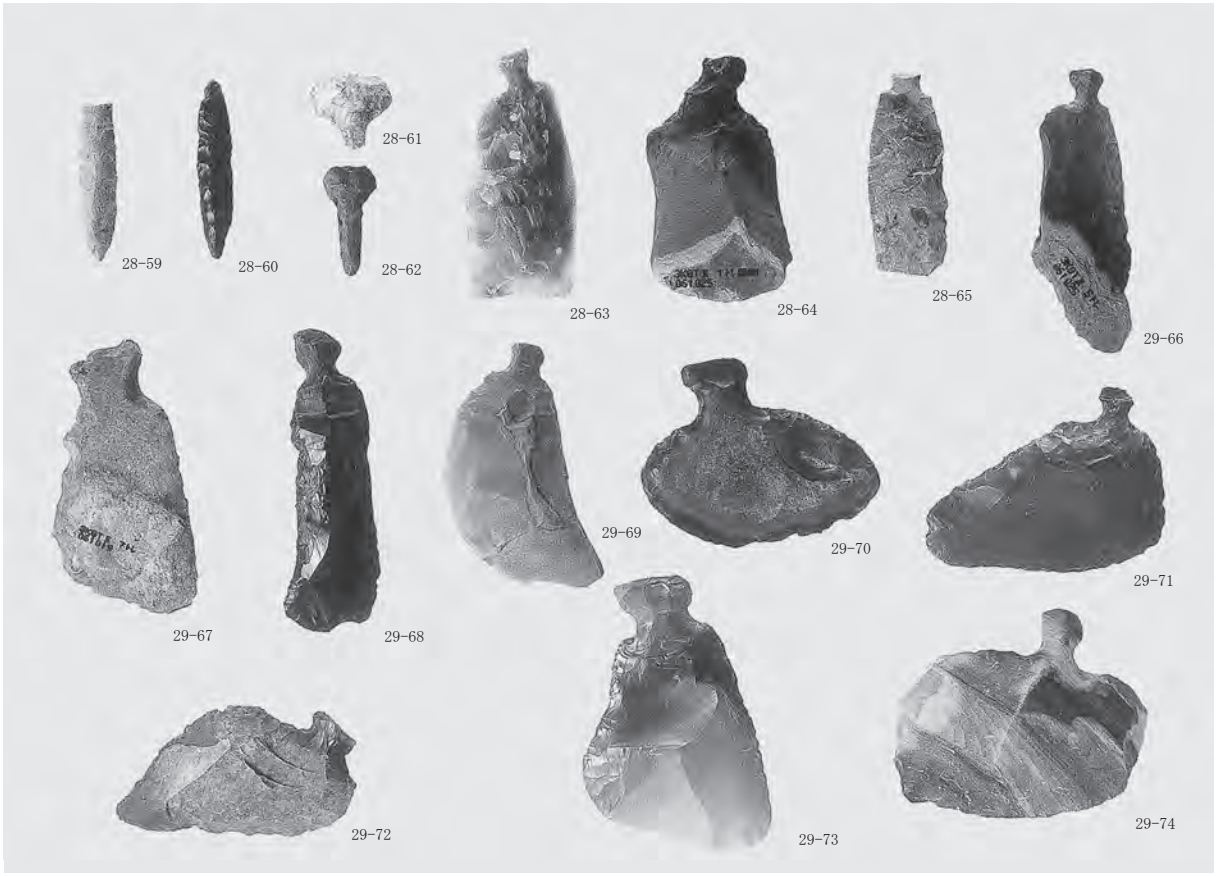
図版16





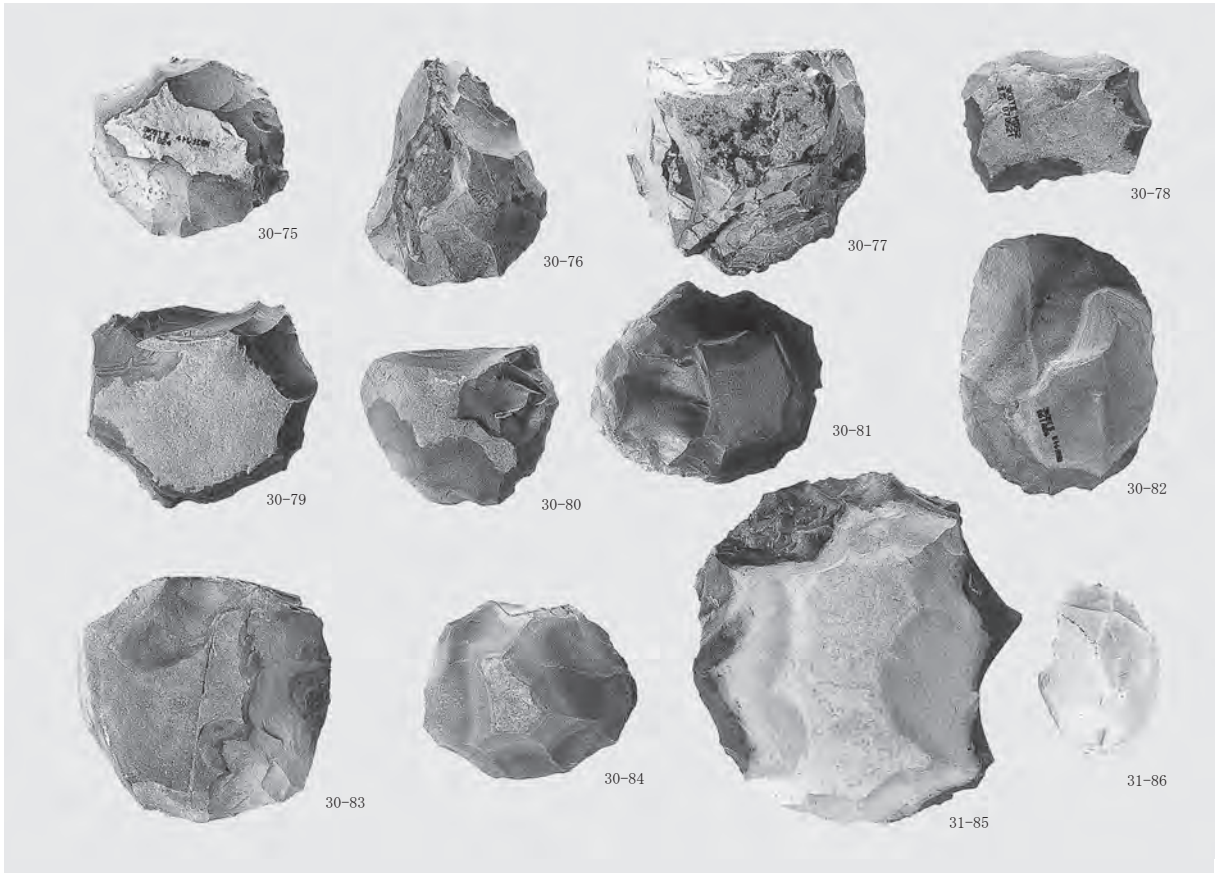
1　遺構外出土石器（２）

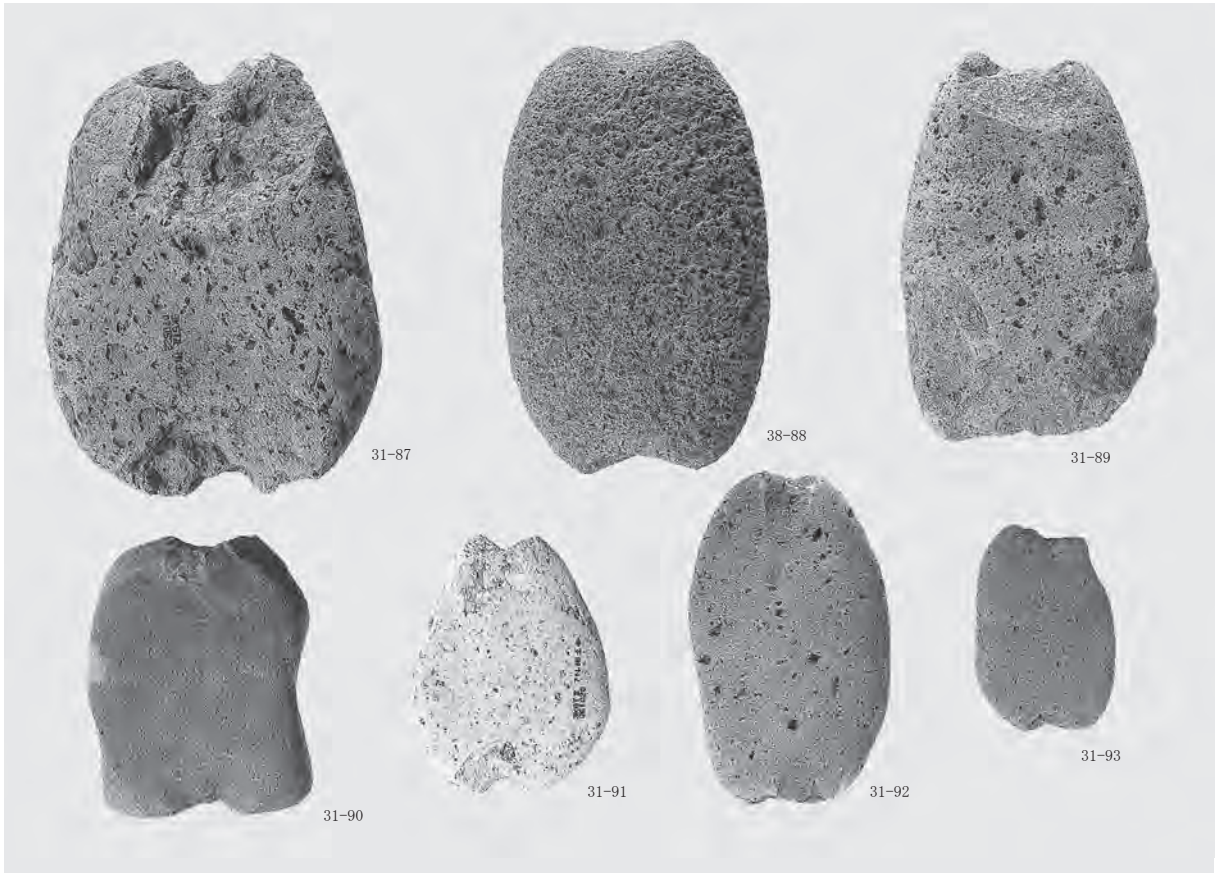

27-48
27-49
27-50
27-51
27-52
27-53
27-54
27-55
28-56
28-57
28-58


28-59
28-60
28-61
28-62
28-63
28-64
28-65
29-66
29-67
29-68
29-69
29-70
29-71
29-72
29-73
29-74

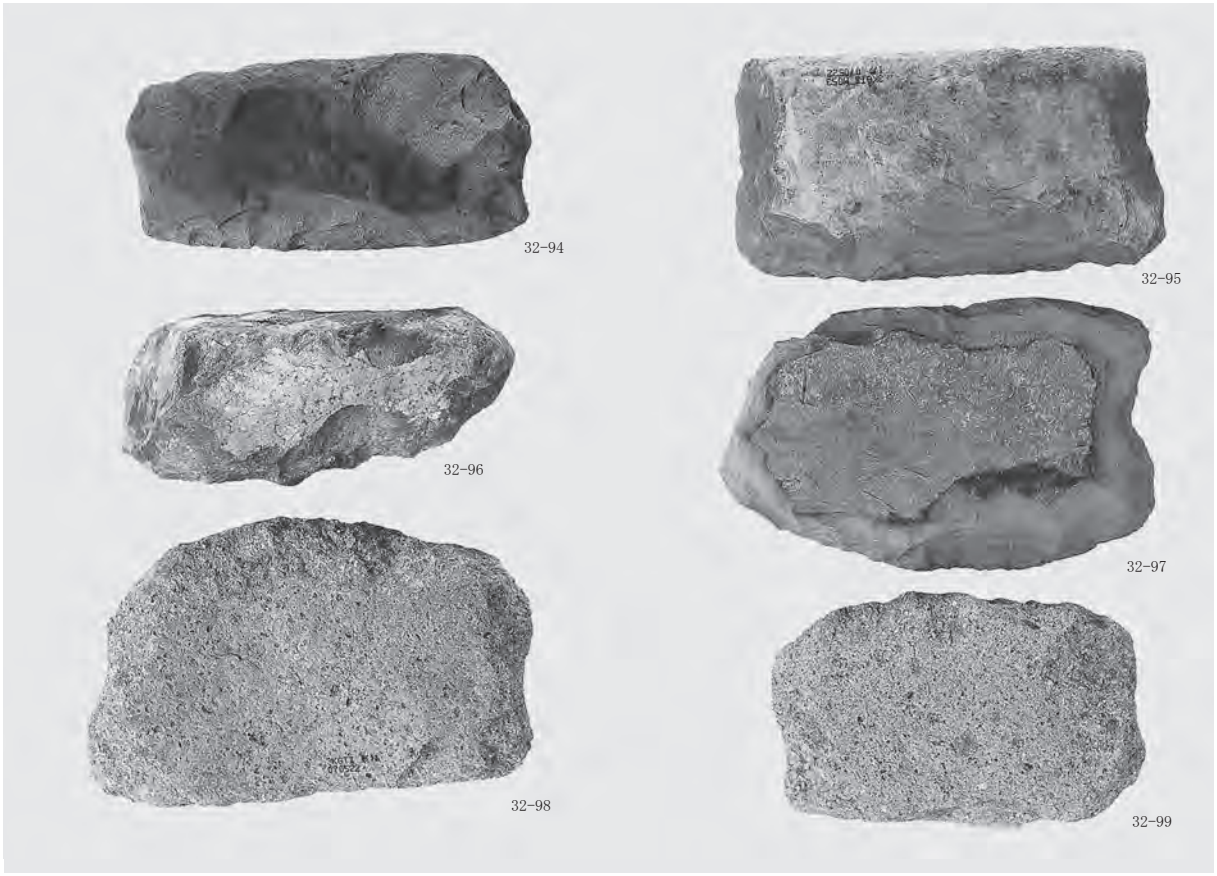
1　遺構外出土石器（3）

図版18



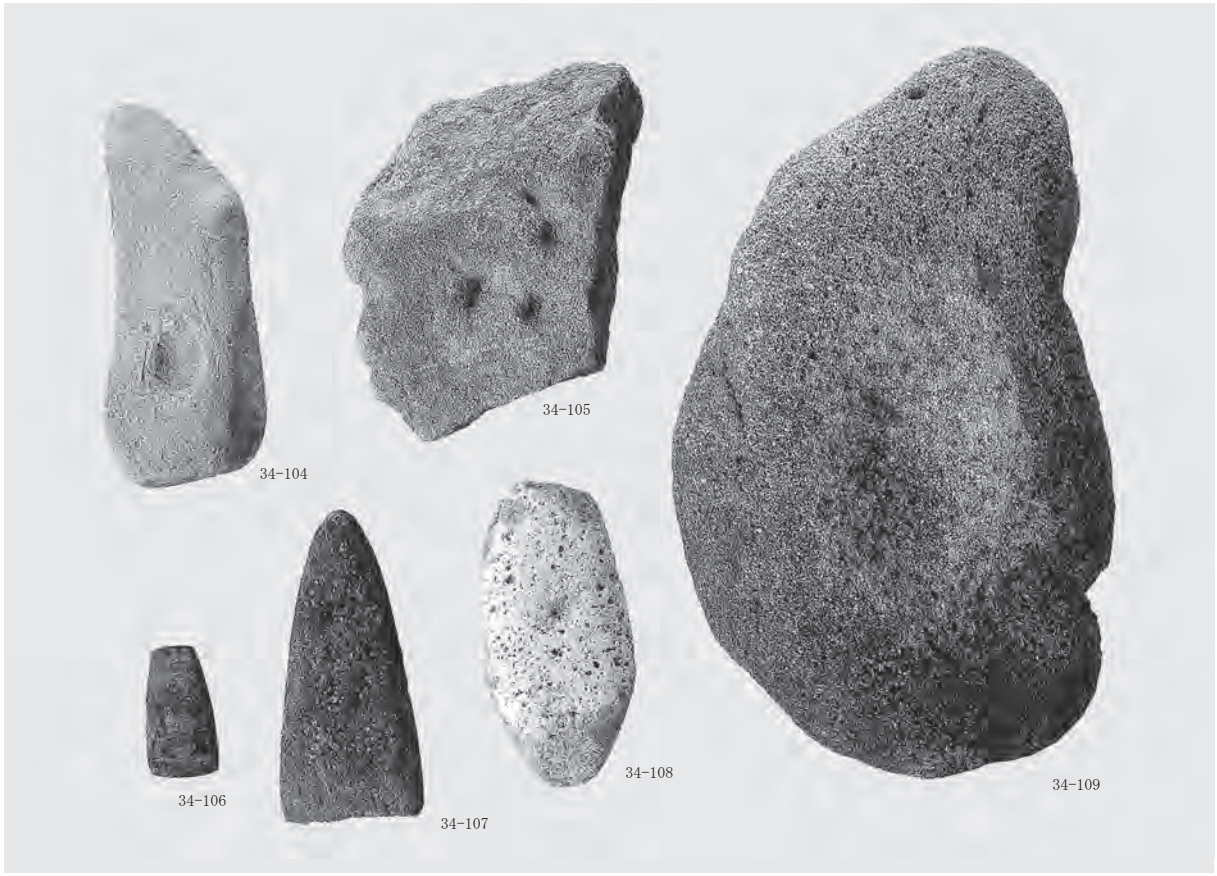


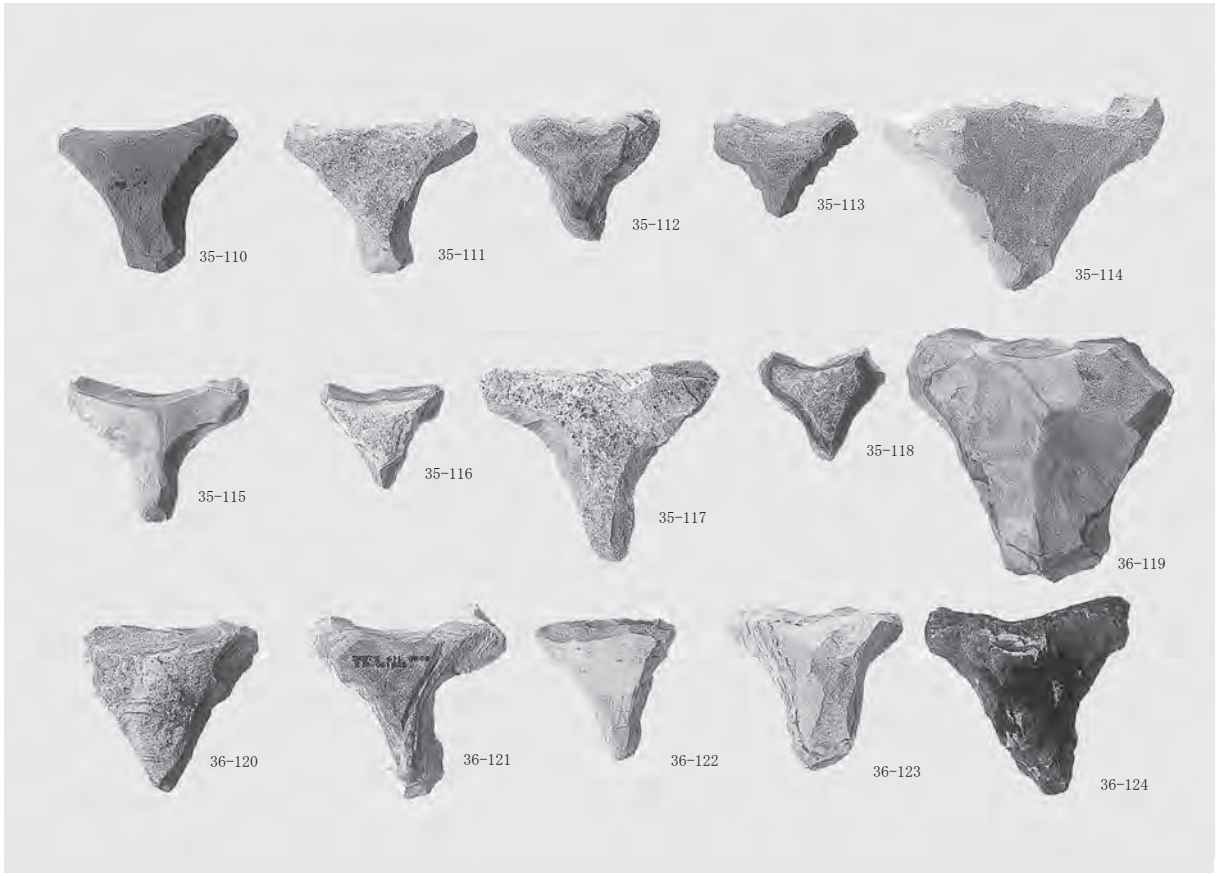
1　遺構外出土石器（４）



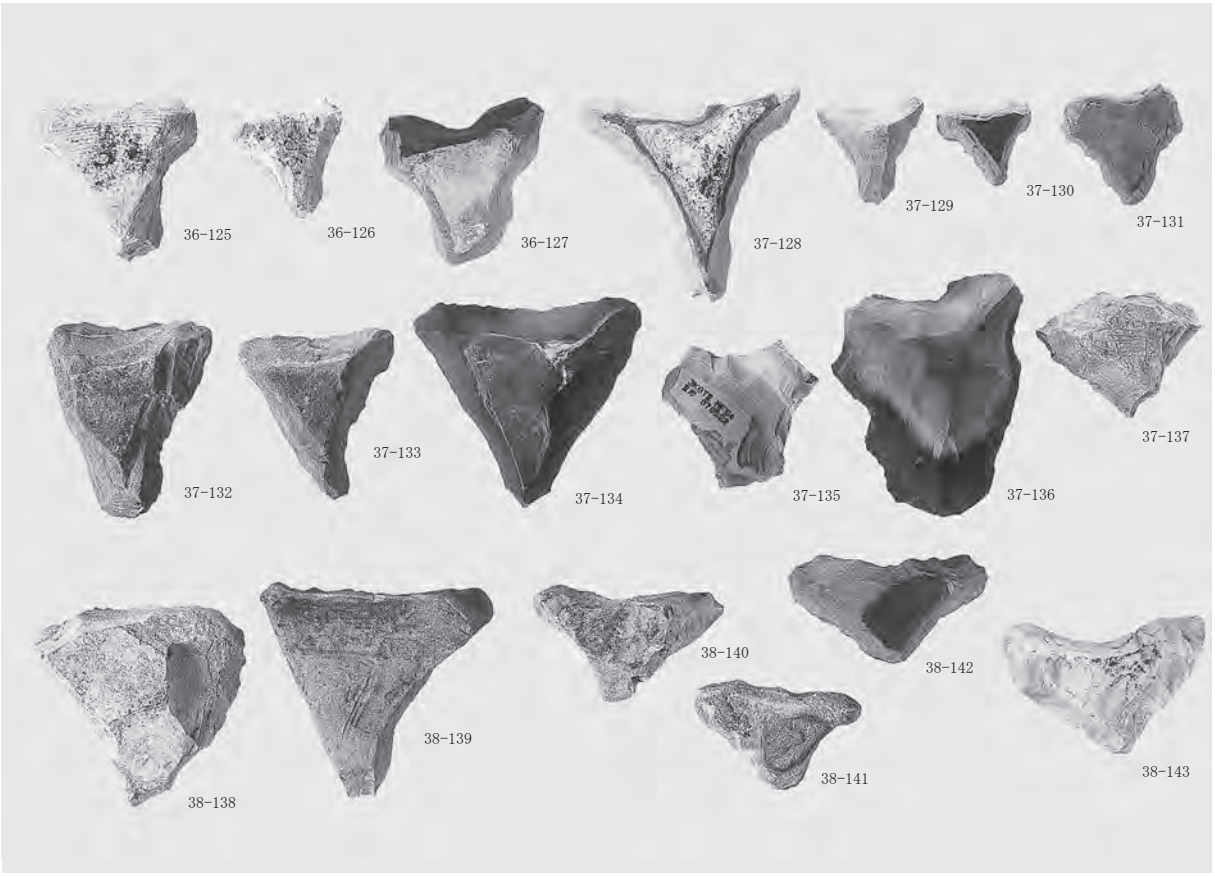
1　遺構外出土石器（５）

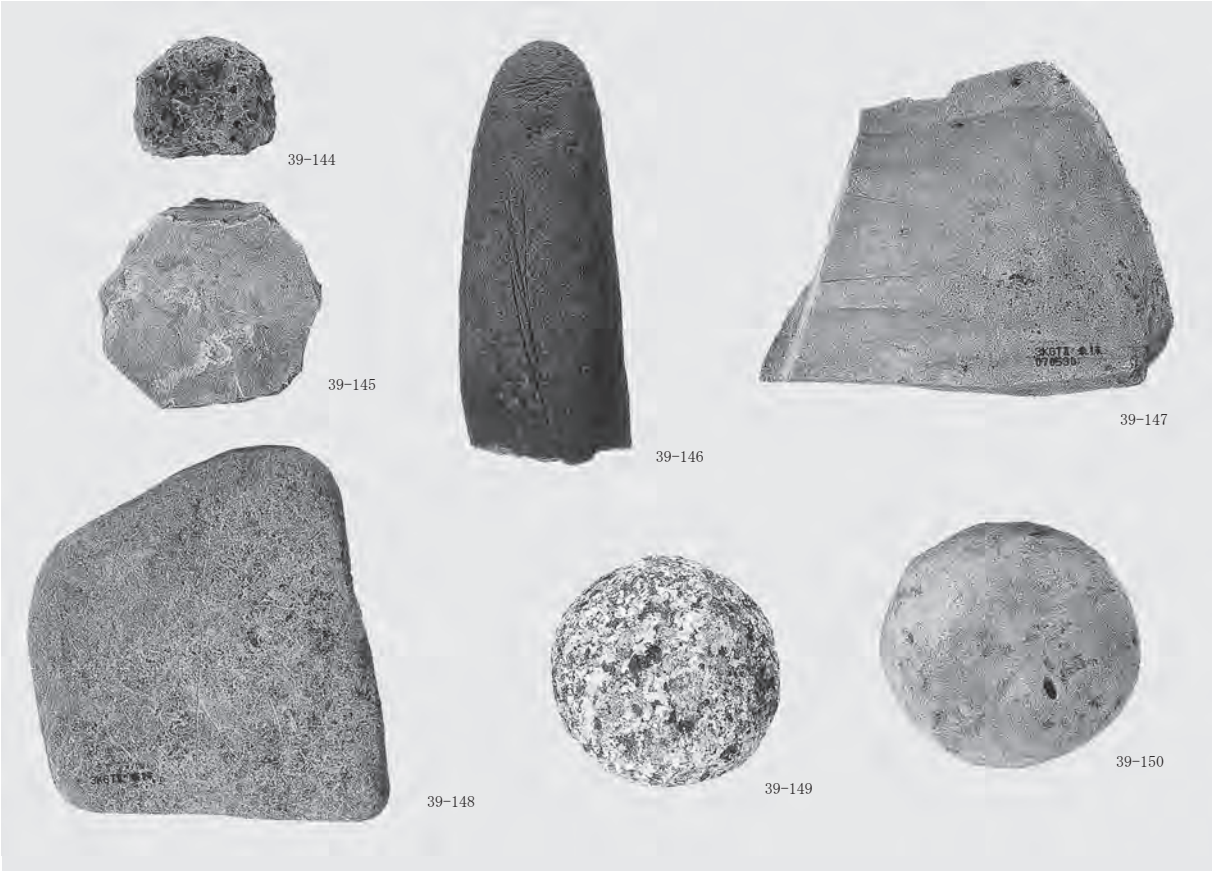
図版20





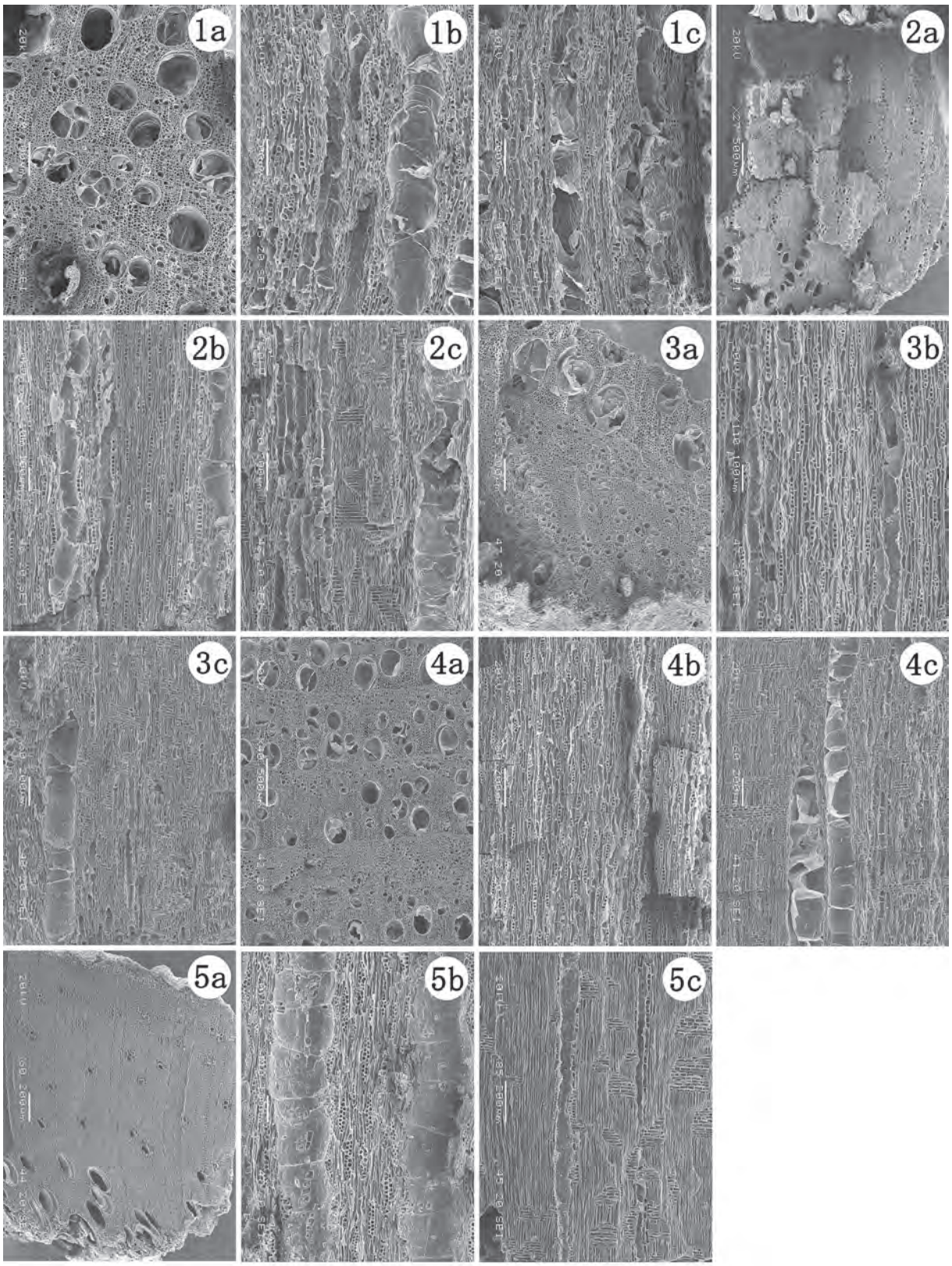
1　遺構外出土石器（６）


36-125
36-126
36-127
37-128
37-129
37-130
37-131
37-132
37-133
37-134
37-135
37-136
37-137
38-138
38-139
38-140
38-141
38-142
38-143


39-144
39-145
39-146
39-147
39-148
39-149
39-150

1　遺構外出土石器（7）

図版22



出土炭化材の電子顕微鏡写真（a:横断面,b:接線断面,c:放射断面）

1a-1c.クリ（№1）　2a-2c.クリ（№3）　3a-3c.クリ（№4）　4a-4c.クリ（№5）

5a-5c.クリ（№6）　5a-5c.トネリコ属（№2）

報 告 書 抄 録

ふりがな	かしわぎたいにいせき
書名	柏木岱Ⅱ遺跡
副書名	高速交通関連道路整備事業県道琴丘上小阿仁線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第442集
編著者名	山田徳道　藤本玲子
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014-0802　秋田県大仙市払田字牛嶋20番地　TEL 0187-69-3331
発行年月日	西暦 2008年７月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
かしわぎたいにいせき 柏木岱Ⅱ遺跡	あきたけんやまもとぐん 秋田県山本郡 みたねちょうかみいわかわ 三種町上岩川 あざかしわぎたい 字柏木岱15外	05348		40° 3′ 24″	140° 3′ 24″	20070515 ～ 20070612	700㎡	高速交通関連整備事業県道琴丘上小阿仁線建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
柏木岱Ⅱ遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡　２軒 掘立柱建物跡　４棟 土器埋設遺構　２基 土杭　４基 性格不明遺構　１基 柱穴様ピット　33基	縄文土器 三脚石器	三脚石器や頁岩の剥片が多数出土している。

要約	縄文時代の竪穴住居跡２軒、掘立柱建物跡４棟、土器埋設遺構２基、土杭４基などが検出され、縄文時代後期初頭を主体とする集落跡であることが判明した。 また、三脚石器が56点出土し、このうち６点には天然アスファルトが付着していた。多量の頁岩の剥片や縄文時代前期の遺物も出土した。

秋田県文化財調査報告書第442集

柏木岱Ⅱ遺跡

－高速交通関連道路整備事業県道琴丘上小阿仁線に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書－

印刷・発行　平成20年7月
編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802 秋田県大仙市払田字牛嶋20番地
電話 (0187)69-3331　FAX (0187)69-3330
発　　行　秋田県教育委員会
〒010-8580 秋田市山王三丁目1番1号
電話 (018)860－5193
印　　刷　株式会社　大館印刷